

文書原寸 縦 一七種 包紙原寸①縦二七・六種 横三八・五種

横四八・七種 ②縦 三〇種 横三六・八種

(大河内正實)
松平彈正忠
内藤(正誠)志摩守

三三三 將軍滯阪中旗本備ノ警戒受持区域指令

(端裏朱書)
「乙丑欵」

六月廿一日

徳川玄同殿
(茂徳)

御旗本御後備被仰出候付而は、

御在坂中御人数差出昼夜嚴重巡邏いたし、若怪敷者有之候ハ、見掛次第無用捨召捕可被申旨被仰出候間、其段可被申上候、尤場所之儀は大目付、御目付江可被談事、

戸田采女正
(氏彬)

御進発ニ付出坂、御用相勉度旨願之通被仰付候付而は

御在坂中、其方義茶白山辺江陣營を移し、最寄一円御取締向嚴重相心得人数差出昼夜巡邏いたし、若怪敷者有之候ハ、見掛次第無用捨召捕可申旨被仰出候、場所之義は大目付・御目付江可被談候、

御進発御供被仰付候付、其方共義
御在坂中ハ、難波橋向より堂島川最寄一円、御取締向嚴重相心得、人数差出昼夜巡邏いたし、若怪敷者有之候ハ、見掛次第召捕可申旨被仰出候、委細之義は大目付・御目付江可被談候、

榑原式部大輔
(致敬)

御在坂中、兵庫表江人数差出彼地御取締向一ト際嚴重相心得可申旨被仰出候間、通行之旅人をも嚴重相改、若怪敷者有之候ハ、無用捨召捕可申候、委細之義は大目付・御目付江可被談候、

酒井河内守
(忠博)

御在坂中ハ、播州路取締向別而厚相心得、通行旅人改方等嚴重相心得可被申付候、就而は取締筋為指揮、姫路表江往復いたし候義、可為勝手次第旨被仰出候也、

松平讃岐守
(頼聰)

御在坂中、西之宮江人数差出、彼地御取縮向一ト際嚴重
相心得可申旨被仰出候間、通行之旅人をも嚴重相改、若
怪敷者有之候ハ、無用捨召捕可申候、委細之義は大目
付・御目付江可被談候、

松平伊賀守(忠礼)

稲垣信濃守(長明)

内藤若狭守(頼直)

牧野河内守(誠政)

御旗本左右御備被仰付候付而は、

御在坂中、人数差出昼夜巡邏致し、若怪敷もの有之候ハ
、見掛次第無用捨召捕可申旨被仰出候、尤場所之義は
大目付・御目付江可被談候、

(稻川茂承)
紀伊中納言殿

御在坂中、御先備之御人数并右之付属之者共、都而石屋
村・御影村江御差出置、右村々御取締向嚴重相心得、通
行之旅人をも相改、若怪敷者有之候ハ、見掛次第無用
捨召捕可被申旨被仰出候間、其段可被申上候、委細之儀

は大目付・御目付江可被談候、

毛利淡路(元善)・吉川監物(経幹)江相尋之義有之間、大坂表江罷出候

様申達候付、道中筋無差支相通候様可被致候、尤松平安(浅野長則)

芸守家来付添罷越候筈ニ付、得其意其筋々江、為心得可

被申渡候、右之趣芸州より大坂迄、道中筋之領分知行有

之面々、并為御警衛之人数出之儀相心得、罷在候面々江

可被達候、

六月

六月廿二日

御差之

御脇差

御三所物

右從 京都罷越候付被下候、

右於御前拝領之、

文書原寸 縦一八糎 横一六八・三糎

(慶喜)
一橋中納言殿
(正外)
阿部豊後守

長崎ニ於テ「ゴロウル」商社ト薩州重役

トノ契約

白糸三万ドル買入ノ件

（端裏書）
「英大賀方三万枚」

一ドルラル三万枚、左之仕法を以て白糸買入之ため、ゴ
ロウル商社より請取之事、

一薩州家重役伊地知・浴陽之用として野村茲に取極ル儀
は、右ドルラル三万枚は、内部（日本諸国をいふ）に於て白糸買入

之ために相用ひ、其白糸之代ニ而、ゴロウル商社と一
致商法之談判をも可致、其上にて若シ同商社不好之時

は（第八月十七日
丑六月廿六日）より一ヶ月ニ老万之割合を以、備用金三

万ドルラル返済迄、又は右白糸ニ組合せ得ることを
相望む義、ゴロウル商社より明解致す迄、利足相払可

申、尤此末文之儀を取行ふ折は、右白糸は一致之商法
勘定にて、又利損は双方ニ相分つ事ニ致シ、上海又は

其他之場所江売捌之ため差送候事、

於長崎千八百六十五年第八月十七日

慶応元丑年六月廿六日ニ当ル

文書原寸 縦一六・五種 横一一五種

山階宮晃親王より島津中将殿へ

京地之状況を報す

（包紙ウツ書）
「島津中将殿 晃
机下」

（朱三ツ同シ）
□ □

御請済

（封紙ウツ書）
「島津中将殿 晃
玉机下」

此時下随分く御自愛くト存候、（島津茂久
修理大夫との）

（島津久治）
図書とのニも宜く御一声可給候、（薩訪越六）島津伊勢十分心配

感心致候、廟議ハ云々歎敷事も御座候、委曲ハ大和

より可申入候、（仲左衛門）江夏恐入帰国候よし、不苦候ハ、

御催はやくの御沙汰希入候事、不具、

秋暑其許御安康令賀候、晃無事御安慮可給候、京地は大

暑中は如煤雨、残炎反而如土用中ニ候、貴地は如何哉、

総而御安否承知致度候、(島津忠徳)備後との久々滞京御苦勞ニ存候、

伊勢以下在京之面々種々配慮察入候、

大樹公一条等御家人より申入候事と別ニ不申入候、此度

大和帰国候由、尚又逆ニ帰京ニ被成様御頼申入候、小家

ハ如何、定而無事ニ在国ト存候、

(近衛忠房)桜木老公・内府公御安福ニ候、命々御安心ト存候、大和

帰国ニ而不便候、呈一書候也、恐謹言、

六月廿七日

文書原寸 縦 一七糎 包紙原寸 縦 三〇糎

横四八・六糎

横三八・三糎

一三五七 御納戸支払不足ニ付増額金伺出及指令

一三五七ノ一

金四百兩

内式百七拾五兩重

外ニ金六百八拾六兩三歩

錢三千六百貫文

右式行御鷹方并御差分高所務代銀之内より

右は御納戸蔵諸御払金、文政十三寅年御金割被定、壹ヶ

年金千五百兩、壹ヶ月百貳拾五兩宛御入付相成来候処、

逆も引足申丈ケニ無御座候得共、

御参府年は諸払も相少く、夫故彼是繰合、右御入付金ニ

而御用弁相成来申、然処当分より御在国勝、殊ニ兩度之

御湯治

御光越、且は此以前より御腰物方并御持筒方其外諸向何

篇諸払相崇、其上去ル亥年騒働之砌、支配下之もの共類

焼、又は細工人共不時上京等被仰付候旁付、御取替銀等

余多有之、就中近年は諸色高料、夫故右千五百兩ニ而は

引足不申、月々御入付之株も速ニ御入付無之、無抛右所

務代銀之内より取替相払置、所務代銀之儀は難被差欠御

金筋ニ而御座候得共、差掛之儀ニ付、前条通取替相成儀

ニ御座候間、いつれ右株々返銀入付無之候而は不相成儀

ニ御座候、兎角千五百兩ニ而は逆も引足不申儀は現在差

見得申候得共、猶又為御見合月々入払之并シ為仕候処、

張紙之通ニ而、沓ケ月過分ニ引足不申、殊ニ近年諸色沸

騰ニ而荷作具は勿論、不依何色高料ニ御座候付、無抛取替

相成儀ニ御座候付、右御差分銀之儀は格別成御金筋ニ御

座候間、別段外書之通、御入付相成候様被仰渡度、左候而、

是迄月々百弍拾五兩御入付金之儀も今弍百七拾五兩被相

重、都合四百兩ツ、御入付無之候而は御用弁難相成候間、

是又御入付重被仰付、月々右之通御入付相成候様被仰渡

度奉存候、左様御座候ハ、折角御費筋無之様、猶又精

微ニ吟味仕、諸事嚴重行届候様可仕、此段申上候、以上、

但増減之儀も御座候は追々可申上候、

御納戸奉行

丑六月

山口彦五郎

花 鎌 藏

篠崎 甚七

中山甚五兵衛

(付紙)

本文付

一金弍千六百四拾壹兩弍歩

錢ニシテ弍万三千七百七拾三貫五百文

兩付九貫文替

一錢百八貫七百弍拾九文

二口

合錢弍万三千八百八拾弍貫弍百弍拾九文

右戌三月より亥八月迄拾九ヶ月分御納戸払

右付沓ケ月分并

錢千弍百五拾六貫九百五拾九文

金ニシテ百三拾九兩弍弍歩弍朱と三百三拾五文

兩付九貫文替

内金百弍拾五兩

錢ニシテ千百三拾五貫文

右月々御入付本

差引

錢百弍拾壹貫九百五拾九文不足

文書原寸 縦一四・五糧 横二七・八糧

一金五百兩尅歩弍朱

錢ニシテ四千五百三貫三百七拾弍文

但兩付九貫文替

一錢弍万五千三拾五貫四百八拾文

二口

合錢弍万九千五百三拾五貫八百五拾六文

右亥八月より丑三月迄拾九ヶ月分御納戸私

右付尅ヶ月并

錢千五百五拾四貫六百七拾尅文

金ニシテ百七拾弍兩弍歩弍朱と尅貫四拾七文

内金百弍拾五兩

錢ニシテ千百三拾五貫文

右月々御入付金

差引

錢四百拾九貫六百七拾尅文不足

一金七百弍拾弍兩尅歩尅朱

錢ニシテ六千五百貫八百拾弍文

但兩付九貫文替

一錢尅万八千六百三拾八貫百弍文

二口合

錢弍万五千百三拾八貫九百拾四文

金ニシテ弍千七百九拾三兩弍朱と七百八拾六文

右亥八月より子七月迄拾弍ヶ月分

金千五百兩

錢ニシテ尅万三千五百貫文

右拾弍ヶ月分御入付金

差引

錢尅万千六百三拾八貫拾四文不足

右之通大概之并算当仕為御見合差上申候、以上、

丑六月

御納戸奉行

一三五七ノ二(一三五七ノ一)号文書ノ行間ニ朱書シタモノ)

本文丑七月廿六日、島津求馬・山之内作次郎(貞忠)より、いつ

れ此通無之候而は御用弁難致筈、尤之吟味付、表向差出

候様との事ニ而、甚五兵衛より伊集院静馬江差出置候事、
文書原寸 縦一四・五糎 横一四〇糎

一三六 御納戸奉行ヨリ御納戸蔵役人へノ賞与ニ
付伺出及指令

一三五八ノ一

御納戸蔵役人

右は当八朔交代被仰付、左候而、以来老ケ年宛之交代被
仰付度奉存候、尤是迄御蔵改方之儀、三・八月御徒目付
并当座書役立会金銀錢致改方儀ニ御座候得共、御勘定所
ニ而改引合等全無御座候、然外此節御納戸御改革被仰付、
諸事一向敵重取扱綿密行届候様、分而被仰渡趣承知仕候
付而は、右改方之儀は是迄之通ニ而、以来御勘定相遂候
節、於御勘定所引合方被仰付、御当地御蔵々同様過物は
御取揚、不足は利銀上納被仰付候ハ、別而御取締可罷
成儀と奉存候間、其通被仰付度、乍然当分蔵役相勤居候
央より、猶と右通被仰付候而は、旁混雜可仕は案中御座

候間、当八朔交代之上、来寅三月改より以来右通被仰付
度儀と吟味仕候、左候而、此節より何篇御蔵出入品等敵
重之御仕向被召替候付而は、蔵役共一涯入念昼夜骨折仕
候儀ニ御座候間、首尾能相勤御勘定相濟候は、蔵役江老
貫八百目、手伝共江七百目苦勞銀被成下度儀と吟味仕候、
是迄蔵役之儀は御參勤御供御跡荷才領等被仰付来候而、
夫丈ケは余勢も旁過分ニ為有之由御座候得共、以来は其
儀も全無之、且御改革付而は多端之御用向敵重之取扱ニ
而、就中
御召反布之儀
御手許御用格別成御品々取扱仕、昼夜ニ相掛不時御用も
御座候付、兩人繰廻不明様每晚泊番仕、別而致骨折候付
而は、いつれ夫丈は御取訳不被成下候而は、往々懇望之
者も有御座間敷、勿論金錢入払之余勢可相成儀も無之候
付而は、自然少給之苦勞銀ニ而染付薄、万一懇望之者も
相少罷成候而は、別而不都合之儀ニも御座候間、苦勞銀
右通被成下度儀と奉存、旁右通吟味仕候間、此段申上候、

以上、

但此以後

御參勤等被為

在候節は、猶又其節何分吟味仕可申上候、尤

二九御納戸藏金銀錢改帳之儀、同様於御勘定所引

合方之儀被仰付度

二九御納戸奉行江申談申上候、

御納戸奉行

丑六月

山口彦五郎

花 鎌 藏

篠崎甚七

中山甚五兵衛

一三五八ノ二(二三五八ノ一号文書ニ朱書シタモノ)

申出之通申付候

七月 右衛門

此表申出之通被仰付候条、如例可被申渡旨、御差函ニ

而候、以上、

寅七月十三日

御勘定奉行衆

御納戸奉行

文書原寸 縦一四・四種 横二二〇種

一三六 中路権右衛門ヨリ内田仲之助等へ

西国諸島浮浪取締、長州激徒鎮庄ノ件等

一三五九ノ一

即今浮浪之徒激起し、航海屯集之姦謀も有之哉ニ相聞候間、西辺筋隅々諸島一際取締向厚相心懸、若不審之者も有之候へ、嚴重処置可致候、就中对州表之儀は、朝鮮ニ隣候国柄之儀ニ付警衛向ニ至迄、猶更嚴重ニ可心得候様可被致候、

六月廿四日御達

一三五九ノ二

〔^{戸田忠憲}〕本家越前守儀、今度国替之儀 御沙汰御座候処、格別之

以 御憐愍延引之旨被 仰出難有仕合奉存候、右不取敢
御礼申上候、以上、

六月十九日

戸田大和守 ^{〔忠憲〕}

一三五九ノ三

肥後

上田久兵衛

因州

安達精一郎

備前

花房虎太郎

成田太郎兵衛

右一藩ツ、^{〔阿部正外〕}閑老豊後守様旅宿江被 召出、直々演舌之

趣、長防弥末家之内、当所迄被召登御札問可有之御評定、

先達而已来之手続ヲ以芸州より岩国江此度之趣段々寄而

宇和島より徳山江右両家江御達可有之処、表向ハ以使差

立候方可然哉ト申同役も有之候ニ付、先御見合相成候得

共、昨今ニは定而 御沙汰も可有之、弥両家被召登候而

御札問之上、正激之徒明御札之上、激徒共大勝手限リニ

而追討可致哉、又ハ 公辺より御追討ニ可相成哉、其上

ニ長州家之処置可有之趣意ヲ以被 仰渡、且貴藩見込等

之儀ハ無腹藏承度之由、御懇之御意有之、誠ニ以下情ニ

相徹し候御直達ニ依而三藩共ニ不一方感服致し、斯迄御

寛大之御処置ニ被為 在候上ハ、主人始私共ニ至迄、何

之見込等も可有之哉ト致言上退出、

右之通今日伝書致候、依之申上候、已上、

中路権右衛門

内田仲之助様

吉井 幸輔様

〔本文書ハ慶応元年トスルモ慶応二年ノ誤リカ、忠義公史料ハ

慶応二年トスル〕

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第四卷第一二六号

文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦二八・八糎 横二〇・三糎 二枚

一三〇 人吉藩士犬童平兵衛等ヨリ同藩士米良

主膳へ

人吉藩騒動善後策ノ件

以手紙啓上仕候、秋暑強御座候処益御安泰被成御座珍重
奉存候、然は此節小川小藤太・甲斐哲弥被差遣被仰聞候
趣、委細承知仕候、此儀は去冬此表江御出之節、篤と御
熟談申上置候通之儀ニ而、別段申上候筋茂無御座候、尤
先般亀之助様薩州御出之儀御止申上候儀は、御手前様御
留守中故、先御見合御座候様ニとの儀ニ而御座候、此儀
も三郎左衛門其表江罷出候節御咄申上置候事ニ御座候、
扱又四人、是迄致白状候儀申上候様被仰越候得共、此義は
大切之儀ニ而書状又は御使等ニ而申上候儀出来不仕候、
尤四人御裁許致延引候様可被思召候得共、段々
皇武被仰出候茂有之、長州一件も未一向不相分候ニ付、
取計方も見合居候儀ニ御座候付而は、御不安心之儀ニ御
座候は、鳥渡兩三日計茂御逗留之積ニ而御出御座候へ、
委細御安心ニ相成候様御熟談可申上候間、左様御承知可

被下候、尤右一件

皇武江御届等ニ相成候而は、極々御手数数茂相懸り候儀ニ
御座候、此儀茂此表江御出之節御咄申置候通、左様不相
成事穩便取計之儀ニ致候事故、手間取候事ニ御座候、左
様思召可被下候、先は此段申上度如是御座候、尤来ル廿
七日御館江先御移徙被仰出候間、此方茂取込中荒々申上
候、早々、以上、

七月十二日

犬童平兵衛

波谷三郎左衛門

菊池七郎左衛門

万江長右衛門

米良主膳様

貴榎下 拝呈

文書原寸(折紙)縦一四・四糎 横四〇・五糎 二枚

一三一 横浜ニ於ケル「ジャパンプライムス」発刊

第一号記事

兵庫開港ヲ急務トスル「パークス」ノ意見

(裏紙)
「日本新聞

開板第一号」

文久三年癸亥の秋より以来、社友会訳して同好に頒ちし日本貿易新聞の原本、今年五月に至りて横浜の印刷局に滞る事ありしかへ、暫く中絶せしに、此度彼地に於てジャパンタイムスと号し、再び刷出す事を始めしによりて、吾輩亦従前の体裁に倣ひ、緊要の事件を抄訳し、以て同社に伝ふ、但し今茲、原本の号数改まれるによりて、訳本の名も亦改めて、単に日本新聞と題するものなり、

慶応元年秋八月

訳者識

日本新聞第一号

西曆一千八百六十五年九月八日

我慶応元年乙丑七月十九日

横浜開版各月定価
洋銀貳元

当港に滞留せる英国女王殿下の欽差全權使臣(ハリ・スミス・パークス)ス・バルケスより蚕卵貿易の一条に付き、今日同社中へ報告する廻章左の如し、

第九月六日我七月十七日

英国コンシユル勳方マルキュス、フロウエルス花押以廻状致啓上候、然ハ日本にてハ近頃貿易物に蚕種を一切差出不申、我商人共殊之外不都合之趣申立候ニ付、其段御老中衆へ及掛合候処、早速開濟相成、右之品当港へ速ニ被差送、以前之通他品同様聊差支なく自由に交易いたし候而不苦旨、其筋より急便を以被申達、昨夕右来紙致落掌委曲得其意、向後大ニ都合宜敷と大慶いたし候、此段一同江及通達候、以上、

一千八百六十五年九月六日ハルリー・ス・バルケス

花押

○
方今日本全權の役の役所にて相饒する事件許多有之と雖も、其内尤モ因循なし難き条件ハ、近々大坂の兵庫港を

開く事にして、是を専務として評議す可きの要領なり、兼てより外国人の渴望せし如く、日本政府より兵庫開港(マコ)の許容を得るに至り、弥其市街に旅館を設け、在留して自由に交易を成すに於てハ、其以前予め適當の法則を定め置かずんバある可らず、其法則を定む可き二ヶ条を此新聞紙の最初に記載する所以ハ、我等是を甚重大の事件と考ふるが故に、先づ之を筆録して以て看宦に示さんと欲するのミ、

第一条は日本の国政に關係し、第二条ハ日本と外国との貿易上に拘りたる事件なり、故に日本役人等ハ早々相謀りて其評議を決す可き事なり、若し能く頑僻の旧習を一變し、因循の処置を行ふ事無きに於てハ、仮令此後貿易上に如何様の事件ありと雖も、日本国の為メに不都合なる事無く、却て我商人等の希望するより大なる幸福を得るに至る可し、

先年以来外国人ハ彼ノ兵庫港を開かしめんと欲し、是まで數度談判を為すと雖も、日本にてハ殊の外差支ある由

を報告し、屢々其苦情を述へて、一千八百六十八年戊辰まで開港の猶予を請はるゝ、「」によりて我等も余儀なく其儀を承引せり當時海陸兩軍の兵威嚴整なる外国の全權等ハ、日本にて如何様の不都合あるとも、以前取結びたる条約の如く、押して兵庫港を開かしめんと欲し、又応接の時宜によりてハ、一千八百六十八年まで猶予し、其期限に至りてハ、弥開港せしめんと欲せり、因て我等これを推考するに、開港の遅速ハ、素より日本の都合に依る可き事なれとも、畢竟之を開くの權ハ自から外国全權等の意に帰する事と思はる、

此節外国全權等の役所にて専ら會議する所は、右に記載したる開港の一件にして、其論二様あり、其一は方今日本に甚大なる差支あり、余儀なく開港する事能はざるを察し、期年まで穩に猶予を成す可き欵、又一は我等一時も早く開港を希望するが故に、談判の模様依てハ、海陸兩軍の兵勢に拠て、之を速に決せしむ可き欵の論にして、最緊要の事件なれハ、未タ何れとも評決せざるなり、英国政府ハ、日本の交際貿易諸件に付て、其国より許多

貴重の宦人を初メ、其他付属の人々を送り越し、是を拂取らせんと欲すれども、唯永々滞留せるのミにて、更に其儀も思ふ俛に行届かざる故に、甚た不快に思へる様子なり、

(併カ)

日本在留外国外国の諸商人ハ、常に兵庫の開港を渴望すと雖も、弥日本にて其港を開くに於てハ、如何程節儉を為すとも相応の費用掛る可けれバ、早今より其失費を恐れ氣遣へるなるべし、

○

法蘭西の蒸氣軍艦船号ドブレイ、今月七日我七月十八日入津せ

しに依て、一二の雜報を得たり、左の如し、

和蘭国の世子、英吉利女王の次女ヘレナ娶る可き約束漸く整ひたり、

日本国より製器術に付て、和蘭に諸事件を託せられたり、亜美利加合衆国の大統領ジョンストン位を退き、議政官スタウントンも職を罷められて、プレストン・キング暫く其代を勤むと雖も、終にハセクリテリー官シワルドに

其職を譲るなるへし、プリンセ、ハロルド、アゼロット、シュラットの四人は、第七月七日我閏月十五日に死刑に処せられ、ミユッド・アルノルド、オ・ローグレンの二人は獄に繋がれたるよし、

南方のセクリテリー官なりしテレンホルムは赦されて、獄を出たり、又南部に於て、白人と黒人との争闘ありて死傷頗る多かりし由なり、ヒラデルヒヤ府に於てハ、文官・武官の評議紛々として一決せずと云、

在横浜 日本新聞局 アルフレド・ハットン 輯刻

春田与八郎訳

柳河春三校補

冊子原寸 縦二四糎 横一七・三糎 七枚

三三三 長州処分ニ付吉川監物等ヲ大阪ニ御召ノ

件

長防之義、早々寛大之処置可被取計旨、從

御所被

仰出候付申達候義有之候間、末家之内耆人吉川(鑑物)、

別ニ家老耆人致上阪候様、毛利家江可被相達候、

舌代

別紙之通、今晚(板倉勝静)板閣老より御澤御座候間、写入御披見

候、尤未タ国元江報知不仕候間、御内密云々、

七月廿四日

辻

文書原寸 縦一五・七糎 横五〇・五糎

三三三 園田彦左衛門小倉ヨリノ報告

長州再征ト長藩士ノ動靜

(端書、朱)

乙丑七月廿七日

小倉より
園田彦左衛門

此節御進発之御模様并長州動靜向、先達而御届後

承得候形行左ニ申上候、

一 此節御進発ニ付而は、長征之儀は素より被仰出候通之

事ニ而、迅速御所置ニ茂可相成之処、是迄御猶予之御

模様ニ而、乍漸先月廿三日、岩国・徳山御呼出之時宜

ニ相成候段は、先達而御届申上置候通ニ而、是迄紛乱

之国々茂有之、畢竟幕威相衰候処より右次第ニも成立

候付、先此節は大兵を以浪華江被為在御入城、御伐長

を専ニ被仰出、其勢ひを以異論之国々自然と以前之通

為致帰服、其機会を以、御征伐不相成候而は、防長は

兎も角茂人心不折合との御論決相成、御下坂之上、各

国之形勢、彦根・会藩又は長崎御奉行等江手配を以、

只管御探索御聞取之廉々を以、御深蜜周旋之御手数も

有之、右様之処より、筑前・久留米は勿論、因備等之

儀も兵威を恐伏いたし、国論追々転変いたし候処より、

尚更幕威再興之向ニ成立、既ニ筑前御処置も相変、過

激之徒御取扱ニ相及、右一卷ニ付、爰元出張塚原より

筑藩岡村文右衛門と申者召呼、尋問之上逐一聞届、美(黒田齊博)

濃守様江何そ御臆申ニ而は無之候へ共、此上は筑前

一 統穩和可成立旨、別而褒賞いたし候由、

一 長防之儀、専外夷と和親之取沙汰有之、此節御再討ニ付、荷胆之訳も可有之哉、精々及探索候処、於馬關一昨年来及戰爭候儀は、基日本

帝王より攘夷之御命令有之候処、諸藩一統致蜘蛛居、

長州は武勇之國柄ニ而、一旦命令通及戰爭候へ共、援兵等も無之、難致敵対処より和睦いたし候義ニ而、全

私戦ニ無之との趣致申分候由、然処右命令之趣意丈は

相分候へ共、通船江暴発之次第聞得かね、夫故未和親

を結ひ候と申程之儀は無之、尤償銀等もいまた不差出

候付、此節御征伐之上、長防之地面幕府江御引揚相成

候ハ、江戸表ニ而償銀可相受取、自然諸大名之領地

ニも相成候ハ、其向より為差出候儀共、当然之事ニ

而、勿論四百万トル程は不相受取候而は、不聞濟含之

由、尤御伐長ニ付加勢いたし可吳承候趣も有之候へ共、

合従國(衆)一統より日本政府江致約定候訳柄ニ而、長州論

儀通ニは難応段、英人於長崎相咄候由、

一 岩國・徳山御呼出之儀、先達而申上置候通、大坂詰芸

州役々江御達相成候節、御沙汰之趣申達候上は、十五日・廿日位は出立日限御猶予被仰付度願出之通御聞濟ニ而、当月七日、右両所江は勿論、萩表江も右次第為

心得相達候由、然ニ右之趣奇兵隊共聞伝、則監物を山(吉川経幹)

口城江呼寄せ、数多之兵勢を以取囲、退城も不相成、

今以滞留之由、徳山之儀は当春戰爭之節、徳山御世子

を激徒共より討取、家臣共別而憤激いたし候へ共、奇

兵隊勢ひ甚敷、無是非黙止居候訳柄も有之、此節上坂

いたし候ハ、前条旁之次第も申立、弥以激徒共身上

差迫り候儀と申談、是以吉川同様取囲居候由取沙汰い

たし候、監物(毛利元重)・淡路(毛利元重)両人之心中にはいまた分かね候へ共、

基過激之者共ニは昨年武田溪雲斎(世)一列御取扱之先例も

案内有之、仮令大膳父子御寛大之御所置相成候而も、

奇兵隊之分は迎茂死は難遁存詰居候由ニ而、御征伐相

成候節は城を枕ニ必死力戦可致外無之、当五月廿七日

決議いたし居候由相聞得、右次第ニ付而は徳山・岩國

之儀、迎も可差出情合無之、左候而、長防之儀、激徒之支配と申程ニ相成、大膳父子・末家等も手ニ難及向ニ被伺申候、

一長州江以前より相求置候蒸氣船江過分之米積入、当月比より英国江相渉り、於彼地ニ右米并船迄も都而売払、右代料を以蒸氣大船隻艘買求、英人五人程雇入致帰帆、当分秋表ニ而大砲等鑄造いたし候由、

一石州津和野境江当春より陸台場築造いたし候由、就而は御征長ニ付、防戦之用意と相見得候段、同藩渡辺儀右衛門より承届申候、

一筑藩退役禁錮之者共ニもいまた御所置は勿論、喜多岡相手も分りかね、其外格別相変廉も無御座候、

右通ニ而、いまた不礎成ケ条も御座候へ共、承得候形行ニ而此段御届申上候、尚相変義は追々可申上候、以上、

丑七月廿七日
豊前小倉
滞在
園田彦左衛門

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第六六二号
文書下同文ナリ)

文書原寸 縦一四・五横 横三六七・二横

一三六 石垣銳之助上野良太郎ヨリ桂右衛門・

大久保一蔵・蓑田伝兵衛・西郷吉之助へ

留学生監督指導ノ件等 二通

(封筒)
一「大久保一蔵殿

蓑田伝兵衛殿

西郷吉之介殿

(封筒ウラ)
一「

石垣銳之助

上野良太郎

一三六四ノ一

於ロンドン府ソークケンシングトンホテルニ

千八百六十五年第八月四日我六月十三日

英国ロンドン府之

大学校大教師

エ・エッチ・ウキルレムソン江

君

一三六四ノ二

一 去月三十一日付之貴翰披見いたし候、偕薩州君公より

諸生一件

被差遣候遊學士拾四人、講学引立方之儀、万事御引受
給り、夫々適宜なる教師之処ニ差置、怠無之様教導為
致、且屢關札之上、精粗薩州政府御注進給り候儀は、
其時々長崎表ニあるゴロウル商社江被申送、同商社よ
り薩州方へ申送候趣向ニ致し度候、依之社中之司長た
る石垣君之決談を以、一ヶ年英金四百封度、貴下之煩
勞を謝んか為被差送候儀相違無之候、尤此約定ハ千八
百六十六年夏之中頃迄之取極ニして、其後ハ双方之相
談ニよるへし、

貴下之臣僕

ライルホーム

右約定相違あらんかため、拙者之名判据置候、

第八月四日

（新納久傳）
石垣銳之助

文書原寸 縦二種 横二七種

ロントンの大学校先生ウキレムソムと言もの余程人望も
有之、ヨーロッパニ高名之由、此者へホームより頼談ニ
および申候処、何事も容易受合、全く諸生之親分ニ而、
万事致指持候諸先生江何事も宜く致指南候様と之事ニ而
有之、先月初方辺より、追々諸所ニ二三人ッ、配宿相成
候而、毎日学校ニ出揃、夫々相応之業ニ相成候、此内よ
り参居候長人杯と違ひ、御國よりの人数は、何も本式之
仕立ニて至極評判宜く候、左候而、ウキレムソム方江年分
謝礼も一ヶ年ニ四百封度^{老封度}我金三兩余ニ相究候、是は誠ニ過
当之様ニ候へ共、何分此國之風儀ニも有之、夫等は心任
セニ相成兼候、乍然も日本之金子ニ比較いたし候へは、
四五拾兩位之割ニも候半、何分無致方仕合ニ候、偕又右
之如く、英之大学校先生とは余程重きもの之由、夫々万
事引受とは至極之事ニ御座候、誠ニ御威光ニ候、左候
而、西洋之風儀何事も一ヶ年ッ、限りヲ立候由ニ付、別

紙之通、ホームより証書遣候付、是ニ拙者之名判相加へ候、然処上野良太郎ニは学頭之処ニ而万事も引合相成候故、此度は拙者之名前ニ而取扱候へ共、此後は良太郎よりウキレムソム方江何事も引合相成賦ニ候、又来年夫々証書も改相成賦ニ候、因而ウキレムソムより諸生中学業之試ミ折々いたし、時々見聞之形行はウキレムソムより長崎コロウル商会江差向け、御国江御届申上候様と之事ニ候、

一長沢鼎事は、長崎コロウル之弟、拾三才之者罷居、是と一諸ニ入学いたさせ度之事、分而承り候ニ付、応其意差遣候、尤長崎ニ而初メ遠航之事を引合候時分より、少年之者ヲ分而相望候付、程能ク相對置候処、其儀今ニ連続、右様之次第ニ相成候故今更ニ断も難申入次第ニ而遣候、乍然コロウル之両親相応之老年ニ而、殊之外ニ叮嚀、実ニ直子如き取扱ニ相見得候、
一諸生年分被下方、○貳百封度 学頭 ○八拾封度ツ、番頭列 ○六拾封度ツ、平士列 ○百封度 出水

此者は是迄闇之諸生之教師ニ候へ共、最早夫々配宿相成候付而は、今暫時ニ而引取ニ候て可宜と候へは、其内滞在中右之通被下方、可然致吟味取究候、尤一統江被下方は、年分衣服料并小仕ニ候、学校之入費料又は送薬料等は別段御用心金見合置、其内より御構被下可然候、右之通ニ而年々遣之申候取組之事ニ候、追而何事も取究候賦ニ候、過当之被下方ニ相当候様ニも候へ共、何分諸色高料故、無致方仕合ニ候、已上、

我七月廿七日

石垣銳之助

(町田久成)
上野良太郎

桂 右衛門殿

大久保一藏殿

養田伝兵衛殿

西郷吉之介殿

文書原寸(折紙)縦一一・二種 横三三・二種

一三六四ノ三

〔封筒〕
「蠮睡君」

拙修」

其二

各国ミニストルヲ大坂ニ御招有之ヘキ之旨、既ニ諸藩ニ達シ、其旨ヲ奉シ候義は被察事ニ御座候、若今外夷輩之望ニ応シ、大坂・兵庫等之開港ヲ御許容アルトキハ、タトヒ往年彼等ヲ掃フノ赤心ヲ保ツト雖トモ、決テ其機會ヲ求候期無之、既ニ英之印度ヲ領シ及マデカスカ島、仏国羅馬宗ノ僧ニ欺カレン杯之類ヲ以押候トキハ、我カ神州起臥ニ関係スル重大之事許ニ御座候半欵奉存候、別紙一封ハ、今英議院列位ニアルローレンス・ヲリハントと云者、我宇宙間ニアル 神州之危愚ニ趣クコトヲ慨歎シ、

西曆三月十七日

上野良太郎

上

文書原寸(折紙) 縦二・九糎 封筒原寸 縦一・二糎
横 二・二糎 横 七糎

一三五 関研蔵ヨリ松田次吉?へ 一一通

「アームストロング砲」「ホウキツトウラルツ砲」及彈藥代償見積書

一三六五ノ一

アルムストロング口込大砲

十二ポント砲

價英金百五拾封度
(朱、以下同シ)「為金四百五拾兩」

但オップセット相添

二十ホント砲

同 式百式拾封度
「為金六百六十兩」

但同断

四十ポント同

同 三百五拾封度
「為金千五十兩」

但同断

七十ホント同

同 六百拾封度

「千八百三十兩」

但同断

但ボイス其外要具相添

「百四十二兩二歩三朱」

百五十ポント同

同 千五拾封度
「三千百五十兩」

二十ポント同

同 六拾卷封度拾三シルリ
ング四ペンス

但同断

但同断

「百八十四兩三歩」

三百ホント同

同 千八百封度
「五千四百兩」

四十ポント同

同 八拾五ポント拾八シル
リング九ペンス

但同断

但同断

「二百五十七兩二歩一朱」

〔付紙〕
「別紙鋼鉄船へ居付候大砲は、百封度之アルムストロングと相

七十ポント同

同 百拾五封度六シルリン
グ三ペンス

見得候処、此直段付ニ不相見得候付、七拾封度・百五拾封之

但同断

「三百四十五兩三歩三朱」

脱之
中間ニ依て比例致シ候処、凡百封度ニ而二千四百八拾六兩位

百五十ポント同

同 式百封度六シルリン
グ三ペンス

も可致哉、勿論此大砲之価も別紙問合ニ申越候通り、ハリソ

但同断

「六百兩三歩三朱余」

ン方より詠文相成候ハ、是以見当不相成候得共、為見合申
進候、」

三百ポント同

同 三百四拾式封度拾六シ
ルリング三ペンス

「千二十八兩一歩式朱」

彈丸數百之価

砲台

十二ポント砲彈丸

同 四拾七封度拾三シルリ
ング三ペンス

十二ポント野戰砲

同 百六拾封度
「四百八十兩」

同

但器具相添

二十ポント	同	六拾五封度 「百九十五両」	二十ポント	着発弾四シルリング 「為金二歩一朱位」	
四十ポント	同	八拾五封度 「二百五十五両」	同	六シルリング 「為金三歩式朱」	
七十ポント船砲台	同	百五封度 「三百十五両」	同	六シルリング三ペンス 「三歩三朱」	
百五十ポント同	同	百四拾五封度 「四百三十五両」	同	九シルリング 「一両一歩一朱」	
三百ポント同	同	式百三拾封度 「七百二十両」	同	拾シルリング 「一両二歩」	
スリ砲台			七十ポント	同	拾五シルリング 「二両一歩一朱」
七十ポント船スリ台	同	六拾五封度 「百九十五両」	同	同	拾八シルリング 「二両二歩三朱」
百五十ポント同	同	百五封度 「三百十五両」	同	同	式拾七シルリング 「四両一朱」
三百ポント同	同	百七拾封度 「五百拾両」	同	同	三拾式シルリング 「四両三歩一朱」
空并着発弾数巻ツノ価			三百ポント	同	五拾五シルリング 「七両一歩一朱」
十二ポント	同		同	同	六十五シルリング 「九両三歩」
空弾三シルリング六ペンス					

ノ

元込之砲ハ右之価ニ割五分相増シ可申候、

代銀払之儀は、御詔文之節三分ノ一、亦三分ノ一ハ半

成就之上、残り三分ノ一ハ都て成就之上ニ而御払入被

下候事、

荷造雜用等ハ右価之外ニ御座候、

(付書) 一別封御軍艦御詔文一条ニ付、愈々御掛合相成申候間、急便

より御仕出被下度奉願上候、已上、

丑七月廿八日

(五代友厚) 関 研蔵

松田次吉様 侍史

文書原寸(折紙) 縦二九糎 横三九・二糎

一三六五ノ二

巢中六角形

ホウキツトウヲルツ口込砲代価

二十ポント海軍鋼砲

英金三百五拾封度

(集、以下同シ)「我金ニシテ千五十兩」

三十二ポント同

同 五百三拾封度
「金ニシテ千五百九十兩」

五インチ半口径同

同 七百八拾封度
「金ニシテ二千三百四十兩」

七インチ同

同 千五百封度
「金ニシテ四千五百兩」

玉捧其外要具一式代価

二十ポント

同 六封度半
「金ニシテ拾九兩二歩」

三十二ポント

同 八封度
「金ニシテ二十四兩」

五インチ半

同 九封度半
「金ニシテ二十八兩二歩」

七インチ

同 拾壹封度拾五シルリング
「為金三十五兩貳朱余」

砲台代価

二十ポント

同 三拾四封度
「為金ニシテ百二兩」

三十二ポント

同 三拾九封度
「為金百十七兩」

五インチ半

同 五拾封度

七インチ

同

「為金百五十兩」
「七拾三封度」
「為金二百十九兩」

五インチ半

同

「三拾三封度」
「為金九十九兩」

スリ台同

七インチ

同

「四拾三封度」
「為金百二十九兩」

二十ポント

同

「八拾封度」
「為金二百四十兩」

実弾數百発之価

二十ポント

同

「拾六封度半」
「為金四十九兩二歩」

三十二ポント

同

「百拾老封度」
「為金三百三十三兩」

三十二ポント

同

「式拾六封度」
「為金七十八兩」

五インチ半

同

「百四拾四封度」
「為金四百三十二兩」

五インチ半

同

「五拾五封度拾式シリ
ング」
「為金百六十六兩三歩」

七インチ

同

「百七拾老封度」
「為金五百十三兩」

七インチ

同

「百五封度半」
「為金四百五十一兩二歩」

スリ台用之心捧并車一式

三十二ポント

同

「百拾封度半」
「為金三十一兩二歩」

空弾同

五インチ半

同

「拾式封度半」
「為金三十七兩二歩」

二十ポント

同

「式拾五封度」
「為金七拾五兩」

七インチ

同

「同拾式封度十五シリ
ング」
「為金三十八兩式朱余」

三十二ポント

同

「四拾式封度」
「為金百二十六兩」

ヘントスパイクス但木挺之類欵

五インチ半

同

「六拾九封度半」
「為金二百〇八兩二歩」

三十二ポント

同

「式拾六封度」
「為金七十八兩」

七インチ

同

「百五封度」
「為金三百十五兩」

	シャープネル弾同但着発弾欵		
二十ホント	同 六拾六封度 拾四シルリング 「為金二百両式朱位」	二十ポント	同 四封度半 「為金十三両式歩」
三十二ホント	同 百封度 「為金三百両」	三十二ポント	同 五封度 「為金十五両」
五インチ半	同 百六拾七封度 拾四シルリング 「五百三両式朱位」	五インチ半	同 六封度半 「為金十九両式歩」
七インチ	同 式百七拾八封度 「為金八百三十四両」	七インチ	同 九封度半 「為金二十八両式歩」
筋立テ円弾同		パトロン用之袋	
二十ポント	同 五封度拾七シルリング 「為金拾六両式歩余」	數百之価	
三十二ポント	同 八封度拾七シルリング 「為金二十六両式歩余」	二十ポント	同 式封度 「為金六両」
五インチ半	同 拾七封度 拾四シルリング 「為金五十三両」	三十二ポント	同 式封度半 「為金七両二歩」
七インチ	同 三拾三封度 「為金百両式歩」	五インチ半	同 四封度 「為金十二両」
鉄楯打鏑空弾		七インチ	同 八封度 「為金二十四両」
数巻之価		ルプリケーテキングウラツト	
		但油塗リタル栓之類欵	
		數百之価	

三十二ポント

同

三封度
「為金九兩」

ウードサボット但木栓之類欵

五インチ半

同

三封度半
「為金十兩二歩」

二十二ポント

同

老封度式シルリング
六ペンス
「三兩一歩一朱」

七インチ

同

六封度半
「為金十九兩二歩」

三十二ポント

同

老封度八シルリング
「為金四兩三朱」

(八寸付アル)
セコンデ付之ボイス

數百之価

五インチ半

同

老封度拾三シルリング
「為金四兩三歩三朱」

二十ポント

同

拾三封度
拾八シルリング
「為金四十四兩壹歩三朱」

七インチ

同

老封度拾九シルリング
「為金五兩三歩」

三十二ポント

同

荷造雜用之儀ハ、右価之外ニして、三分之一ハ御詔文
之節、残りハ成就之上、御払入被下候事、

五インチ半

同

文書原寸(折紙)縦二九纏 横三九・二纏

七インチ

同

管數百之価

三六 長崎出保商社組合米穀買入ノ件

(端裏書)

「一条考書」

二十ポント

同

拾八シルリング
「為金二兩二歩三朱余」

三十二ポント

同

一巻俵ニ付老兩卷朱ト式百七十六文ニ相迫り申候ニ付、

五インチ半

同

買入方精々相励、老兩之内ニ而買円不申候而ハ、御益

七インチ

同

銀相見得不申候、然ルニ当時近国益前後之直成、老兩

老步老朱錢迄も罷成、連茂此直段ニ而は、御引合相成不申候ニ付、暫買方御見合、追而新石相納候ハ、下落可仕欵、且右様之人氣、当七月式百十日之大風之勝負ヲ相考申候、殊ニ御滞坂ニ付訳而米穀高価、夫故諸国直段引合申候へ共、当秋近国之作式田七歩之年柄ニ而御座候間、肥前米ニ而凡三歩式朱位ニも罷成可申哉ニ奉存候、其節は御買入方可然哉ニ奉存候、若今通高料ニ而押通申候ハ、八木暫御見合、余品を以相渡申候ハ、却而御益キ相見得可申哉ニ奉存候、右は不限何品ニ都而彼国ニ相渡品を買捌候ハ、其内ニは買損仕候品茂御座候へ共、相当之利潤相見得可申欵と奉存候、尤美濃路・丹波・但馬辺江ハ白糸買方之手頼も仕置候、此方ニ而相応金高相禿可申候へ共、越後出張林徳方江も当節金拾万兩位も送り、尚此冬越年為致、八木彼地毎年冬向キハ下落仕申候間、老石前ニて式両老步より式歩位に迄、此冬買円、明春積下申候ハ、仮令大坂ニ而売捌申候而も、御利益ニ罷成可申哉ニ奉存候、何

分越後・箱館・佐渡辺ニ而彼地之産物買円方仕候方可然欵と奉存候、此等之段、得と出保江兼而御相談被遊、明春之品ヲ当冬より買入方仕候ハ、金子之都合向キ御相談被遊候儀奉願上候、

一長崎産物方組合商法之義ハ、別段趣法相立可奉申上候、
右は出保方商法迄を奉申上候、

丑七月廿八日

文書原寸 縦一七糎 横一五・三糎

一三七 久光公ヨリ伊達伊予守へノ返書草案

幕疑云々ノ件

久光公ヨリ堤右京大夫へノ返書草案

時候見舞

表裏認一葉

一三六七ノ一

季夏十日之芳墨相達辱拜読仕候、追日秋冷相催候処、愈御壮栄可被成御座奉恐嘉候、実ニ御互ニ御無音相過、不本意之至奉存候、貴国ニも多雨之由、弊邑ニも同前ニ御座候、扱 大樹公当時御滞坂、御処置如何と乍余計奉案

勞候、結局賢兄之御見留如何ニ哉、愚昧之管見不審千万奉存候、賢兄ニも例之幕疑之故御傍觀、却而御休暇之由御心事奉恐察候、併幕疑は愚生之半ニも至り申間敷と奉存候、僕ニも例之瘁所之上、炎熱ニ被犯臥牀勝ニ而、世務ニ疎情相成、残念至御座候、乍去却而逸予欤とも被考申候、先は貴答迄乱毫如此御座候、偏ニ御海容奉希候、以上、

七月廿九日

大簡

簡ハ森也
御一笑可被下候

弄鏃賢兄

貴答

二白、御端書辱拜誦仕候、且蒸艦云々御別紙名書委細承知仕候、以上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第四卷第一七七号
文書ノ一部ト同文ナリ)

一三六七ノ二(全文朱書)

堤家

六月九日之芳輪相達辱拜誦仕候、先以追日秋冷相催候処、御闔門様御揃御壮米可被成御座珍重奉存候、然は暑中為御尋不相替芳輪被成下、殊ニ何寄之御品御恵投被下、御厚情別而忝拜受仕候、随而此品輕微之至ニ御座候得共、御礼之驗迄奉備高覽候、御笑留於被下は、本懐之至奉存候、先は右御礼言申上度如此御座候、

七月廿九日

(番長)
堤右京大夫様

文書原寸 縦一六・六糎 横四五・二糎 (表裏一枚書)

一三六六、大久保一蔵ヨリ桂右衛門へ

江戸遊学生褒賞ノ件

(封紙ウツ書)
「右衛門様

大久保一蔵
要用

尚々、以紙上奉忍入候得共、御海容所奉仰御座候、今日も被遊御出勤奉恐悦候、扱江戸遊学生人数一同、別

而勉強、当分ニは薩州之勉強と名高申触候由、就而ハ
右通 御趣意奉汲受相励候付而は、御褒賞之廉相立候ハ
、一同尚亦憤励可仕候、乍併右人数之内ニ而も精粗厚
薄も可有之奉存候付、右之次第黒田嘉右衛門へ取調申上
候様、御懸合相成候而は如何可有御座や、自ら被仰舍候
義とも奉存候へ共、存付之低申上候、此段乍憚以紙上奉
得尊慮候、以上、

七月廿九日

追白、伊東次右エ門掛一条御問合候处、宜鋪奉頼上

候、且亦遠行人数江成田彦十郎便より御用早々申越

賦、(云兵衛)養田申談候間、御座より別段御仕出相成欵とも

奉存候得共、為御心得奉申上置候、

文書原寸 縦一六・二種 横八三・六種

一三六 薩藩商法内外関係者人名及取引主要物品

大島及口之永良部島ニ於ケル人足其他

長崎出島ヨリ蘭商「ポードエン」ノ書翰

三通

一三六九ノ一

一奥羽・三越辺米并品物買入

下町人
琉球産物方
御用聞

村田一郎兵衛

摺之浜之

長左衛門

一同所品物請取積廻シ金護送等

下町人
琉球産物方
御用聞

林 徳左衛門

一大坂・兵庫・四国米取入

下町年寄格

魚住源蔵

一芸州・中国米取入

上町年寄

柿元彦左衛門

一肥後辺米取入

上町年寄

鬼塚 莊助

一大島

通弁兼帯
御徒目付勤
伊地知矢平太

下町年寄
波江野休右衛門

下町人
水原藤太郎

一口之永良部島

横目
竹内宗助

通事
島津元丸家来
山下弘平

上町年寄
染川次右衛門

下町人
笠野熊吉

一坊之津辺中取蔵出張

御徒目付勤

中江九右衛門

外二

所囓横目浦役四人掛

下町年寄

波江野休右衛門

一長崎

上町年寄
酒匂十兵衛

御徒目付勤
喜入嘉次郎

浜崎太平次手伝
高崎寛兵衛

右同
中村八左衛門

一大島商法英ガラハ方

白糸・茶・昆布類之品物を本とし、米は年中四五千

石内外差続可然内定、

一口之永良部島商法蘭ポードエン方

米を本とし、可成多石差送、時折品物相加差送ル内定

一米并品物請取渡場両島ニ相定メ、長崎は本手金請取、

且品物両島江差続候節引合、彼方品物売払元利差出候

節決算、金銀は不留置、早々御国元江差送於御国元金

銀払出諸手配致、本銀内定之事、

文書原寸 縦一四・四糎 横二〇六・五糎

一三六九ノ二

一 一印百ツ、銘々印ハ付ル事、

一 上荷船四艘計手当、

一 庭筵四五百枚、

一 縄茂俵作等ハ入不申候得共、島元ニ而無之候付、平生

仕用持渡事、

一 日雇凡拾五人・日雇頭式人・蔵番手伝式人、

一 荷作かき・かま類、

一 船渡ニ付而は、数竹を以本船ニ而渡事、

一 掛銀は蔵元ニ而いたし候事、

一 壱艘高凡六七千丸、

一 一番付ハ一々かゆるニ不及、矢張前船同様、

一 印肉手当、

一 俵数は大数迄ニ而、半者相省事、

文書原寸 縦一四・四寸 横八一・二寸

三〇〇 長崎ドック築造ニ付若野屋良助願書

(表紙) 〇 (朱) 〇 (朱) L

乍恐以書付奉願候覺

先年より海防之儀、彼是御手厚御世話被為、在、近来ニ至西洋造戦艦御打建、且外国より数艘御取寄相成、追々船数茂相増、右ニ付修覆之ため御製鉄所御取立ニ付、損所御取締ひ之儀は御差支無之様出来可申候得共、全体西洋造船之儀は、軍艦は勿論商船とも内外見願候所は、其時々修覆致手後候共不苦趣ニ候得共、水際より船底之儀は其期限相後候而は、僅之儀茂終ニは莫太之手入雜費相掛候由、夫故於外国は何国茂トロヘトックと唱へ候修覆場取建居候趣ニ有之候、然ルニ、於御国は未御取建無之、就而は、第一御公義御船始諸家船々とも年数相保候儀出来間敷、往々無益之雜費相掛候事情より漸相開戦艦次第衰微仕候様可相成義、乍恐於私共も残念至極奉存候、去迎外国同様

修覆場諸機械とも御取建相成候儀は不容易御儀と奉恐察候、依之水際より水底ニ至る迄自在ニ修覆出来候様、極々手輕之場所ドローヘドック取建度奉存候、御免許被成下候ハ、場所并見立可申上候間、御場所拝借被仰付被下度奉願候、左候得は、

御公義を奉始諸家共御弁理相成、且又外国船々之儀茂、追々修覆願出候様可相成奉存候、尤御許容被為成下候於ては、冥加銀又は公役杯前以奉申上度奉存候得共、右取建之儀、御国ニ於ては手始之儀ニ而、何分計控相付不申間、先場所取建候上相成之冥加承候様可仕候、何卒願之通御許容被為成下候ハ、難有仕合奉存候、右之段乍恐以書付奉願候、以上、

丑七月

西浜町若野屋良助

〇 (朱)

(付書) 一補理方之義は於御製鉄所御取扱被下候様奉願度候、勿論右入用之義は私手許より差出可申、場所出来之上ハ、製鉄所御付属之場所ニ被成下、修船之義茂御同所職人手ニ而出来候様被仰付度奉願候、

〔裏表紙ニアリ、朱
〇 一 〕

冊子原寸 縦二四・五糎 横一六・八糎 五枚

三三二 山田屋宗次郎ヨリ長崎会所産物方へノ請

書

右ニ付山田屋宗次郎ヨリ長崎付人へノ届

書

二二通

一三七一ノ一

御請書

一高拾万両之御代り品、当丑十一月限外国人江渡方御達

ニ付而は、右高之内、当八月中金五万両、猶又九月中

金五万両、都合拾万両之辻、御下ヶ被成下候ハ、右

御代り品ニ不拘私引請、期月通外国人江品物并正銀錢

を以引合方可仕候、尤右御代り品買入方并渡方共、多

分之荷高ニ付、其時々御立会等之儀茂御座候而は、殊

之外手数相掛候儀ニ付御届切仕、都而私引請、外国人

江渡方被仰付候御儀ニ茂御座候ハ、聊御差支不相成

様出精可仕奉存候、

一右通御下金被成下候ハ、御益金として五部程上納可

仕奉存候、尤当度之義は差向月数融通茂無御座候ニ付

右御益金見込申上候、

一右御代り品金高ニ限り、諸色御改方江五厘銀上納之儀

は御免被成下度奉願候、

一此度組合御商法之儀、粗御内達被成下候得共、此度之

儀は誠ニ差向候儀ニ而、第一時候後ニ相成、沖茂品々

手当方行届申間敷奉存候、就而は先当節之儀は前件割

合之御仕法ニ相成、来寅年早春より右御商法御組合相

成候ハ、如何様共御達之趣を以勤弁仕御請可申上候、

右は見込御尋ニ付、聊無腹臆奉申上候、以上、

丑七月

山田屋宗次郎

産物方

御役所

文書原寸 縦二四・五糎 横一六・三糎 四枚

一三七一ノ二

〔端裏書〕

一会所産物方金一条

一此度長崎会所産物方より外国人江正銀御買入方之御約定相成、右御代り品、壹ヶ年凡金六拾万兩位ニ被為及候由、然ルニ御代払ニ付、御益筋之廉相見得不申候而は御趣意立兼、代り品を以御渡込ミ之御仕法相成、当十一月より御払初ニ相成筈ニ御座候、

一右御代払用代り品買入方ニ付、私共江組合御商法之義御相談奉承知候得共、当年は差掛為申義ニ而月数融通相少、殊ニ金子速ニ御下金無御座仕合ニ而別紙御請書之通、八月より九月中ニ金拾万兩御下金被成下候ハ、来ル十一月中御払分丈ケハ御下金高ニ五歩之御益金ニ而、来寅年よりは組合商法仕賦ニ御請書差上置候ニ付、多分右通被仰付候半と奉存候、尤来年之御元手代金之儀は産物方より時々御下金之上、右金子を以来寅ノ早春より諸国産物仕入方仕、荷物廻着之時々、其節之模様を以売捌方仕、且又金高六拾万兩余之御商法ニ付、売込品計リニ而は金高相禿不申候間、異唐物藥種・反布類之品々、大坂・諸国之相場等勘考之上、利潤之品

々買入方茂可仕候、左様御座候ハ、銀高商法之事ニ付相応利潤相備可申哉ニ奉存候、右利潤之義は組合之事ニ付、長崎会所方江半高差出、跡半高ハ御益銀ニ備方仕候事、

一前行之通、莫太之御商法、長崎会所より私式江被仰付候義、不容易御事ニ而、実ニ

御国元之蒙

御威光候故と難有奉存候、右ニ付而は前行之通、産物方江御請書差上置申候間、御免相成候ハ、八月より九月中ニ金拾万兩相下り、右之利潤并来ル寅年より組合御商法之益銀迄茂聊私シニ不仕、都而当地御取入品外方御代払等御用金相備方仕申度候事、

文書原寸 縦一八・三釐 横一四七・五釐

二三三 中路権右衛門ヨリ内田仲之助等へ

長藩諸隊ノ動靜、浪士出没ノ件等

一三七二ノ一

津和野藩渡辺義右衛門小倉表江罷出、旅宿江来

訪談話

一問、長藩諸隊之元根如何ニ候哉、 答、元来八家之閣

老有之、諸士を分隊支配致候、是を先鋒隊ト唱へ候、

一問、奇兵隊如何ニ候哉、 答、三老臣父子を侮蔑、国

政を醸シ候より次第ニ綱紀破裂ニ至、彼尊王攘夷之機

会一藩過激之徒ヲ入撰、諸浪士ヲ集候、是奇兵隊なり、

其余ハ時ニ乘し、私ニ名を唱候而已ニ有之候、

一問、内乱之根元如何ニ候哉、 答、右は去ル亥年、於

馬関攘夷之節、奇兵隊一時之過激ニ而炮戦、先鋒隊之

右ニ出ル、依而三老臣其功を賞スル事尤重大、爰ニ至

而先鋒隊三老臣を恨ムル事甚し、是内乱之根元也、此

已後奇兵隊之建言逸々貫徹、依而益先鋒隊之意恨深ク

相成候由、然ル処去年七月暴動後、三老臣幽閉、已来

国政一変、此機ニ乘し、先鋒隊陽ニ恭順を飾、陰ニ私

怨を指含、正月六日より戦争起り候由、

一問、不苦候ハ、元来尊藩之御着眼承り度、 答、尊

王攘夷之儀は長藩同意ニ候、

一問、交情如何ニ候哉、 答、城下より長廻り迄繼ニ十

四丁、防長より米穀を運送、城下ニ而捌シ候事旧来、

依而自然縁を結ひ候者不少、各藩之嫌疑ニ触候事も右

等より生し可申歟、至而痛心仕候、

一問、京師暴動前ニ藩中動搖は不致候哉、 答、三老臣

出京前、其機ヲ察し藩より差止之使者、家老ニ至迄七

度ニ及候得共、遂ニ不用今日ニ至候仕合無是非事ニ候、

一問、彼藩内乱後、隊士御藩江入込候儀ハ無之哉、 答、

二月中旬長藩脱走之者拾弍人領岸江着船上陸致候、右

ヲ追討之人數凡六七十人、兵器刀鎗ヲ携於中途困候、

依而津和野より一手差出シ、渡辺義右衛門及応接、其言

兵器御携御出向ハ津和野江御打入之恣ニ相成候得は、

幕府江対し其假ニハ不被差置、又御降伏中有間數儀ニ

被存候条責問、此理ニ伏候哉、速ニ退キ候後日十二人之
土ハ岩園へ通

行之盲人々申候得共、終ニ、
領界ニ而長藩へ引渡し申候

一問、防長各藩探索入込候事も有之候哉、 答、会藩水

土ト偽通行有之候、偽藩ヲ怒り、馬上ニ而追掛候得共、遂ニ不及候、

一問、当今内情御聞込如何ニ候哉、三末・吉川山口へ

集会、今般之御長征蒙其罪ヲ候謂無之、然ル上は領界江罷出申開キ、不及時ハ防戦、興廢は天運ニ任ス之外無之候旨評決、爰ニ至諸隊無二念、心ヲ決、依而當時平穩之趣ニ候、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第六五ノ一
一 号文書ト同文ナリ)

一三七ノ二

一此度毛利淡路(元善)・吉川監物御呼出し之儀、芸州公へ被仰

付、右之儀相請、芸州年寄役野村帯刀、当七月二日広

島江帰着、同七日以使者被 仰出候間、(毛利敬親・広封)大膳父子并徳

山・岩国江申達相成候処、何レ茂奉畏候旨当座は請仕候由、徳山ニも宗家之指図ニ寄、如何様とも進退可仕

趣申答候由、右芸州侯より御差越ニ相成候使者、同十(浅野長訓)

四日広島へ帰着ニ相成候由、岩国・徳山夫々より萩城下迄通行之道路別段相変候儀無之、勿論差支候筋も無之由、

一同十三日岩国より以使者此間被 仰渡候儀委細奉畏、

御請ニ罷出候段申出候由、同十五日岩国江罷帰り候由、

一長防国内之土民激徒之暴政ニ困窮、憂苦仕居候由、激徒共も萩より墓々敷擬も無之、日費難取統、依而海路

江罷出、通船相防(妨カ)ケ候趣ニ付、召捕殿科ニ申付候、併

又候御領下江罷出不埒之儀可仕も難計、左候へハ、御召捕之上、御国法ニ御取行被下度段、前件不届相働候者

は、急度殿科被申付候得共、以後右様之儀可有之とも

難計御座候間、一応此段申上置候由申出候儀も有之趣

津田三郎兵衛より承り候、

一去月下旬欵当月上旬欵、時日相分り兼候得共、四国路之孤島へ浮浪之徒罷出居候処、九州之商船通行致候処、

右船へ六人計乗込、何方之船ニ而何等之品物積込有之哉之旨相糺候ニ付、九州路より大坂江積米致、浪華ニ

而壳払、此度右代り何々之品積込罷帰候段申答候処、右ニ間違無之哉、再相尋候ニ付相違無之旨申述候処、左様候へハ、壳買帳面相見セ候様申述候付帳面指出候処、一応見分、金銀何百両可有之、我等頭分之者彼之島に有之候間、金子・帳面持参、彼島迄罷越候様申渡候付無致方帳面相携同道罷越候処、其後当人も不罷帰、金子は勿論相返し不申候由、右等之賊徒長防国内浮浪之輩ニ可有之、日費難支処より右等之辺江出張、件之所業相働候者哉ト被相考候段、同人より承り申候、

一吉川監物其外正議之士ハ、此度被 仰出候儀、彼是申立候儀ハ有之間敷候得共、諸隊激徒共、是非彼是異論相立可申、左候得は、国内談判折合兼候処より其跡ニ罷成病氣ニ而も申立、大坂表江罷出候儀遅延ニ可相成も難計由、推察相成候段、是又津田三郎兵衛より承り候 仮書取申上候、尤前件激徒余程困苦罷在候儀哉、海路江罷出、通船相妨ケ候様之所業致候、依而秋よりも急度相制シ申度存意ニ有之候得共、何分諸隊之浮浪士、

大膳父子輕蔑、以斬殺彼是相答候処より其仮ニ相成居候由相聞候段、右同人より承り申候、着後津田三郎兵衛応接對話之仮書取申上候、已上、

七月十六日

大和田吟吾

小西信左衛門

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第六五九ノ二号文書ト同文ナリ)

一三七二ノ三

筑前侯御直達

此節 公武真之御和合被成御整候段は、 皇国永久御安全之御基本無此上恐悦至極ニ奉存候、然ルニ近年諸国形勢ニ依り、浮浪^{脱隊}流言離間之説不少、人心不和ニ乘し、分外之緒申立候者ヲ 皇国^{皇國}之御為と相心得、同氣相集り、党ヲ結び出会ニ至、或は蜜々他藩江通し主張し、又は流言ヲ以衆人ヲ驚怖為致之類、以之外ニ存候、我等不肖ニ候得共、御両君様御規則ヲ守、公平正大ヲ以国政執行候ニ付、右様之輩於有之は無用捨蔽重ニ可

申付間、此段相心得、組中入念教導可致事、

此兩人咎メ退役之由 (一書) 黒田播磨 (二書)

矢野相模 (三書)

齋藤(五六郎カ、定氏)五三郎 衣非(茂記カ、真正)庫記 建部武彦(自強) 河合茂助(茂山カ、勝文)

右咎メ被申付、此外士分十一人、以下合四十余人、

尚追々党類出来可申と之事、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第六五九ノ
三号文書ト同文ナリ)

一三七二ノ四

一大坂表ニ而も無異儀、長州よりも毛利・吉川上坂之儀

も返答無之、依而は 御進筭御足揃として、昨廿九日

御先手勢紀州様御城之南手講武所ニ而、御惣督初御

勢揃御座候、凡此人数壹万五千、其外供人凡壹万人計、

旗差物等誠ニ美々敷事ニ御座候、

一昨年来、大坂之町人長州江出入致候は諸商人ニ至迄入

牢仕候もの数多有之、其後宿下ケニ而町預ケ等ニ相成
候処、此節此者等追放又は遠島ニ相成、其外長州賄方
等致候、

鴻喜 加治久、鴻市 高作 尚此外三四軒

追放之代り、一軒前ニ四千両・五千両ツ、御用金相掛
り申候、

七月朔日

右書付伝写致候付入御覽申候、已上、

中路権右衛門 (延年)

内田仲之助様

吉井幸輔様

追々入御覽候書面ト齟齬之廉も相見候得共、前後混

雑之次第と有之候写取申上候、此段御賢察可被下候、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第六五九ノ
四号文書ト同文ナリ)

冊子原寸 縦二八・七糎 横二〇・三糎 六枚

三三 中路権右衛門ヨリ内田仲之助等へ

有馬中務大輔ノ豊前海岸警衛

毛利淡路吉川監物大坂へ召ニ付松平安芸守等
へノ取締命令等

有馬中務大輔(慶應)

豊前海岸辺并小倉表為御取締、大目付塚原但馬守(昌義)・御

目付介御使番松平左金吾被差遣候付而は、平常并非常

共人数出之儀、同人より可相達候間、差支無之様可被

取計、人数出し方委細之儀へ同人より可申達筈ニ候、

七月

右ニ付、此節四五百人出張有之趣相聞申候、

於大坂表御達

松平安芸守(後野長訓)

毛利淡路(元善)・吉川監物(経幹)兩人旅中召連レ候家来着坂候節ハ

外供之分兵庫表江残し置、内供之分ハ西宮へ召連レ可

申、右内供之内召連レ度旨申出候ハ、姓名書為差出、

淡路・監物同様召連レ可申、両所へ残置候家来滞留中
は夫々御賄被下候筈ニ候、尤猥ニ他出等は勿論、懇懃
ニ御沙汰相待居候様可申達候、右之趣旅中護送之家来
江相達、不取締之儀無之様可被致候、

松平安芸守

毛利淡路・吉川監物旅宿之儀へ、生玉中寺町円通寺江
相達置候間、兩人着坂候ハ、直ニ同寺江召連警衛可
被致候、右旅宿為取締、御目付支配向并大坂町奉行組
与力・同心昼夜為詰切候間、諸事承合不取締之儀無之
様、内外可被心付候、尤兩人在坂中ハ、都而御賄被下
候間、其段相達置候様可被致候、委細之儀ハ御進発
掛り大目付江可被承合候、

松平讚岐守(頼忠)

西之宮滞留淡路・監物兩人、家来不取締之儀無之様、
出張人数ニ而心付ケ候様、

同様兵庫表

柳原式部大輔(致敬)

戸田采女正(氏彬)

内藤若狭守(頼直)

松平弾正忠(大河内正實)

内藤志摩守(正聰)

淡路・監物兩人滯坂中、円通寺警衛右同断

陸軍奉行

御持筒之頭

御先手

右同断旅廻警衛

西本願寺

淡路・監物兩人評席

右之通相達候間、可被得其意候、

七月

右之通御座候条伝書致候間、写取入御覽候、已上、

中路権右衛門(延年)

内田仲之助様

吉井幸輔様

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第四卷第二〇四ノ
二号文書ト同文ナリ〕

冊子原寸 縦二九種 横二〇・三種 三枚

二二四 中路権右衛門ヨリ内田仲之助等へ

筑波山余党ノ捕縛、長州再征ノ件等

一 七月九日膳所より 京都町奉行所へ差出ニ相成候

人数名前

高橋作也(正功) 保田信解(正経) 森喜右衛門(祐信)

田中藤馬之允(田川カ、武整) 高橋雄太郎(幸祐) 阿閉権之丞(信忠)

増田仁右衛門(正房) 深栖俊助(当通) 関元(兼勝) 吉(兼勝)

渡辺宗助(親) 榎島鏡之助(光明) 一十一人

一 江戸ニ而召捕候旗本五千石頭ニ而多人数党有之、右ハ筑波様之事催し有之、押借り金式万兩余致候事露頭と

申事、

一右党中之者ニ候哉、よし原遊女召連レ、京都江罷越、

戸田大和守殿屋敷内ニ潜居候処、去ル十九日西町奉行

所より召捕ニ相成候由、

一六月廿二日芸州家老代野村良之進、大坂ニ而登城、御

老中より御演達大意左之通、

御懇之御沙汰之上、御尋之儀有之候間、毛利大膳末家

毛利淡路・吉川監物迅速登坂可致、廉立候兵器可致遠

慮、供廻り之儀は相当之人数召連候而も不苦候間、此

旨安芸守江申通し、早々周旋有之度旨御沙汰之事、

一長州之事情種々有之候得共、肝要之所は昨年尾州公御

発行之砌、吉川監物専ラニ致周旋、三謀臣之首級差出

し、其余参謀之者夫々敵科ニ処し、尤於父子恐入候廉

ヲ以伏罪仕候ニ付、相当之御咎は可入畏之覚語ニ候へ

とも、寛大之御処置ト被 仰出候上は、本領安堵之所

置と存罷在候処、尾州御陣払後、奇兵隊妄動之儀は在

之候へ共、是又国中ニ而鎮静之上へ、此上は敵誼は無

之哉ト存候処、此度 大樹公御進発之儀は一円承服難

致、仍而は、先以 公武江対し候儀は聞き、吉川監物

去年之周旋振実否及糾問候上、 公武江も応接之次第

も有之様申立、国中一同奮発罷在候由、

一長州領入口制札写

周防・長門両国之大守萩宰相事、 神国之掟ヲ守り、

一天之君を守護し、犬羊ニ等しき外夷を攘ひ、

皇国を治めんと欲する□□領分へ軍馬を指向んとする

者於有之へ、仮 幕府之命たりとも、即刻打捨咎人も

生返し申間敷、仍而制札如件、

吉川駿河(經幹)

毛利筑後(元統)

穴戸美濃(親善)

右承知致候間申上候、已上、

中路権右衛門(延年)

内田仲之助様

吉井幸輔様

〔本文書ハ〕鹿兒島県史料 忠義公史料「第四卷第二二六号
文書ト同文ナリ」

冊子原寸 縦二八・八糎 横二〇・三糎 二枚

西郷吉之助様
侍史

文書原寸 縦一六・六糎 横六一・六糎

三三三 伊地知正治ヨリ西郷吉之助へ

笛太鼓方ト喇叭手トノ交換

尚々

御邸中嘆式調練之儀、先達而江戸表ニ差出置候伝習方人数等、速ニ成功ニ而帰京ニ付、小隊・大隊・散兵等運動ハ勿論、大砲打方并銃鎗使ひ、大太鼓・小太鼓・箆笛迄十分相聞、仕合之至ニ御座候得共、喇叭之儀未だ江戸ニて聞け不申居由ニ而一事遺憾之至候、殊ニ散兵運動ニは不自由致し居候処、御国許ニは早より御伝習相成候由、何卒吹手之内兩三人為指南方上京被仰付候様御取計被下候儀、相叶申間敷哉、左候得は、其代り箆笛・大太鼓・小太鼓等は何人ニ而茂御沙汰ニ任せ差上候様可仕、何分御返詞奉希候、以上、

八月九日

い地知正治

三三三 御納戸藏物品出入取扱方改革ニ付伺書及指令

一三七六ノ一

此節御納戸御改革被仰渡候付、御納戸藏取扱向之儀、左之通吟味仕候、
一 御納戸藏役人此節より一ケ年交代ニ而、御藏改之儀も表方御藏々同様、於御勘定所改証文引合方被仰付候付而は、御徒目付并御納戸書役立会相改候儀は是迄之通ニ而、以来金銀錢直成被召替候節も右同様立会、直ニ其当日現物相改、速ニ払替手形差出候様仕度候、
一 御藏御在合品痛損又は古物相成候節は御徒目付承届、藏役取しらへ、片付方申出候は私共并御徒目付立会、猶又見分之上形行可申上候間、其節片付方被仰付度候、
一 砂糖・焼酎類御払方之節、焼酎之儀は頭計例いたし、

風袋掛改候得は、へり欠相分り、又払欠之訳も明白相分り可申候間、御徒目付見分証印ニ而、銘々帳面ニ相記、右を挙立、欠払等は迄之通被仰付度、尤御納戸蔵之儀は専進上物之品ニ而、盃数不相改其似引付本立仕候間、へり欠等之説明明白相分り候方、彼是御取締可罷成候間、砂糖之儀も右ニ準シ取扱仕度候、

一御目見等之節、中紙并太刀・馬代其外進上物は勿論、何そ付申受品・御買入品ニ至る迄、都而速ニ引付又は払替手形相渡、時々首尾為相濟候様仕度候、是迄右様之首尾、遅々相成候処より不締之儀も可有之も難計御座候間、以来右通ニ而進上物等相納当日より日数五日より内、引付并払替手形差出候様仕度候、

一月挙帳之儀も成丈ケ其月末ニ払切之首尾相成候様、自然月末ニ首尾成兼候節は翌月五日より内、是又首尾いたし候様仕度候、

一御蔵入払相成候総為御見合、月々御用部屋江差出置候様可仕哉、其儀ニおひてハ、当月中総は九月七日より内

差上、九月中総は十月七日より内差上候様、右ニ準シ取扱可仕哉、

但総之儀、一冊ニ相円、一行毎ニ間を透置、三四ケ月程は月々右江入払之総朱書を以直付置候得は、矢張月々総取仕立候も同様ニ而、返而御見合ニも可宜哉、於其儀は四五ケ月越ニ書改差上可申候間、右之一冊は月初兩日程も被相下置度候、

一不時御用之節、御用部屋并御小納戸上り品之儀、羽書被相下、是迄は私共不承届御蔵払出相成来申候得共、已来右御座印相居被相下候は、私共ニも時々承見届、印形いたし候様可仕哉、於其儀は八ッ退出後、右様御用上り之節は御徒目付承届払出置、翌日其首尾私共江致引合置候様被仰付度、尤前文通ニ而、何そ不締之儀は無御座候得共、嚴重ニ取扱仕候様承知仕候付、右通可被仰付哉、

一御蔵御在合品々、何そニ付奥向申受相成候節、是迄私共承届致免許、跡以御側御用人座御免印ニ而払切之首

尾相成来候得共、此節御改革付御用部屋江掛被仰付、何篇藏密取扱仕候様、分而承知仕候付而は、以来右通之節は形行取しらへ、都而御用部屋江申上、御吟味之上、御用部屋御免印ニ而被相下候上、取扱仕候儀は勿論、其外何篇之儀も時々御用部屋江相伺候上、取扱仕度候、

右は此節御納戸御改革被仰渡、時々是迄奉伺承知仕候儀は其通ニ而、御藏取締向之儀、已来右通吟味仕候間、何分被仰渡度此段奉伺候、以上、

丑八月十日

御納戸奉行

山口彦五郎

華 鎌 藏

中山甚五兵衛

一三七六ノ二(一三七六ノ一号ノ行間ニ朱書シタモノ)

申出之通申付候、

十月

(喜入) 摂津

文書原寸 縦一四・八糎 横三三・一糎

三七 近衛忠房卿ヨリ島津久光茂久二公へ

小松帯刀帰国ノ件

(包紙ウツ書)

島津中将殿

内密々

薩摩少将殿

几下

忠房

(朱) 藏(三ツ同シ)

□ □

(封紙ウツ書)

島津中将殿

内密々

薩摩少将殿

几下

忠房

(朱) 藏

□ □

今度帯刀帰国ニ付幸便ニ任せ申入候、当節之儀故、何卒具足持置度存候ニ付而ハ式正腹巻御所望申度候、外ニ六丸銃短筒モ御所望申度、宜敷希存候也、

朝夕は凌克寛候、其地ハ如何と存候、先以御勇猛候哉、尚承度存候、先々京師少しは御静謐ニ相成候へ共、此末

之処如何可相成哉ト深心配候、防長江異舟渡来、右ニ付而ハ深心配候、何分方今夷狄と戦争ニ相成候而ハ、追討之折柄、内外之混乱ニも及候儀、其上防長モ 皇国之地ニ候へは、夷人ニ討せ而ハ不容易 皇国之大恥無此上候、旁厚幕府より夷人説得可在之様、被 仰出候事ニ候、扱小松帯刀帰国之趣申出、何共当惑無此上候得共、国許之差支ニも相成分、是非一応帰国仕度段申出、兎も角も致方無之痛心候、何卒御国許御用向急々相濟せ、折返しニ帰京仕候様ニ致度候、方今帯刀滞京無之而ハ、大ニ差支当惑無限候間、厚々御含被下急速引戻し候様ニ致度、呉々急速帰京之処、飽迄御頼申入度存候、先は御用繁中右而已、荒々如此候也、

八月十二日認置

尚以 前殿下よりも宜敷ノ可申入被命候、小松帰国ニ相成候而ハ、前殿下ニも深御懸念ニ思召候間、本文之通、前殿下よりモ被 仰入度由ニ候事、呉々帯刀儀、五六日ニ而早々出立帰国候様、厚々御頼申

入候、左無而ハ心痛無限存候事、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第五九九号 文書ト同文ナリ、但忠義公史料ノ年代ハ元治元年トスル〕

文書原寸 縦 一八・八糎 包紙原寸 縦二七・八糎
横 二一〇・七糎 横 四〇・六糎

三六 汾陽次郎右衛門ヨリ市来六左衛門へ

長崎ドック築造ノ件

〔包紙ツク書〕
市来六左衛門殿 汾陽次郎右衛門

ド

ドロヘドック取建方、若野屋良助名前を以願書差出候段は御案内之通ニ御座候、右良助事、目安方より身元及聞合処、未極年若之者ニ而、外ニ後見体丈夫之者茂罷在筈ニは候得共、右様其身幼弱ニ而は何分吟味相滞候間、山田屋宗次郎兩人ニ而願書差出候ハ、無子細御免可相成段、其筋より極内相達候趣有之、山田屋ニも其通承知ニ而、近日中書面差出候賦御座候、左候得は、此節は何茂相

滞候義は無之筈御座候、右ニ付取建場所之義、大浦石炭小屋之先之入湾可然との吟味茂有之、其通内定程之由ニ御座候、就而は追而取付之期罷成候ハ、おのつから地方検者老兩人江夫々之夫方等被召付、出崎可被仰付、於其儀は此渚地方検者之内耆人、右場所并石場見分等之為出崎被仰付候様御座候而は如何可有御座哉、左候ハ、大抵夫方之多少、且木屋場等之見賦迄荒方取究、此方之都合追々と相調候上ニ而、惣体之人数被差出候ハ、旁御都合も可宜、右場所取建ニ付而は、汐留之ため過分明俵等も入用相成候事之由、爰許ニ而精急手当ニ及候得は、聊ながら御弁利も不宜候付、夫等も前以見賦、手当ニ及置度、其外も右類之品は数多可有之義ニ付、此段御問合申越候間、猶於其許御評議之上、可然御取計可被下候、此段申上候、以上、

汾陽次郎(光遠)右衛門

八月十三日

市来六左衛門殿

文書原寸 縦 一四・三種 包紙原寸 縦二八・四種
横 一八四・七種 横 二二種

二三 進藤式部権少輔ヨリ小松帯刀へ
蒸氣船へ案内ノ件

一(封紙ウツ書)小松帯刀様 進藤式部権少輔

忝拜見、如貴諭残暑凌兼候処、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然は蒸氣船御案内之義、明日は御差支之趣、御細書之趣致承知、品々御配意之御事奉存候、かく而、ケ様可得御意如斯御座候、以上、

八月十三日

文書原寸 縦一七・一種 横五二・三種

二六〇 土持左平太広島ヨリノ報告

園田彦左衛門小倉ヨリノ添書

毛利淡路吉川監物ノ召命ト長藩ノ内情

二通

一三八〇ノ一

〔彌生朱書〕

乙丑八月廿日

芸州より
土持」

毛利淡路・吉川(経覺)監物御用召ニ付、御書取写相添且長防

之情実等、先達而御届申上置通ニ而、芸州(淺野長則)侯より徳山

・岩国等江御使者被差立置候処、往復之使説萩様并右

兩藩家老等追々広島江致参着、応接振旁承合候形行左

ニ申上候、

一 徳山家老福岡式部・岩国家老吉川采女・用人長新兵衛

等相揃(銘々手廻り)、去九日広島江致着、芸州侯中老野村

帯刀江取合使者申出候趣、此節御用召ニ付、無異儀登

坂不仕候而相濟間敷、不輕訊柄ニ而段々商議相約候処、

昨冬既御伐長之期期ニ臨、惣督尾張老公江謝罪降伏仕

候処より公平之御所置を以御解兵相成候後、重而歎願

書被差上候得共、夫成是迄為何御命令も無之故、大膽(毛利)

様御父子は勿論、諸士末々ニ至迄半服安堵之思ひ難被

致折柄、御再討被仰発候哉ニ仄ニ致伝承、諸隊殆驚動

紛々之人氣成立候を、専監物・淡路等致尽力、折角鎮

撫方仕候場合、両主御用召之旨被仰達、段々衆評ニ被

及候処、上坂ニ付而は家来多人数不召列、芸藩より護

衛可致との御達振ニ付疑惑之廉も有之、尤少人数ニ而

登坂可致ニおひ而は本藩諸隊等不得止脱走ニ而もいた

し、付添参度儀共様々及異論不容易機會上坂仕、追々

京撰江出浮、何様之變動到来之程も難計、乍此上御難

題醸出候而は、大膽様ニは兎も角も

天幕江奉对恐入御重大之事件ニ而

皇国之御為不宜、且は去冬御解兵ニ付而は、就中尾州

老公之御高恩を受られ、其外諸大藩等江対し而も一言

申分無之、至情内外痛心ニ堪入、殊ニ当分監物・淡路

共持病差発、少々煩付、彼是懸念ニ有之、追而快方ニ向

候欵、将諸隊人氣折合付候程合ニ依而は上坂可致哉、

方今之時機ニは迎も登坂難相整候、旁之微意御觀察を

以、此涯延引被為聞濟候様、且昨年来幾度も歎願言上

仕置候趣、猶亦宜敷御周旋被成下度、左候而、上坂延

引仕候ニ就而も聊異心別儀は無御座候間、是亦不悪候

様御聞取、其旨被仰上被下度歎願之趣致弁解候処、帶刀相答候ニは、右形行具ニ安芸守様達御聴、其上何れ之筋被仰進ニ而も可有之申諭、其場曳取、芸侯ニも段々御評議相成、中四日程滯留致し、追々談判ニ為及由候得共、其節々之議論一々相分不申候得共、右願意若藩より返答難被致候処、使者より強而申含無抛承引相成候形ニ而、同十三日広島曳取罷帰候、然処同日暮時分穴戸備前(親基)主従供七十人、同所江致着、右帯刀取合応接之趣、徳山・岩国御用召一件ニ付安芸守様江御拜謁奉願建言仕度致参上、併何ぞ大膳様より之御使者と申場ニ而は無之候得共、御末家并御家老中より御歎願有之候段申出、右帯刀則答難致、一応伺済之上、復命可致申約置、是亦御評議有之形ニ而三四日程御沙汰相待候処、申出通御許容ニ而同十五日備前致登城、三之丸ニ而紀伊守(淺野茂勲)様江御拜謁被仰付、言上之趣、昨年来一方ならず御懇情ニ預奉り恐入罷在、然処又々此節末家之者御用召ニ付御叮嚀被仰進候儀共、重疊之次第言語ニ絶し候、然

は此度御用召ニ付而は直様上坂可仕様、猶本家より可申勸儀、的当之訳柄ニ候得共、昨年變動曳統、御国政向段々ノ入もつれ有之、当時第一監物・淡路等要路ニ関係致し繁雜中、登坂難被致との意味合、岩国等使者口上不相替、偏ニ芸州侯より御周旋被下度旨、紀伊守様江建言仕候由、御同人様難被黙止御承諾被為在、左候而、備前江御料理等被下御叮嚀成御会釈ニ而、同十六日広島表曳取罷帰申候、

一岩国・徳山等之使者差越候前廉、去七日長藩梅田三郎・野村安之介等広島江参着、当所政府掛植田乙次郎江面会谈判之趣、監物・淡路御用召ニ付、本藩諸隊共評議相約候処、

皇国ノ御為、不被捨置趣意柄有之、依而大膳様は勿論御重役方御存知無之候へ共、要路之廟議ニ不拘、有志之輩申合候事柄と国挙而罷出申上管之処、御領内江多人数入込候儀、如何敷奉存候故、我々共束而安芸守様江御拜謁奉願建言之趣有之候間、其段御取持可給旨申

出候処、右乙次郎相答候ニは、当分大膳様之御身上ニ
おひては未御謹慎中致伝承候ニ付、

公武江御伺不致他藩江輕々敷御面謁相済申間敷旨、程
能申断候処、然は迎、白封之歎願書一通、安芸守様江
取次可呉旨、無抛申ニ付請取、御同人様江差上御承済
之上、右安之介・三郎当所曳取帰国仕候由、

但右之歎願書、紀伊守様被成御請取、彼書取江御副
札被差添、閑老來江御届相成候賦ニ而、未 幕役
江不為遂御披露、内ニは他藩江洩し難く、近々野
村帯刀右御届ニ登坂仕候付、同人着坂之日限ニ応
し、彼之写取可差遣旨、芸藩より無余儀承届候、
依之此節迄は手ニ入不申候間、追而写取差上候様
可仕候、

一右ニ付、長国之情実等、猶亦承合申候処、芸国江説客
使口上之趣前段之通ニ而、昨年御伐長之儀は名儀ニ依
而無余儀も致降伏候得共、此節体御再討ニ付而は無名
之出軍ニ而充分之申訳有之との国論ニ而、諸隊一致憤

怒掠上之有姿ニ而專必戦之致用意、且又京撰之動靜、
此表長国辺江布告之趣ニは、先月初加州(前田齊孝(山内總監))・土州候ニも

大坂御曳払事情確証相分不申候得共、江府・横浜夷館
等江は仙台之藩中致暴動候儀共相聞得、長藩却而勢を
得候形ニ而、迎も御出軍難整れ致着眼候との風説も御
座候、然処広島江は追々 幕府茂間諜之者周旋方ニ而
相見得、当分彦根藩小西信左衛門其外一兩人滞留、芸
藩江幕威を説示し候故、頗因循之芸藩、彼是恐惑之処
よりして、信義之国論約兼、順を両端ニ計り候形ニ而、
前件長防之使者江応対ニ付、往復及遲滞重大之事柄迅
速之計難被尽哉と、長人ニも取沙汰致し候由、其通相
伺れ申候、殊ニ此節長藩家老より紀伊守様江建言之歎
願書野村帯刀持参、御届之為登坂之賦ニ候処、格別急
キ之儀共不相見得、漸く昨今乗船より出帆相成候由、
右通御座候、以上、

八月廿日
芸州
広島滞在
土持佐平太

奥掛
書役衆

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第六七〇号
文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一四・三糎 横四六二・五糎

一三八〇ノ二

〔編纂朱書〕

乙丑八月廿六日

小倉より

園田

毛利淡路・吉川監物御用召之儀は勿論、長防内情等之儀
共、追々探索仕、相分候廉々も有之、御届可申上相含居
候折柄、芸州滞在土持佐平太より別紙沓通、開ニ而相達
爰元開合同様之趣故、此節は拙者より別段御届不申上候
間、左様御舍別紙御披露可然御取計可給候、此段御頼申
進越候、以上、

八月廿六日

小倉滞在

園田彦左衛門

御国許
奥掛

書役衆

文書原寸 縦一四・三糎 横四六・六糎

一三六一長州ニ於テ幕使殺害ノ件注進

〔編纂朱書〕
一甲子欵

風舌

一去ル十九日夜、於小郡駅

公義御使番衆本陣ニ夜中何者とも不知押入、御役
人衆三人トカ殺害仕、首を取候由、此首川畑ニ而
翌廿日箱詰等ニ致居候由、

右は十九日宮市泊廿日小郡通行之節見聞仕候趣、肥前
大村之山伏昨夜小倉へ着之上ニ而風舌承候、御役人衆
名前不分候得共、先日蒸気船ニ而下関より御出之御使
番と申噂之由、左候へは、御使番中根一之丞様方之御
事と奉察上候、如何之子細哉不相分候得共、いづれ浪
人体之仕業かと被存候、長府様ニ而も御詮儀最中之様
噂承申候、何分不容易風舌ニ付江戸より之不時御飛脚

役より御内々御注進申上候、以上、

八月廿三日

(本文書ハ元治元年トスルモ文久三年ノ誤リカ)

文書原寸 縦一七・八糎 横四九・五糎

三三三 久光公ヨリ山階宮ヘノ書翰草案

長州処分遅延ノ件

六月廿七日之尊書難有謹而拝見仕候、先以秋冷之砌御座候処、益御機嫌能可被為成御座恐悦奉存候、然は

大樹公于今御在坂、防長御処置遅緩之次第、此末如何と乍不及案勞奉遙察候、扱井上大和御暇ニ而罷下り候ニ付、

御細密之尊書被成下、殊ニ結構之御品拝領被仰付、別而難有奉拝受候、随而此品輕微之至ニ御座候得共、御礼之驗迄進上仕候、先は右御礼旁申上度奉捧愚札候、恐々謹言、

八月廿五日

上

御請

再啓、乍恐時季御保護被為成候様奉存候、備後・

(諏訪甚六)

伊勢初御丁寧被仰下候由難有奉存候、修理大夫・

(島津茂久)

凶書へも御意被成下、是又難有奉拝聴候、御礼申

上候、

敬白、

別紙

追啓

就暑氣尊書被成下難有奉存候、乍略義別書を以御礼申

上候、

文書原寸 縦一六・七糎 横三五糎

三三三 京都ニ於ケル八田知紀ノ建言

外国艦撰海來航応接ノ件ニ付

(表紙) 一 上 一

乍恐御治世久敷相統、武家一統風俗奢侈怠惰ニ流、武道衰微之所より、外夷虚ニ乘し頻りに相迫候処、政府夫を退る事あたはず、終に横浜開港ニ及び、夫故万民

塗炭ニ落、人氣致散乱、既ニ危急存亡之時節到来、無勿体も被為惱

震襟候御事、何共奉恐入候次第ニ御座候、依之無御抛攘夷之儀被仰出候処、幕府御請有之、横浜鎖港之事より被付御手候筋ニは相聞得申候得共、所詮御成功無覚束、然処摂海開港御断之年数相満候由ニ而、此節既ニ相迫候期ニ至、如何之御所置可有御座哉、未御軍備茂不致充実候得は所詮攘夷之儀相調申間敷、何れの筋皇国之興廢此時ニ可有御座哉と、下賤之私式ニ至、昼夜不堪苦心罷在申候、依之不得已言上仕候、抑皇国之儀、今更申迄も無御座候得共、大地之元首、元氣之始まる所ニして、葦原之中津国と申茂、即大地之中国ニ而、万国之君国たる訳は、神典ニ著く御座候得は、海外之諸蕃茂実は皇国之臣国ニ而候故、大汝少彦名神は海外江往来シ給ひ、諸蕃御經營之事、神典ニ相見得、

神功皇后三韓朝貢之道を開き給ひしも、則

天照皇之御神託ニ出候事、正史ニ相見得申候得は、攘夷鎖国など申事は神国之御掟には有御座間敷、いはゆる八十繩かけて引よする事の如く、弥ますく外國をして皇化ニ趣かしめ給ふへき御事かと奉存候、然処幕府之儀、例之霸道を主張し、虚唱を以事を計るの弊風有之、夷人ニ対しては弥以其通、堯端より信義ニもとつかず、唯当難を被相凌候迄之応接等ニ而渠甚不致信服、日本国は人情黑白無道之国なりと輕蔑し、狼に暴威を施し、終にかれ跋扈するに及び、惣而今は渠か術中ニ陥り候次第、千歳之遺憾此事ニ御座候、就而は是迄之悪弊を被相改、神国正直大公平之道を以御降伏被遊候外有御座間敷、左様無御座候而は、乍恐御社稷茂は限りと申時機ニ至可申候間、仰願くへ、格別之

御英断を以、此節は幕府之手を除き給ひ、別段之御妙計被為在度奉存候、乍恐其策大略左ニ言上仕候、

一外夷之風俗、畢竟おのか情欲を極、終に四海并呑之本

願有之候得共、天主と云耶蘇といひ、皆表ニは仁慈之名を以万民を致教化候筋ニ御座候間、此方よりも仁慈之道ニ付て論を立、通商之沙汰は姑く被差置、第一渠と互ニ道義を談し、真義を以利害得失を弁し、渠か道之本原を探り、正を以邪を糺すの手段可有御座、仮令かれ此方之道を信用せずとも、眼前真理ニ於て閉口せしめ候儀は相違有御座間敷、若其上にて理不尽に事を敗り申候ハ、其時ニは大賊之名を唱へて、御征伐御座候ハ、臣士たる限、死を恐る、もの無之、いはゆる神風之靈驗もいちしるく可有御座奉存候、

一夷人初発浦賀江来舶之節、日本の道を問ひ申候処、我國は孔孟之道を以相治候云々之旨、林家抔相答申候哉ニ相聞得、甚以遺恨之至御座候、尤 皇国にて漢土之經典をも取用給ふ事は、礼楽刑政之上の潤飾のミにて御国体の基本は、全く

皇祖神之御掟ニ依給ふ御事故、菅家御遺誠にも凡雖誦唐虞三代之聖經、革命之国風、深可加思慮也と相見得、

又我國之道は、以玄妙欲治之抔被仰置候通ニ御座候、且孔孟之道は、夷人も左程信用せぬ所にて、其事新井白石か采覽夷言(異)ニも相見得申候事ニ御座候、然処ニに不思議之機会到来仕候訳ハ、近世西洋にても和学を好候者有之、最早仮字書之書籍も読覧、既ニ先主人代琉球江来舶之仏朗国之魁主なる者、頻リニ和学を好、在番之者江就日本書記を相親度願出候得共、原書は差扣置、神典目安之末書を為見候処、天地開闢之古伝説共を大ニ致感称候由、又当分横浜ニ而は平田篤胤か著書古道大意抔読候者有之、平田か名まで相唱申候由、尤渠か天文測量之説、自然ニ神典之古伝説と致符合候所も有之、且かれ常々日輪を尊拝する事深、其説天日は恒星之一ニして、一地球とする抔、神典と同趣ニ有之候得共、皇国之様古伝説無之候得は、其本原然る所以は渠窺ひ知らざる所ニ御座候、皇国古伝説之趣ニ而は

天照皇は即日輪界之大王ニまし、月読尊は月輪界

をしろしめし、

瓊々杵尊は此大地の大君にて、日向高千穂嶽ニ降臨まし
／＼、夫よりして

天照皇之御正統連綿として万古一日の如くおはします事
顯然著明ニ御座候間、此玄妙之旨を以夷人を御諭被為
在候ハ、渠渴望之折柄、速ニ会得仕へく哉、左候ハ
、干戈を動さずして降伏せしめ、とこしなへに奉仕
上貢可仕哉と奉存候、尤正直公平の道を以て致説得候
得は、虎狼之国人といへとも、感服いたし候証拠ハ、
先年琉球江来舶之夷人頻リニ猛威を以相迫り、開港之
事及び渠か宗旨を相弘ん事を求、とかく及論議候得共、
琉人全く虚唱を用ひず、信義一筋を以対応いたし、聊
も渠か暴威ニ恐れず、拾ヶ年計相凌来候処、かれ終ニ
術を施す事あたハす、空敷致帰国候事実正ニ而、信義
之道はいつくまでも相通り候儀ニ御座候、就而は返々
も応接之事、別而用意すへき事ニ御座候、仮令時機ニ
依 御征伐有之候とも、通商破断より事発候而は甚名

分不正候間、真理の上にて義不義を弁し、顯然渠か罪
相究候上兵端を被開候外有御座間敷奉存候、

一夷人説得之儀ニ付、神典の古伝説を以相示候事、甚た
迂遠之様ニ有之、其上古伝説と申もの、今日之道理に
て量りかたく奇怪之事のミ御座候間、理学之徒ハ、神
代之事は畢竟寓言のミと相心得、更ニ不致信用事ニ御
座候得共、夫ハ後世理学の弊ニ而、鬼神を無ニ帰せし
め候僻事ニ御座候、若神典の玄旨を怪誕として信用せ
ざるに於てハ、神代之山陵及び三種の神宝もすへて無
実の物と相成、神国之神国たるいはれも皆虚文ニ相成
可申、返々も言語道断之儀ニ御座候、然るに西洋人ハ
却而理ニさとく相見得、皇國の古伝説を尊信する事
前文之如く、殊勝ニ有之、且日本人ニ対しても虚言を
用ゐず、公平を以致所置候事も有之、敵國之為実用便
利の大砲小銃を相讓、火術之要法を伝へ候事など奇特
と可申候、依之此方よりも正直公平之道を以服せしめ
候儀、第一之事と奉存候、

一 横浜開港仮約定等之所置ハ全く奸吏共之私計ニ出候事故、既ニ其罪を以被加天誅候事現然、渠も知る所ニ御座

候、左候得は、是迄之是非得失ハすへて被捨置候て、以來上貢通商之儀は別段中庸之道を以て御改革被為在、

御国産之多少善悪夫々精算ニ涉り、自他互ニ無利損亡無之、万民安堵を得候様之術可有御座候間、右は其道

ニ賢カシコき者江吟味被仰付度、尤於彼方は迄之損亡迷惑筋を申立候ハ、於此方も渠か為に万民塗炭ニ落候次第

難尺筆紙事候間、是迄之儀は都而奸吏共之罪顯然ニ御座候間、右之趣を以御説得被為在候ハ、異論申間敷

と存申候、
一 右通ニ付而は、応接之人柄諸道ニ通達し、天眼を具し

候者ならてハ、任堪申間敷候間、人才御撰出之儀ニ付、勘考仕候得は、所詮吾人ニ求候而ハ才器求かたく候付、

たとへハ薬味之調合ニ依、大功をなすかことく、三五人を調合して一賢士を出すの手段御座候間、前文通於

被 仰付は早速人柄取調申上候様可仕候、

一 横浜通商一条、是迄幕役不義之事有之、夷人共甚致憤激、此節是非上京

朝廷江直訴可致旨、幕府江申出、摂海江乘入候賦之由相聞得申候、就而は前条ニも申上候通、いつれ幕府之手

を被相除、屹と正義を以御説得被為在候外有御座間敷、勿論京師江踏込候而ハ別而如何ニ御座候間、大坂御城

内ニ而応接御尤奉存候、乍恐御人体之儀ハ、尹宮御相当可被為在哉、左候而、幕役勝麟太郎儀ハ別而有志之

者ニ而、外幕役一列ニ而無御座、尤夷人応接旁至而取馴候者ニ御座候間、同人事早々被招呼、此節 御趣意得

と御申含被成、左候而、私共より取調申上候人体ハ添役被仰付候様有御座度奉存候、此節は返々一大事之御時

節柄ニ付、万一是迄之通不束之応接共御座候而は、乍恐

御社稷は是限と申時機ニ御座候間、幾度も申上候儀ニ御座候、

一 申迄も無御座候得共、国家之興廢は天運とも可申候得

とも、可惜へ名分のミに御座候、是迄奸吏共之不義ニ依、日本ハ愚癡文盲の野国と外夷共致輕蔑、海外ニ惡名を流し候儀、遺憾之限ニ御座候間、此節ハ屹と神国之神国たる御稜威を被輝、是迄之惡名を御取返し被成候外無御座候処、幸渠より直訴之儀申出、無此上機會到来と奉存候、尤 皇国兵食不之、武威盛大ニ有之候とも、攘夷之儀ハ

神慮ニは被為叶間敷、いつれ渠をして

皇化ニ服せしめ給ふへき 御趣意ニ而可有之と奉存候然処先年長州建白ニ、鎖国之儀、 皇国之大典之様申上候哉ニ相見得、世上ニ茂其通相心得、攘夷之儀長州引受之儀共愉快ニ存、誠忠之様云触、今ニ致信仰候向ニ相聞得、甚以如何之儀ニ御座候、尤 皇国ニも海軍を興し、兵威を張り給ふへきハ上策ニ而可有御座、英国之如き西北の一孤島ニして、四海ニ威を奮ふを以て見申候へハ、 皇国之儀ハ大地之中央ニ位して、四方八達兵食卓絶たるへき事勿論ニ御座候処、外夷を恐れ

鎖国を以て曆世之紀律之様被成候儀、徳川家より起り候儀ニ御座候間、返々

皇祖神之御掟通 御威光万国ニ相及候様之御計策第一と奉存候、

右大略は、更々一己之計策ニ而無御座、乍恐

皇祖神之御掟ニ基き申上候儀ニ御座候、尤私式下賤之身分ニ而不顧潜上之罪言上仕候儀、実ニ危急之御時節柄故、不得已聊報国之赤心を奉表候迄ニ御座候、

誠惶謹言、

慶応元年丑八月、撰海江異舟渡来之節、八田知紀於

京師建白仕候草稿写、

冊子原寸 縦二九糎 横二・五糎 一〇枚

二六 防長士民歎願書

(何部正外)

去ル廿二日豊後守様江留守居福原助右衛門御呼出罷出候処、拜謁被仰付、上封書之儀ニ付一応御受取ニ而 御覽

被為在候処、此儀ニ付而ハ、去ル十八日伊豆守様(松即儀法)より御

達被成候趣も有之、若兩人之内、万一病氣ニ而難罷出候

節ハ毛利左京(元周)・讃岐并大膳家老共之内、早々上京之儀御

達御座候ニ付、右書面ハ、公辺ニ而御取揚不被為在候筋

合ニ付、何れも期限之儀御趣意厚取扱候様との、御直達

ニ而封書ハ御渡し候、右之趣、其筋相心得候ものへ今晚

欵又ハ明早朝ニ而も委細申含帰らせ候様ニとの、御直達

被為、在、一応奉畏、再度助右衛門罷出、公用人ヲ以書

面歎願候内、士民動揺仕候節ハ却而奉恐入、依之左京・

讃岐・家老之内ニ而も其筋申立候節ハ、於、公辺御処置

被為在候哉、国許心得ニも相成候ニ付奉伺置度旨申上候

処、公用人ヲ以被仰出候趣ニ而ハ、元来大膳父子浪華江

被相呼御尋可被為在候処、御寛大之御処置ヲ以、末家并

家老之内被、招呼候儀ニ付、万一士民動揺致候共、大膳

父子如何様とも所置可致は勿論之儀、且召寄候儀ハ、実

ニ重大之事ニ而動揺可致哉杯、御猶子等可相願筋ニハ有

之間敷、其辺之儀、篤と弁解致候様厚説得可致旨、使之

者へ申含可遣事、

長防士民歎願書

寡君父子癸丑・甲寅已来、人心不折合、上巳・上元等之

儀種々出来、此余ハ禍変も不可測儀と、皇国之御為深ク

不堪掛念、遂ニ、公武建白も仕り、辱も微志徹上、件々

不被為捨置御採用ニも相成、弥増勉勵、人心を鼓舞シ、

抛身家御奉公申上候覚語等有之候処、不図も去亥八月以

来上京ヲも被差留候次第、実ニ以其由り処ヲ不知、闔国

之士民日夜悲泣罷在候、然処、血氣壯年之者慨歎之余り

自分疑惑ヲ生し、乍恐從來之、叵慮一定不拔之所奉伺上

度、尚寡君父子多年之心事哀訴歎願為可仕、追々国内ヲ脱

走、去秋ニ至り恐多も、闕下近く罷出候者不少、寡君父

子不堪驚愕、迅速鎮静トして益田右衛門介其外差登候処、

指揮不屈よりして歎願旨趣ハ通徹不仕、却而妄動ニ立至

り、天朝幕府へ之忠敬も湮滅之姿ト相成、東西藩邸ヲ

も被相毀、官位等被召放候との御沙汰も有之、臣子之

至情血泣慨歎之至り不堪罷在候、然処昨冬尾州老(徳川慶勝)公御下

向、父子無他心事御洞見、右衛門介其外万事御処置被為在、御解散ニ相成、依之寡君父子積年之誠意も 天幕江明燎徹上、乍恐 皇国大義名分も判然相立、僻陲僻壤ニ至迄徹底仕、最早平常之御沙汰有之欤ト、上下一統奉渴望居候処、豈不図再び征長との御事ニ而、軍師浪華屯集、大樹公御上洛之由相聞、闔国挙而何たる故ヲ不覚、甚以奉懇望候事ニ有之候、右様之次第ニ付而は闔国之疑惑素より一朝一夕之事ニあらず、日夜不堪憂悶候折柄、今般徳山・岩国へ御尋之儀有之、大坂江罷登り候様、閣下より御知達被為 在候由ニ御座候処、元来去秋京師變動よりして、尾老公御下向、夫々御処置被為濟候儀ハ、閣下ニ於テも既ニ詳ニ御伝聞ニも可被為 在候御事ニ而其余又候今般之御沙汰被 仰出、弓箭旃旗之間江御召出有之候ニ付而ハ馬角之難責、如何様之御取扱も難計ト人心疑惑益増長、臣子之至情弥切迫、万一も右両家致登坂候様相成候而ハ、国内一統揚議沸騰不可得止事ニ立至り可申欤、左候而は、天幕江奉対、殊ニ奉恐入候次第、父

子誠意も更ニ貫徹仕間敷ト恐懼此事ニ奉存候、伏願クハ閣下上ハ 皇国之御為、下ハ隣交之情誼ヲ以、一片之微哀御垂憐ヲ賜り、前条之次第 天朝幕府へ明燎御弁解被成下、速ニ邦安堵之御沙汰被 仰出候様御尽力被成下度、闔国挙而不堪切願之至候、誠恐誠惶稽首再拜、

乙丑八月

防長士民

今般御尋之儀有之、毛利淡路・吉川監物登坂候様被 仰出、早速罷出御尋之趣拝承可仕義ハ勿論ニ御座候、然処先達而私共より末家中迄歎願仕置候趣、定而御承知も可被為在、不容易企有之との御事ニ而、御再討被 仰出候段、仄ニ伝承仕、実以驚愕之至、只管苦心罷在候折柄、両人御召寄之儀、御沙汰被為 在、闔国之人心疑惑ヲ生し、大膽父子日夜不安寢食、謹慎中再び紛擾ケ間敷事件自然差起り候而ハ、奉対 天朝・幕府江恐懼痛心此事ニ御座候、素より御達之趣ハ条理明白御答可申上候得共、只今之形勢ニ而急速登坂ニ相成候時ハ、国内之動揺無覺束

御断申出候而ハ愈以不相濟、彼是苦心之至ニ御座候、右人心疑惑之原由ヲ申上候得ハ、昨年来父子謹慎恭順ヲ尽し、官位・御称号等御取上ケ之儀ヲも夫々之御請申上、猶又益田右衛門介ヲ始三老臣并參謀之もの、夫々罪科ニ処シ、御託申上、微衷聊貫徹仕候哉、尾州前大納言様ヲ始、御陣扨ニ相成、其後無間も於飯田争鬪之儀も有之候へとも、外向へ係り候訳も無之、爾来も弥謹罷在、不遠御寛大之御沙汰可被仰出と奉待候処、不図も御進発之御様子ニ付而ハ士民一統泣血悲歎ニ不堪、固より僻境頑固之風習ニ而鎮静方行届兼、畢竟不肖之私共不当其任ニ、慚愧之至ニ御座候、右等之情実篤と御亮察被成下、御隣藩之御交誼不被為捨置、何と欵可然御周旋被成下度、偏ニ奉懇願候、尚淡路・監物兩人よりも可申上候、已上、

右ハ穴戸備前広島迄持参書付、前文ハ依之広島江御達書也、

冊子原寸 縦二八糎 横二〇・四糎 四枚

三三 山階宮晃親王ヨリ島津中将殿へ

天下ノ大事ヲ論ズ

(包紙ウツ書)

「急」

島津大隅守殿

玉机下

晃

(朱)

九月八日封

」

不順之時節、随分く御自愛く存候、備後との

ニも無障御帰国、此上之御事と存候、併近衛殿御父

子太にく御残心く思召申候、御尤存候、乍此上

天朝ノ御事偏にく宜々内々御頼申入候也、

又々為念申入候、此書中極密ニ候間、仮令御家老・

側用人刃トテモ御如才ハ有間敷候へ共、先々御他言

なく希入候、

天機洩し候辺、重々恐入候事、貴君トハ出格くニ

親睦之辺ニ付、如此打明申入候、御懇思く可給候、

不備、

秋冷之節益御安康可賀候、晁無事、乍憚御安慮可給候、
抑柳營も于今在坂、是と申事も頭ニハ不見、先々無事欵
ト存候、此節は、(松平定敬)桑計在坂、(徳川慶喜)一・会ハ在京、(松平容保)京都も先々
平穩之趣ニ候、

朝廷も御靜謐ニ而、国事御評定も一向不被為在、国事掛
り余り久々不面会ニ而は

公私ニ付如何と申説より、毎月四ノ日三ヶ度計、参

内御用有之候節は、如例不被為在候節ハ速ニ退出と定リ

候、何分軽事ハ一・会周旋方、

殿下・尹宮江参リ内々言上、重事ハ一・会殿、殿下エ被

参言上と申振合、一通リ之事ハ国事掛リ一同へ承リ候得

共、機密ニ渡候事ニハ 八景間寄合、御小座敷御評定ニ

而知レ不申候、大樹公初参

内之節、老中以下云々之形勢ニ而、一・会・桑大心配よ

り官武御直掛合ハ堅ク御止メ申上、内外愈々一・会・桑

江從殿下御任ニ相成り、一・会・桑尽力ニ而、両三年ノ

中ニ

御一和、天心御安福ノ処ニ移シ候度、何分ノ御心長ク

行末御覽被下候様との事共、惣而其趣ニ被任候事、大体
方今之御時宜ハ議伝等へ未御沙汰なく、先々内外御用向

悉く会之老臣江殿・尹より御内話、会・桑ノ論ヲ殿下ノ

思召又ハ尹ノ御賢考ト被称、両役江被仰出候事ニ相成候、

一・会・桑ト順々唱候得共、実ハ会・桑・一ト可謂勢ニ

候、万々御推察ト存候、国事掛リ中

殿下・内府公・正親町三条・久世、右ハ王政復古・皇国

挽回、惣而有志輩ノ称候辺ニ思食も存慮も可有之哉ニ被

察候、徳大寺・尹宮・飛(飛鳥井)・野々宮・広幡・六条等ハ藩説

ヲ破リ、幕吏説已ヲ信用、弥勒ノ出世、三会ノ嘶ハイザ

シラズ、是非善惡共幕吏ニ從リ

天朝も 柳營ニ盛衰ヲ同ク遊サレズンバ、不治ト申処ガ、

尹・野説ニ候、夫故ニ昨秋以来、外藩ノ士忠告申入候得

共、速ニ会・桑江御漏しニ相成り、公卿も正論内言上候

得共、是又幕吏エ御漏しニ相成候故、国事掛リ両役一同

不存事も、三藩吏ニ漏レ、武門不平ト相成候趣ニ候、不

数見、乍憚内府公、大樹公上坂以前ハ大ニ／＼御時宜不
好、殿下ハ正実ノ御方ゆへ、見より極密公私ノ為ニ国
事掛り退役相願候へ共、齊敬受合候間、安心而奉職候様
との御懇命ニ付、尸位素餐恐入候へ共、不相交相勤居事
ニ候、尹宮・野之辺は内府公・見・正三辺ヲ薩説家ト
称、大ニ／＼忌ミ惡ミ、可成丈ケ機事ハ不為聞方ト申御
説ニ相成候、一時ハ参
内も可被止勢ニ候、然ル処

大樹公在坂相成後ハ、実ハ不知、蔭ニハ御時宜好ク相成
り、尹宮辺も余リ不気色ニ不相見候、併陰ニハ
大奥辺江讒言候事ト被察、見ハ勿論、内府公・女中・御
児辺ノ時宜甚不好哉ニ相見候、併官々・宮、妄ニ被忌候
ハ、政辺ニ奉職候者ノ恒、和漢例不少、貪着ニ不及事ニ
候、論ニも不及事ナから日参ノ老松大夫言行ニ失礼多、
甚奇怪ニ候へ共、必竟何等之心得もなき少年ト一笑ニ致
し居候、何分／＼内府公御当職ニ被為成候御時節ヲ有志
之貴賤日夜奉待事、実々内公ハ晴ケ間敷御事と存候、然

ル処待々之内公御当職ニ被為成候上、ヤハリ／＼今ノ如
ク姦人不忠之輩ト御談合
御奉職ト申様而は

皇国も何も／＼恐入候事共、恐入／＼存候、此辺御如才
ハ有間敷候得共、貴家君臣より格別御親辺ヲ以、乍恐連
々内公江御諷諫希入存候、撰家以下人物之選ハ在京之御
家来就中両高崎・藤井・岩下等ニ御尋候ハ、詳悉ト存候、
芸・筑世人説之如キハ、在京御家来、見よりハハルカニ
スグレ明朗ニ候間、纏々不申入候、扱又公卿面々御無人
ニ而恐入候、一時ハ心得違ノ人ニ候得共、当時引込居候
万里小路弁(傳房)・長谷三位(信傳)、是ハ急度／＼御用相立人ニ候、
長州江走候三条・東久世、是亦可悲人物ニ承り候、少々
ノキツハ候得共、醍醐・裏辻・大原・中御門弁(経之)・伏原三
位(俊政)・坊城弁、是等ハ有志之人物ニ候、愈々御賢者可給候、
扱又兎事、老年ノ上愚存ニテ妻縁不致候得共、折角貴家
御尽力被下而相立候山階宮断絶致候、如此時節ニ不都合
之望なから、家名相統之為、且ハ見ニ代リ

天朝ニ忠仕為致候タメニ仁和寺宮還俗、兎養子ニ相願度

(彰仁親王)
(高崎正風)

候、此辺ノ意味合、且又仁門人物辺ノ処ハ左京能々承知

候間御尋可給候、仁門事、別ニ親王家ニ御取立又ハ清花

ニ御取立候ハ、尚更広大事ニ候得共、恐ラクハ不成ト

存候間、御用可立人物故ニ、兎家ヲ譲リ候而、忠仕為致

度候、此辺御熟考之上、何卒ノ御尽力希入存候、乍序

申入候、先日観行院逝去ニ付、世上停止其他件々ノ事ニ

(橋本整子)
一観行院ハ橋本氏ノ出ニテ、和宮ノ御生母ナリ、慶応元年八

月十四日逝去、七日間鳴物停止アリ、コノ件ニ付キテノ紛

紜ナリ」

而官武往ぶく有之、町奉行・組与力等自然公用人辺 幕

威ヲ張り

朝廷ヲ蔑如致し候ニ付、天心不穩、関白殿も尹宮太心

配ニ而、種々今度取計候官家無云々の事ニ相成り、事靜

ニ相成候、一・会周旋方も此事ニ心痛致し候得共、口計

ニ而、実事不行、公武一和ト夫々尽力候得共、町奉行

組与力・同心ヲ江戸・蝦夷エデモ遣し、弊風不存新与力

・同心ニ改ズンバ、実ノ一和ニハ不叶事ト存候、何分

朝廷も姦臣ヲ被退、忠臣ヲ令進、議奏ハ議奏一同、八景

間ハ八景間一同、一和熟談家柄計ニナリ、俗ニ申三十名

堂上ニテモ明ナル人ハ挙用セラレ候様ニナラデハ

王室振起ハ不叶事ト存候、今ノ歎息候風ハ在京御家来殊

ニ左京・藤井・小松ニも内々御尋候ハ、可申入候、扱又攘

夷・鎖港ト航海開市ノ件々、如御存六ヶ敷ノ事ニ候ハ

共、武門方ハ如存知、官家方も一端トハ大ニ開ケ、明

らかニ申諭し候ハ、大抵其埋ニ可伏候、併一端攘夷

御祈念ニ行幸も被為在、神仏エ 勅願の御祈禱も毎々公

然被行候御事ゆへ、若上表入貢・開港・互市

勅許ノ時ニ至り候ハ、宗廟社稷エ改而 勅使被遣、少

しもノ人心疑候様ノ所置ナリ、愈々公然ニ無之候ワデ

ハ、又々異論出来事ト存候、何卒ノ

天朝存亡危急之秋ヲ以テ、反而ノ

皇国挽回、王政復古ノ端ト可変妙策奇謀コソ可願、又可

行時ト存候、何卒御熟思上、宜々御賢考為国家希入候、

申入度事ハ海岳候得共、禿筆不文、委曲ハ帰国ノ御家来
別而高崎左京等ニ御内談可給候也、恐謹言、

九月八日認メ置候 晃

島津中将殿 玉案下

文書原寸(折紙) 縦 一七糎 包紙原寸 縦二九・五糎
横四八・五糎 四枚 横三八・二糎

三六 毛利敬親広封父子ヨリ島津中将少将父子

挨拶状

(包紙ウ書) 「島津中将様 敬親

島津少将様 広封

御直披

□(朱)

「乙丑欵丙寅欵」

一書敬呈仕候、秋冷相募候処、愈以

御父子様御安健被成御座候御様子、欣然罷居候、拟昨年

中は貴国と彼是不信之次第ニ立到リ、千万御気毒之処奉
存候、下拙微志も兎角不行届故、家来之者心得違も有之、
大ニ痛胸、今日迄打過申候、然処先年来於征夷府对外夷
候所置不行届よりして、人心之動揺ニ立到、乍恐

朝廷御威徳も御衰傾ニ可及と相考、憂歎之余不顧微力致
周旋候処、諸事齟齬多く、赤心も貫徹不致而已ならず、
今日之場合ニ立到候次第、何共残念之事御座候、此度貴
国江罷出候家来之者より御様子委細致承知、万端及氷解

候、於貴国勤
王之御正義殊更御確守之由、実以欽慕之至候、
皇国之御為無此上と乍陰欣躍致御依頼候、弊藩之義ハ前
段之趣ニ付、日夜

朝廷之御様子懸念罷居候而已、心事何も御憐察是祈候、
委細ハ上杉宗次郎江相咄候間、御聞取可被下候、先は任
好便如此御座候、恐惶頓首、

九月八日

広封

敬親

尚々、先日家来之者、貴国へ罷出候節は、彼是御懇

切ニ被成下候由難有奉存候、此後も可然致御頼候、

以上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第六八〇号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一五・八種 包紙原寸 縦二七・八種

横 一五八・八種 横 四一種

一三七 高奉行届役料米高増減調

元治元年慶応元年兩年度

(表紙) 慶応元年丑九月

御役料高書抜

高奉行

一高千石

桂右衛門殿

一高千石

諏訪伊勢殿

一高三百石

島津出雲

一高三百石

川田将監

一高三百石

樺山主計

一高三百石

町田内膳

一高貳百七拾七石四升老合

伊集院亘

五勺壹才

外ニ貳拾貳石九斗五升八合四勺九才土地

一高貳百石

高橋縫殿

一高貳百石

菱刈奎之介

一高貳百石

町田民部

一高貳百石

関山 紘

一高貳百石

頼娃織部

一高貳百石

新納刑部

一高貳百石

島津 仲

一高貳百石

島津隼人

一高千石

川上但馬殿

一高千貳百石

川上式部殿

一高千石

川上龍衛殿

一高千石

小松帯刀殿

慶応元年 (1865)

一高貳百石	岩下佐次右衛門	一高百八拾石	名越左源太
一高百八拾石	伊集院隼衛	一高百八拾石	中村新介
一高百八拾石	仁礼舍人	一高百八拾石	北条織衛
一高百八拾石	猪飼 央	一高百八拾石	向井新兵衛
一高百八拾石	井上駿河	一高百八拾石	渋谷 梢
一高百八拾石	谷川次郎兵衛	一高百八拾石	島津頼母
一高百八拾石	郷原 転	一高百四拾石	島津矢柄
一高百八拾石	二階堂源太夫	一高百八拾石	川上正十郎
一高百八拾石	豎山武兵衛	一高百八拾石	島津求馬
一高百四拾石	大野多宮	一高百四拾石	樺山要人
一高百四拾石	平田靱負	一高百四拾石	龜山甚之丞
一高九拾石	肥後八右衛門	一高九拾石	土岐平太夫
一高百八拾石	山口直記	一高九拾石	鎌田愛太夫
一高百八拾石	伊集院静馬	一高九拾石	東郷長左衛門
一高九拾石	本田休兵衛	一高百四拾石	島津藏人
一高百八拾石	比志島静馬	一高百八拾石	相良治部
一高百八拾石	伊集院伊膳	一高百八拾石	堀四郎左衛門

一高百四拾石	市来次十郎	一高九拾石	養田伝兵衛
一高百四拾石	山田十介	一高百石	種子島次郎右衛門
一高百石	木脇次郎右衛門	一高百石	川上後五右衛門
一高九拾石	江田平藏	一高百八拾石	島津右近
一高九拾石	東郷藤兵衛	一高九拾石	山之内作次郎
一高百四拾石	新納波門	一高百四拾石	宮之原小膳
一高百四拾石	柳 正之丞	一高百四拾石	新納主稅
一高百四拾石	北郷数馬	一高百八拾石	田中仲次郎
一高百八拾石	村橋直衛	一高百八拾石	町田少輔
一高百八拾石	吉利群吉	一高百四拾石	小森新藏
一高百四拾石	大久保一藏	一高百八拾石	西郷吉之助
一高百石	楠田助作	一高九拾石	伊地知小十郎
一高百四拾石	松岡十太夫	一高百四拾石	穎娃弥市郎
一高百四拾石	伊地知壯之丞	一高百四拾石	富山丈之助
一高百八拾石	田尻 務	一高九拾石	伊木七郎右衛門
一高九拾石	仙波市左衛門	一高百四拾石	細瀧権八
一高百四拾石	赤松主水	一高九拾石	本城源七郎

一高九拾石 福島半次郎
 一高九拾石 森川孫太夫
 一高百四拾石 吉川源右衛門
 一高九拾石 加藤権兵衛
 一高百四拾石 西筑右衛門
 一高百八拾石 島津良馬
 一高百八拾石 島津伊織
 一高九拾石 汾陽次郎右衛門
 一高百四拾石 島津主税
 一高百石 山田静治
 一高百石 平川宗之進
 一高九拾石 伊藤彦介
 一高百石 伊集院中二
 一高百石 伊集院周八
 一高百石 榊山四郎左衛門
 一高百石 山中左衛門
 一高百石 岩下新太夫

一高百石 大野清左衛門
 一高百石 安田助右衛門
 一高百石 得能彦左衛門
 一高百石 田原直助
 一高百石 鈴木壮七
 一高百石 蘭牟田利兵衛
 一高百石 追水善左衛門
 一高百石 石神万兵衛
 一高百石 有川十右衛門
 一高百石 高崎兵部
 一高九拾石 国分十右衛門
 一高九拾石 税所竹兵衛
 合高貳万貳千三百拾七石四升壹合五勺壹才
 外二
 貳拾貳石九斗五升八合四勺九才 土地
 去子年
 御役料高壹万七千三百八拾七石四升壹合五勺壹才

差引

高四千九百三拾石

去子年より当年迄右之通相増申候、

右は子丑兩年御役料高増減右之通御座候、

毎年九月十五日限、可書出旨被仰渡置候間、此段申上

候、以上、

丑九月八日

高奉行

冊子原寸 縦二八・三糶 横二一・三糶 九枚

三六 内田閑平能勢角太夫(宇和島藩士?)等

ヨリ松岡十太夫市来六左衛門へノ礼状

付同藩士ノ集成館等見学ノ依頼

(包紙ウ書)
一松岡十太夫様

内田 閑平

市来六左衛門様

能勢角太夫

ノ

「

三白、着崎後早速御挨拶書状指出筈ニ御座候処、同

藩之者御地へ罷出候折柄を相待、彼是延引、御用捨
可被成下候、以上、

一筆致啓上候、秋冷弥増ニ御座候処、何茂様愈御堅勝被
成御勤務珍重之御儀奉存候、次ニ小生共、無異滞崎罷在
候、乍憚御休慮被成下度候、寔ニ過日は於錦土御目見被
仰付候上、毎々品々拝領物頂戴仕、冥加至極難有仕合奉
存候、右御礼之程其御筋へ宜御取合被成下候様奉頼上候、
隨而逗留中へ度々御尋訪被成下、日々種々之御馳走、殊
ニ品々預御餞別、段々不容易御手厚御取扱共、重々忝次
第、千々々不浅奉多謝候、扱は御懇談中一寸御頼申置
候、同藩之内藤井清太郎・木村尽吉之兩人、集成館御始
愈拜見仕度申出候ニ付、乍卒忽今般指出申候、兼而中原
猶介様へも御頼談申述置候ニ付、御同人様始御掛り御衆
中様へ宜御通声被下度候、尤遊歴諸生輩之義ニも御座候
へへ、町家止宿等之儀、御聞置被成下候迄ニ而重畳之仕
合奉存上候、先へ右御頼前書一応之御礼謝旁如此御座候、
恐惶謹言、

九月廿七日

能勢角太夫

但出入証文拾五通

加藤藤左衛門

右御鷹方

内田閑平

一金貳百五拾三兩

松岡十太夫様

一錢六拾貳貫六百六拾九文

市来六左衛門様

但出入証文貳拾七通

追啓仕候、追々玄冬ニ指向候時候、御自愛之程奉專

右定式方

念候、乍末筆桂様よりも品々御餞別御惠被成下難有

一金千五拾六兩三朱

仕合、御序之刻宜御挨拶御申述被下候様、任御懇御

一錢三百四拾八文

縫申上候、以上、

但出入証文六通

文書原寸 縦 一六・二種 包紙原寸 縦二六・三種

横 一四七・八種

横 三四種

一錢百八拾四文

三六 御鷹方其他積立金ニ付御納戸新旧蔵役

但出入証文老通

引継手續方伺出及指令

右若殿様御目録銀方

一三八九ノ一

一金百拾四兩貳歩

一金百五拾四兩

一錢八百文

一錢貳百六貫文

但出入証文老通

右鎮国殿別銀方

合金千五百八拾四兩老朱

合錢貳百七拾貫九文

合出入証文五拾通

右は先年より御納戸藏御在金之内、時々出入払相成居、
いまた引結不相濟、藏役交代之節も是迄右通ニ而、次渡
相成来申候、尤右証文之内、金何百兩と計畫記、直成不
相分株も段々御座候、然処、当八朔藏役交代次渡付八貫
文金、又は七貫貳百文金之外、前文直成不相分株々も都
而本行通取束、是迄之通ニ而可致次渡段、古藏役より申
出、其通ニ而は又以後次渡之節可致混雜は勿論、第一御
勘定方ニ差支候間、何れの筋金相場通株々取分可相請取
段、是又新藏役方よりも申出趣旁承届申候、右付吟味仕
候処、新役申出之趣無余儀訳合付、其通株々取分互ニ請
取渡いたし、最初之出入本迄、都而先々相勤候藏役共迄
順々次下ケ等いたし、再勘定ニ而も被仰付候儀当然之儀

と奉存候得共、是迄段々御納戸藏之儀、混雜仕居候訳も
有之、殊ニ此節御改革被仰渡、以来嚴重取締行届候様、
分而承知仕候趣も御座候付、尚又得と吟味仕候処、右通
次下致再勘定候ハ、過不足行違も相分可申賦ニは御座
候得共、年数ニも相掛、旁混雜いたし、不連続之儀可有
之も難計御座候間、不容易儀ニは御座候得共、本行出入
金は迄之通次渡、新役方江此節都而御藏払切被仰付、右
を別段当座江根帳取仕立、右根帳江銘々出入員数并金相
場等銘々糺付、髓ニ記置、左候而、以後出入上納相成候
節は時々根帳江書記、別段引付を以御藏本立いたし、其
外払切首尾ニ而相濟候節は、時々御証文等之形行を以根
帳消除候様仕候ハ、何そ不締之儀も無之、後年煩敷儀
も有御座間敷、右付而は詰御徒目付方ニ而出入首尾相成
儀も御座候付、彼方江も致引合候処、前文通被仰付、何
そ差支無之候間、以来迎も右通被仰付可然段も承届申候
間、旁右通被仰付度儀と吟味仕候、乍然何分御沙汰次第
奉存、此段申上候、以上、

丑九月廿七日

御納戸奉行

山口彦五郎

花 鎌 藏

篠崎 甚七

中山甚五兵衛

一三八九ノ二(一三八九ノ一)号文書ノ行間ニ朱書シタモノ

申出之通申付候、

十月 但馬

此表申出之通被仰付候条、如例可被申渡旨、御差図ニ

而候、以上、

丑十月十八日

向井新兵衛

御勘定奉行衆

御納戸奉行

文書原寸 縦一四・七糎 横二九四・三糎

一三三〇 御鷹方積立金「新銭」兩替ノ件

御鷹方所務米千五百石代銀之儀、專御積金ニ而御手許江

被備置、御用途相成来申候処、近年右代銀都而新銭ニ而御入付相成候付而は

御手許御用は勿論、大分之銭高ニ候得は往々御格護方ニも差支、旁以今形難被召置候間、吟味仕申上趣も御座候得共、当時金銀無多事、速ニ御吟味付兼候間、先見合置先寄候而御吟味可有之段承知仕置候、然処

二丸御方江年々現金式万兩位大坂より被差下、右は諸御弘相成候而宜候間、格別成御積金ニ付而は、右新銭は兩替被成候而御差支無之段、

二丸御付同役より承知、誠以御都合之御事と奉存候、依之以来前文所務米新銭ニ而御入付相成候節は、時々

二丸御方と致兩替、御積金ニ被備置候様取扱可仕、万一二丸御方ニ而御故障之訳も御座候節は吟味仕、別段御積金相成候様可仕候間、被聞召置度奉存、此段申上候、以上、

丑九月

御納戸奉行

文書原寸 縦一四・七糎 横二二五・七糎

一三二 黒田了介ヨリ久光公へノ上書

海軍振興、人材養成ノ件

〔包紙ウラ書〕

黒田了介

〔黒印〕

〔表紙〕
上

卑賤之身ヲ以、御政道相議候は奉恐入候得共、昨年来御扶持被下、江戸表砲術修業被 仰付、御厚恩之至日夜感泣罷在候、元来不肖之質急ニ御用務兼候間、御為筋ニ茂相成候義聊御座候ハ、御報恩之為言上可仕と存候折柄、御自分様早々当今之外虞御痛心被為在、尊攘之御思召被為立、時勢御洞察之上冗費都而御減省被遊、大艦・巨砲之充備仕、開成館日々増盛ニ相成候段、格別之御政道、諸藩ニ対面目御座候而難有奉存候、然処此節又英吉利へ軍艦・商船御注文相成候趣承及仕、窃ニ疑慮仕候仔細乍恐申上候、船艦而已數多有之候共、運用之人乏敷御座候

得は終ニ無用之長物ニ相成可申、器械は御注文次第何時ニ而茂御聚相成可申、人物急ニは難得御座候、現今蒸氣船既ニ五艘ニ茂相及、御封三ヶ国數万人中運洋航海測量機関之学ニ達候者僅一船丈之人數無御座、一船不足之御人數ニ而五艘之上又候、三艘御注文候は如何と存候、乍恐此節御注文御取止被遊、其御用度を以 公子様方御始、門閥之子弟ヲ為遊学生、長崎・江戸表へ被差遣、外国諸方へ茂渡航被 仰付度奉存候、一体世上一般海軍至極卑劣之者と存込、只今以只管修業仕候者無御座、幕府海軍所ニ於而茂式日僅四五十人位之出席ニ而、公役と相見へ睨と修鍊仕候者無御座、御国許別而其氣味合ニ御座候而、御先代様御在世中水軍兵士御取立相成候処、人々矢張卑劣と存、一向願出者無御座、木村次右衛門と申者大ニ慷慨仕、当務御断申上、兵士ニ罷成候より追々願出者茂御座候得共、皆窮士一時之寒餓凌候迄之事ニ而、真ニ海軍ニ興起御奉公仕候者左迄無御座、全海軍を賤候所より之事と被存候間、此節御構宜被遊、海軍格を陸軍之上ニ御

居へ被成、公子様方御始、門閥之子弟海軍修業諸方差出ニ相成候へ、人々面目一新仕、興起奮勵眼前ニ御座候、左候得は、其術ニ通候者不出数年候而輩出可仕、其上柄御船御注文相成候共、更ニ不晩と奉存候、且御国許開成館日々増盛とは乍申、教導人不足ニ而指南不行届ニ御座候より、先頃坪井・足立塾生兩人御差下ニ相成候、右兩人和蘭文典素読出来候位之事ニ御座候而格別御用ニ茂相立不申、仮令諸方遊学生御差出ニ相成候共、御国許ニ而芸術一通り出来居候へ、遊学之上不勞而功陪候而御用ニ茂早々相立可申、先ニは指南人御差下、彼兩人位之事ニ而は更ニ詮無御座、幕府諸藩中英・仏・阿蘭学ニ相達候人物数多御座候得共格別信用も無之候間、得と御相談御厚待相成候へ、随分御抱ニも相成可申、夫ニ付御入費茂余計可有之候得は、諸士給地高御規定より剰多所持之分御削減、御規定通ニ被遊、寺社領高御宛行、余計之分適宜御引上相成候へ、大数八千石位は及可申、是等ヲ以御償ニ相成、御船御買入当分御取止ニ相成候ハ

、格別御用度ニ差障候事有之間敷と奉存候、且只今迄御城下窮士度々御救被遊御仁政之段恐多奉存候得共、元来窮士御奉公無之者、糊口之為内職而已致居、折角之志相立兼候向も御座候間、別段御救被遊候より夫々所長ヲ以開成館ニ被差出、御扶持被下置、専修業候へ、其中ニは御用立候者出来可仕、尤 公子様方諸方御遊学御渡航時勢、夷情御觀察御器量御広メ他日三軍之御指麾被遊而已ならず、人才輩出器械充備之上御自分様茂海外御渡航被遊、彼之情実横行之由御探索被遊、内訌外虞之生候根柢此ニ在、是ヲ除治之術此ニ在と御洞察被遊候へ、尊攘之御趣意可被為遂、
 叡慮可被為安、
 御先代様御尊靈可被為慰、
 神州終ニ盤石之安ニ可有之、無左候得は、
 神州終ニ満清之覆轍相踏候も難計と奉存候、昔は俄羅斯国微弱人頑愚、歐羅巴諸方重く侮慢致候所、其主比達王と

申者出^(傑力)賒明奇杰国都を離、諸方之船廠火器局ニ微行致、

工芸を講習仕帰国之後諸臣ニ伝授致、又千金を抛各国諸生工芸ニ達候者ヲ抱入、遂ニ世界未曾有強大之國と罷成

候、御国許之諸士強幹材俄羅斯微弱頑愚之比ニ無御座、御自分様御器量、乍恐比達王之右ニ御出可被遊と奉存候

間、右之件々御垂考被下置候ハ、至極難有奉存候、時勢切迫、不憚忌諱冒万死言上仕候、謹言、

丑九月

黒田了介^(精進)

冊子原寸 縦三三・七種

横 一七種 六枚

包紙原寸 縦三七・八種
横二七・五種

二三二 安田轍蔵ノ建白書

琉球通宝日本全国通用ノ件

「包紙ウツ書」上

封〇「黒印ト」封「ハ重徳」

安田轍蔵

「表紙」上

私儀

当島江被差^(遺)遣候ニ付、訳合は全不奉存候得共、奉恐入

万事謹慎罷在候処、此度川上助八郎・有村壯一兩人

ヨリ何成存含候儀モ有之候得は申上候様申呉候ニ付

重々奉恐入候得共、右様申呉候儀至極忝存候故、幽居

同様之身分をも不顧、無此上奉恐縮候得共奉建言候、

方今宇内之形勢を伝聞仕候得は、実以不容易機会ト奉存

候、別而物価頻ニ登貴仕、人心動揺シテ不止、日追治乱

之経界ト相成、各国都而富国強兵之策を起立シ、非常之

備を設、煉武之術盛ナル由ヲ伝聞仕候ニ付、他邦は差置

当御国家之儀ニ付深ク歎息仕候儀御座候得共、如私不調

法者之以筆紙、胸中苦満之儀を不殘奉言上候儀は迎茂不

相叶候得共、存含候九牛之一毛を奉建言候、其一儀は琉

球通宝ニ御座候、此通貨元来内実は天下通用無差支為致

可申積ニ而、既ニ私製造起立仕候節モ、毎月雜用相除、

全御利潤之処、金六万弍千五百兩宛上納仕、壹ヶ年ニ付

金七拾五万兩、全御利益上納可仕申上置候処、鑄錢場所

為見聞、当島江御内用之由ニ而被差遣候得共、実は別段

奉承知候儀モ無之、空敷消光罷在候ニ付、既ニ昨子年七月有村壯一ヲ以奉差上候歎願書面ニ巨細奉申上候通、苦神困勞仕、右通宝首尾能御届済為致候ニは第一尊兼仕候処は、右通宝天下無差支通用相成候儀ニ御座候、是私鑄錢起立之元来宿意ニ御座候故、万事右ニ元付、諸方示談取組候得共、何欵当御国律ニ不為叶候儀有之候故、私身上當時之通被仰付候儀と奉恐察候、似右製造請負不仰付候儀は無是非モ儀と奉存候得共、右通宝他国通用不致候而は無此上御国害ニ相成候ニ付、乍陰頻リニ歎息仕候、別而半朱製造之儀は松岡十大夫・加藤平八等候、私御国江着仕候節申決候迄ニ而、実は琉球通宝天下通用相成可申迄は談話ニモ他邦エは不仕候位之儀ニ而、琉球通宝之四字、天下公然ト御免許之惣触レ相濟候上製造可仕含ニ御座候処、右根末ニ走候御所置、乍恐、広大之御国害ト相成候儀は、私当時屋久島ニ幽居罷在候ニ付、当島之振合を以御国害ニ相成候現事左ニ奉申上候、

一 当時銅地金并ニ錫鉛トタン等之売買相場之儀全不奉

存候得共、私在府之節ヨリ三双倍程登貴仕候処ニ而、

半朱壹枚代錢七拾八文位ニ而出来可仕哉ニ奉存候事

尤此儀は凡此位ニ而出来可仕哉之儀ニ候、譬如是ニ而相成候得は、是程ノ御損ト申候迄ニ候

一 半朱壹枚ニ付錢七拾八文ニ而出来仕候得は、當時壹

枚式百七拾八文ニ御私相成候得は、金壹枚ニ付式百

文之御利益トナル、

一 經節於御当地目代三拾五貫文ニ御買入相成候、此半朱百

廿四枚ハ錢百三拾四文也、

此半朱一枚七拾八文トシテ拾貫式百文也、右を三

拾五貫文ニ通用被仰付候間、全式拾四貫八百文之

御利益トナル、

一 經節於御当地目方拾貫目七拾貫文ニ御私ナル、此半

朱式百四拾八枚ト錢式百六拾八文トナル、

此半朱一枚七拾八文ニ見而廿貫四百文トナル、

右ニ而全之御損四拾九貫六百文トナル、

前出廿四貫八百文之御利益アリ、

後入四拾九貫六百文御損トナル、

此処ニ而前後並競見而全廿四貫八百文御損トナル
此一条右之通ニ而、又此半朱を御払被為遊候得は、杓枚
ニ付式百文ノ御利潤トナル、又是を上納ニナレバ、杓枚
ニ付式百文ノ御損トナル、如是シ而出入無益之上、屋久
島奉行在蕃始当島詰役苦勞金村々庄屋御心付等都而散シ
而不返財ニシテ、其上売買御品物非常損シ、且は破船等
之御損失は皆費而不惠財ナリ、既ニ破船モ昨年来数度御
座候由承及候、都而此一条虚唱ニ御利益現レ、其実は紙札
同様之貨物反復往来之中現ニ此算を被為遊御覽候得は、
勞シテ無功而已ナラス、勞シテ有損事如是ニ御座候、尤
当百錢逆モ大同小異ニシテ何分私始存込候様、天下通用
無差支不相成候而は、全之御損ト相成候而已ナラズ、御
領内ノ正金銀は不殘他国江出シ尽、万一非常之節甚御用
途を被為欠候様ノ儀モ可有之候哉と深ク歎息仕候、尤屋
久島之儀は現ニ三拾五貫文之品を御買入相成候而、七拾
貫文ニ御払被為遊候而スラ如前文御損失過分之事ニ御座
候処、増而式割三割之眼前御利益は都而广大之御損失ト

相成候故、乍陰私儀は氷肝寒心罷在候、伏而奉願上候ニ
は、是非々々琉球通宝、天下無差支通用相成候様御苦勞
被為遊度奉念願候、尤琉球通宝他国通用差支候而は、紙
札之方反而御益ト奉存候、然ル処千辛万苦仕、公儀御届
濟為致候無甲斐モ、乍恐此処御開不為遊、類ニ御製造被
為遊候得は、御領内は実ニ正金払底相成、紙札同様之通
貨充滿可仕儀は勿論、其上右通宝充滿仕候ニ引連、自然
ト價位漸々下落仕、既ニ當時表向は金老兩代錢九貫文ニ
御定被為遊候得共、内実は正金老兩を以琉球通宝拾四五
貫文ニ交易仕候由伝聞仕候、此儀実ニ甚歎ケ敷奉存候、
右通ニ而は別而他国ヨリ御領内は物価登貴可仕訳合左ニ
奉申上候、

一於大坂表、当時金老兩代銀百五匁位ト伝聞仕候、且
錢考貫文代銀拾六匁位ト伝聞仕候、左候得は、於大
坂表、金老兩為銀百五匁ナリ、又金老兩為錢六貫五
百六拾文ナリ、譬於大坂表錢六貫五百六拾文之品物
を買、是を御国元之琉球通宝市中相場、金一兩代錢

拾四貫五百文ト見而、右大坂表買品物ハ高利運賃損シ、物金利雜用見込四割をカクレバ、於大坂表、錢

六貫五百六拾文之品物忽式拾貫三百文ト相成候、此処ノ道理、乍恐能々御玩味不為遊候而は、日夜ニ物

価登貴仕候事、銀札通用無御座、諸国と引競候得は三双倍余ト相成候間、乍陰私儀は見聞仕候ニ不忍奉存候間、重々奉恐縮候得共、奉建言候、

右故、琉球通宝之四字天下通用御免許表向有之候迄は、半朱製造不仕候儀は勿論、談話ニモ他国江は不仕候位之処、十太夫・平八等江申決候ニ付、御製造相成候上は無是非モ儀と奉存候間、此上は一日も早く琉球通宝之四字天下公然ト通用相成候様、御手を被為召付候様、乍恐奉念願候、左候得は、現在右通之御損は無御座、广大之年々御国益ト奉存候間私存含候、琉球通宝天下通用御免許相成候道筋左ニ奉申上候、

一元来於公儀は琉球通宝天下通用為致候儀は、甚不相好候儀ニ御座候得共、右通宝通用相成可申候様御免許可

有之筋は、至極密ニ公儀其筋御役方江示談仕置候談話之道筋巨細左ニ奉申上候、

一近來物価頻リ登貴仕候儀は、異国交易而已之儀ニは無之候、其訳合は、享保ヨリ度々儉約之策起り、第一衣服之製度相起リ候処、松平越中守様(定直)を始、都而眼前之儀論ニ迷ひ甚大儀を失ヒ給、別而歎息仕候、其儀は元來本朝ニは草綿之種無之候故、古昔は麻葛之類ニ而衣服調度仕候由伝聞仕候、然ル処度々古來綿種之異国ヨリ來舶仕、本朝諸国江植シ由伝聞仕候得共、植作之法全不伝候故ニ御座候哉、兎角繁昌不仕候由伝聞仕候、既ニ衣笠内府ノ和歌ニ

シキシマノヤマトニワアラス、カラヒトノウエテン
ワタノタネワタエニキ

尚此外証拠ト仕候儀種々御座候得共、何分植作之法全不伝候故、数度綿種舶來候得共、昔此品甚弘底仕候由伝聞仕候、然ル処、中古綿種并ニ植作之法全相伝仕候由、巨細証拠ト仕候儀御座候、乍去右綿種を以頻リニ

無分限諸国ニ植作可仕候は一向申伝迎モ無御座候、且又古来申伝候ニは、於本朝養蚕を以至極貧民を多分ニ救助仕来候由ニ御座候、尤右養蚕之儀モ異朝ヨリ伝来仕候処、其種其製、寒国ニ而は朝鮮種を製養シ、暖国ニ而は王氏種を養蚕仕、又寒暖国共ニ合蚕を製養仕候由ニ御座候処、方今製作仕候蚕種之儀は、右三種之内何レ之種ト実は髓ニ定ガタク相成候上、製作も於本朝は東西南北ニ隨寒暖モ不同風土モ異候故ニ御座候哉、諸国共ニ製作モ相變シ唯今ニ至リ候而は、右三製之儀は全不分明ニ相成候得共、養蚕製作共至極地風逢候妙処ニ至候哉、當時自本朝出產仕候処之素糸は、支那・朝鮮等ヨリ產出イタシ候素糸ヨリ遙ニ価料相勝候由、異国人ヨリ伝聞仕候、尤右養蚕之儀は国々ニ而製作仕候得共、其別而多分製作仕出產相成候は、奥羽・甲信・常野・総武・相駿・三越・三丹・江濃・飛遠・豆腐石播其余国々ニモ小々宛は諸国共養蚕仕候、尤何ケニ而モ山林又は屋敷居廻リ等都而米・豆穀作之障リニ不

相成候場所見立、桑之木植付置、右桑之葉を以養蚕仕候儀ニ付、一切穀物之減シ方ニ不相成、衣服ニ製造仕候ニモ貧民は右養蚕仕候素糸は売払、其代料ニ而綿布買入、衣服調度仕居候処、松平越中守様御老中御勤役中、急度衣服之法度嚴重被仰渡、天下四民之無別一統綿服ト申候事ニ而、若右令に相背候得は、曲事タル由法度被申渡、御用之外養蚕停止相成候処、諸国ニ而綿作不相成候、寒郷之貧民ニ至リ候而は、作地迎モ所持不致候者共は、漸自分屋敷居廻りに数株之桑之木を植付置、年々右桑之木之以葉、漸ク纒計之素糸を製シ、古来罷在候処、前文之通天下ニ一統綿服ト相成候儀ニ付、素糸製作仕候事不相成候故、俄ニ衣類之道路断呆(呆之)至極之貧民は困窮迷惑仕候由伝聞候、忝此節迄は草綿植作仕候国々迎は漸五畿内之中ニ小々草綿植作仕、其余迎モ漸纒計之事ニ而都而取合式百万石位之処、越中守様御所置ニ而、諸国一統草綿植作勝手次第ニ相成候ニ付、

俄ニ良田畑江綿植候間耕作ニ相用候肥養之品物、干鰯・油粕を始、都而田畑江肥養ニ相用候品々忽登貴仕候事三倍余ニ相成候、元来綿作之儀は五畿内之中ニ而モ至極膏良之地江綿植仕候ニは、水流等ニ不自由等之申立ニ而植作仕候処、右様諸国一統綿作仕候様相成候而、前文之通干鰯・油粕を始肥養ニ相用候万物、高価ニ相成候ニ付、右高価ニ相成候品物を相用ひ、万物植作仕候故、自然ト一切之品物登貴仕候、糸口始而此時(老荷)菲若を出シ候処、尚此処江眼を不付、弥眼前之論ニ迷、天下之諸品物価料式割下ケ之有命候事、今ニ現然ト書記ニ相殘申候、然ル処其後星霜押移リ、自然右通ニ而は貧民之道を失候故、何トナク諸事相緩ミ、富民は随分内々絹布着用仕候様相成候得共、表向ニは着用不仕候、乍去甚綿作手広ニ相成、米・豆・其他何分年追而扨底相募、此通ニ而は迎モ万民取統六ヶ數候ニ付、敵令を出シ而、諸国天領之綿作を減スル之事、度々御座候由伝聞仕候、乍去此一条縫ニ証拠トスル事見エズ候得共、頻

リニ綿作御減方之有之候儀は現然仕候、乍併何様御世話被仰出候而モ、綿作之容易ニ減方不相成候訳合は、何分米・豆・其他之穀物何品ニ不限、田畑一反之地江十分肥養手当仕候而も、迎も一反之地ニ而金拾両全作徳、老ヶ年ニ而相成可申儀は無覚束候処、綿作ニ至リ候而は、同日之論ニ不相成候、植綿一反ニ付随分実リ宜敷御座候得は、三拾両ヨリ五拾兩余モ束握仕候ニ付、兎角減方不相成候得共、年々歳々至極草綿は豊凶之御座候物ニ而、高価之肥養相用、連年綿之吹方不宜事御座候節、村里之父老を以、誘導有之タル由伝聞仕候、尚又星霜押移リ絹布頻リニ流行仕、盛ニ着用仕候様相成候処ニ而、綿作十分減方相成候迎、天明三癸卯年本朝綿作之地四百五拾万石程有之候由伝聞仕候、其後又候天保ニ至リ、水野(忠邦)越前守様儉約被仰出、第一衣服之制度敵重被仰出、再天下之四民共都而綿服ト相成、於茲諸国又盛ニ植綿流行スル事譬ルニ無物、故ニ頻リニ田畑肥養ニ相用処之品物登貴スル事前文ニ倍ス、既ニ安政

ニ至リ候而は、草綿・煙草・甘禾（ツメ）煙草甘禾之兩種ニ而右三品を以本朝諸作地之内、凡式割半ニ及候由、極密髓ニ伝聞仕候、乍恐此処能々御味ひ可被為遊奉願上候、諸作地之内、凡式割半ト御座候得は則十分之四分一ト相成候、於茲私儀モ驚人真偽迷望仕候、乍去伝聞仕候処、現ニ算当仕候得は如是御座候、尤是は天下之秘事ニ而知者ノ更ニ無御座候、左様思召可被為遊候、此儀は、琉球通宝密談之節、応答之内種々之談話ニ及候真景を内密御合被為遊候迄奉言上候儀ニ御座候、然ル処十分之四分一は綿并ニ煙草甘禾之地ト相成、肥養ニ相用候諸物は頻リ登貴仕、天下之人民は病死之外横夭シ死者甚稀ニシテ、人口は古來減スル事ナク、依然仕諸穀之地は天下四分ノ三ニ而、米・豆・諸穀は昔年ヨリ四分ノ一は現ニ減シ、人口は昔日ヨリ不減候故、年々万穀は払底相募候儀は当然之事ニ候処、是ニ加ルニ銀価之登貴仕候事法外ニ御座候故、物価頻リニ登貴可仕儀は尤当然事ナリ、然ル時は物価登貴之起因は銀価ノ法外

登貴仕候ニ始リ、万物払底之起元は凡綿作・煙草・甘禾ノ三種ニ御座候得共、甘禾・煙草は纔之事ニ而害ト申候程之儀は無之、然ル時は此害は凡草綿ニアリ、何又銀価登貴之大害は物価頻リニ登貴仕候而已不成、現在異国交易之一条ニ付候而は、彼ニ大利アリテ我ニ大損アリ、此起根を尋究仕候得は、遠クは松平越中守様近クは水野越前守様疊之上ノ水煉（練）儀論を以前件之天下大害を發動シ給エル事頻リニ歎息仕、日夜苦神仕致、何卒此両害を除度奉志願、差当リ前文奉申上候、万物欠乏補益ナル品物ノ湧出シテ、其上異国交易シテモ我ニ益アリテ、彼ニ益ナキニ至ル策を求、吾日本国之上遠クは
天照皇大神宮ヨリ下、遙ニ未來之乞喰非人ニ至ル迄江對シ万世徹底可仕国忠を起立仕度奉志願候処、漸木綿製之法を發明仕候、右木綿製造之儀は前文奉申上候通、養蚕仕候ニは桑之木ノ葉を以飼立候処、右桑之仕立方兩種御座候、其一種は刈桑ト相唱、年々養蚕之時節枝

刈取、右葉を養蚕ニ相用候処、右刈桑之儀は年々枝刈
 取候故、年々新之根張り強ク相成、春ニ至新萌を生シ
 至而宜敷葉を生シ候故、当時右仕立之場処五万六千余
 村御座候処、何レモ右桑之葉は養蚕ニ相用、枝は無用
 之捨物ト相成候処、右無用之捨去候枝皮を以木綿製造
 仕候得は、全無用之品物を以人海兼用之品物トナシ、
 万世本朝四民之衣服トナシ候得は、前文之欠乏根起シ
 第一植綿之儀は年々至極之豊凶御座候処、木綿之儀は
 格別豊凶無御座候故、前文奉申上候処之刈桑仕立之村
 々丈之桑枝皮を以、木綿製造仕候得は、無幾程モ日本
 国ニは綿布充滿可仕候、其上是迄養蚕不仕候国ニモ右
 様木綿之道開候得は、養蚕ト兩徳之儀ニ付、連年累月
 養蚕木綿之製作盛ニ相成可申儀は現然仕候、左候得は、
 尚更綿類充滿可仕候、然ル時は自然ト草綿之植作相減
 可申は必定之理ニ御座候、其時は右草綿植作相減候地
 江穀物植付ニ相成候得は、無程越中守様・越前守様所
 置ニ而払底相成候米・豆・其他之穀物を始、右故欠乏相

成候万品出来増候儀は実ニ現然仕候、其上右様木綿盛
 ニ流行仕候得は自然ト養蚕モ是迄ヨリは出来増可申候
 其時は右素糸を以異国交易之本元トナシ候得は、我ニ
 益アリテ損ナク、於此処天下之銀価一変シテ万国一同
 之策を立レバ、外異之不来事実ニ案中ニアリ、此儀を
 以公儀之御役方江私儀論仕候ニ付、一統尤之儀と相成、
 早速右木綿製造之儀御免相成候而、表向願書差上候様
 内命有之候ニ付願書差上候処、日本六拾余州共都而私
 木綿製造主タル御触流シ相成候儀ニ御座候、然ル処戊
 年琉球通宝之一条ニ付候而取扱仕候、御役人衆は木綿
 取扱被致候方々御座候故、右中ニ而モ尤天下之政事之
 枢機を被握候御方之御宅江、私夜話ニ罷出、前条木綿
 之条々再申上候上ニ而、亙去冬木綿製造御免被仰付候
 ニ付、早々上坂仕罷帰候後病氣ニ付御無音申上候処全
 快仕、出勤仕候後は頻リニ多用ニ罷在候処、今般私琉
 球通宝之儀内願仕候ニ付、至極密々御内評儀被成下、
 御内命之御届書差上候得は、首尾能相済候様御内々被

仰付候ニ付、内密ニ而私主人方之重役共江申述候間、早速此程水野和泉守様江御届書差上候処、御内命之通昨日御聞置相成、首尾能相濟候段、別而難有奉存候、右ニ付又候奉申上候モ恐入候得共、旧来御懇命被成下候ニ付、御内意奉伺上候、其儀は木綿製造被仰付候間、多分之金錢於諸国取扱仕候処、公儀御領之外、諸国銀札ト相唱候紙札類リニ流行仕候、右銀札之儀は諸国共其領分限リ通用仕候儀ニ而、他領江持行候而は全無用之紙札ニ御座候間、天下一統木綿製造仕候、私諸国之製造所并ニ役所会所之帳合等ニ付、甚差支仕候間、何卒琉球通宝之儀、於諸国木綿製造之儀ニ付、私配下之者共以相對銀札同様、木皮買集方并ニ木綿製造筋ニ付正金払方仕候上端錢等ニ相用候儀ハ、相對通用御免被仰付候儀は相成間敷候哉、尤錢貨之儀は、古来永樂通宝其外共於本朝何程ト相定、通用モ仕来候儀ニ付、別而琉球国は古来私主人領分ニ御座候間、無相違モ日本随国之儀ニ御座候故、何卒諸国ニ而前文之通相對通

用御免被仰付候得は難有奉存候、且又正金入用之節は何時ニ而モ諸国之製造会所并ニ兩替屋ニ而無差支兩替相成候様可仕候間、相成候得は右様通用御免被仰付候様御苦勞被為下間敷候哉、右様奉内願候儀は、當時諸国ニ而は銀札而已多分有之候而、正錢甚扨底仕候儀ニ付、内願奉申上候儀ニ御座候間、何卒出格之儀を以、木綿同様日本國中相對通用之惣御触レ有之候様御決濟可被下候段至極密々願上置候処、其後十日程相過候而御使給リ、早速罷出候様内命被下候ニ付、即刻罷出候処、先夜内願之琉球通宝之儀密談及候処、元来木綿製造之儀ニ付於諸国種々之銀札有之、諸国木綿製造所并ニ会所等之出入帳面差支候儀於有之候は、譬は琉球通宝御免相成候而モ諸人金銀入用之節は、定而無差支引替可差遣候得は、何そ琉球通宝ニ不及、其方銀主共江示談之上銀札取扱木綿製造之儀ニ限リ候而は、相對を以自分配下通用之儀御届之上御免相成候様取計候得は、可然哉之儀内命有之候得共、私愚考ニは此儀ニ付、琉球

通宝天下通用之道相開候得は、格別当御国家之御為筋
廣大ニ相成候様奉存候故、尚又押而是非琉球通宝之方
御決濟相叶申間敷哉、頻リニ申上候処、右様無抛私内
願仕候ニ付、弥木綿製造之儀、諸国江手配仕候上は、
随分琉球通宝相對通用之儀御免ニモ相成可申哉之儀極
密承知仕候、

一其前年酉十一月廿日木綿製造之儀御免被仰付、日本国
中惣御触レ相成候故、私儀は同十二月廿二日江戸表発
足仕、銀主示談旁大坂表江罷登リ候而、翌戊二月江戸
表江罷帰候道中ヨリ病氣ニ而罷帰候後、暫時病氣養生
罷在候処、琉球通宝之儀御用被仰付候間、頻リニ困苦
仕、公儀御届済首尾能為相濟、右製造請負被仰付、御
国元江罷下リ候様被仰付候得共、前文奉申上候木綿之
大策願済候後無幾程モ候儀ニ付、御国元江罷下リ候儀
甚心配仕候得共、君命不及是非、御国元滞在日數百日
程ト申候事ニ而、御国元江罷越候処夢ニモ不奉存候、
海外之孤島江被差遣候ニ付無是非渡海仕候後苦心仕候

ニは、本朝ニ而類例モ無之木綿製造之儀、天下一統蒙
御免候身ニ而は、一日万金ニモ難換、光陰を空敷相送
リ大切之機会を失可申哉と日夜困苦罷在候、尤去ル戊
年

中將様江戸表江御出府被為遊候節、精製木綿二子島御
馬乘御袴地老反、同精製唐三島偽造織老反献上仕候間、
定上覽被為遊候儀と乍恐奉存候、右通現ニ無用之捨去
候桑枝ヨリ上品之木綿製造相成候而、本朝四民之衣服
ト相成候儀ニ付、諸国江手配仕候一助ト相成可申儀ニ
付、実ニ於公儀甚相好ミ無之、琉球通宝諸国通用相成
可申訳合ニ御座候、右ニ付私存意ニは、木綿製造手配
不仕候而は、右通宝諸国公然ト通用相成可申道筋外ニ
一切不奉存候間、丹心存含候儀乍恐奉建言候、尚又愚
考仕候得は、於御国元琉球通宝始ヨリ唯今至候迄、四五
百万両モ御製造被為遊候哉、若左様御座候得は、於公儀
右通宝諸国通用之儀御免許有之、前文之通、天下御触
流シ相成候様、内実取極出来相成候得は、右御触ニ相

成候以前、御領国中之琉球通宝之儀、一先通用御製禁被為遊、大坂仕出シ預リ銀札ト御引替被為遊度奉存候、尤大坂表仕出シ預リ銀札之儀は、巨細口上ニ而御用之節は可奉申上候、扱右銀札通用之儀は、大坂表は勿論諸国ニ而モ右仕出シ下兩替屋ニ而引替可仕候間、則右国々引替所江持參仕候得は随分通用相成候、銀札ニ有之候間、是ニ而不残御領国中之琉球通宝御取集被為遊、製造之精麁取調候上、右琉球通宝を奥羽・甲信其他之国々江持行候上、私奉申上候策を以御取扱被為遊候得は、前文奉申上候銀札を合而、忽一千万兩以上之融通相成候上、現ニ正金五百万兩程は御城内之宝庫ニ被為滿、然ル上ニ而静ニ何程モ富国之御策被為召建候得は至極御良全之御儀と乍恐奉存候、且又通宝之儀モ公然ト天下通用御免許ニ相成候得は、年々歳々御製造之御利益モ御座候儀ニ付、偏ニ奉念願候間、此道路御開被為遊候様奉志願候、左候得は、私ニ茂実ニ困苦仕、公儀御届済為致候甲斐モ御座候間、別而難有奉存候、且

右通宝通用之儀御開被為遊候ニは、私江御免被仰付候木綿製造之手配不仕候而は不相叶候儀ト奉存候得共、当时之世態ニ而は右外ニ通用道筋モ御座候哉、私当分幽居罷在候故一向不奉存候、且又万一右通宝通用御用之儀ニ付、私身上御不審之儀モ若哉被為在候得は、実には痒を隔而如搔奉存候得共、無是非儀ニ御座候間、当在番有村壯一儀は別懇ニ仕、実心篤ト見届候間、此者江巨細私心腹打明シ可申決奉存候故、右壯一を御心見トシテ一先江戸表江御差遣^通シ被為遊候而は如何御座候哉、乍恐此段奉申上候、尤同人江戸表江御差向ケ被為遊候得は、其節私自筆之書状諸方江差遣可申奉存候、左様無御座候而は、同人江戸表江罷越候而モ於先方面モ不審相晴レ申間敷奉存候故、乍恐此儀奉申上候、誠惶誠恐謹言、

慶応元年九月

安田轍藏

冊子原寸

縦二八・八糎

包紙原寸

縦二八・五糎

横二〇・五糎 一八枚

横 四〇糎

一五三 大坂蔵屋敷ヨリ藩庁へノ報告

財政逼迫ノ件

書状ノ後半欠ク

一筆啓上仕候、余寒退兼申候処、愈御清福被成御勤恐悅御儀奉存候、二私無事此内ハ一往居付難有被仰付、積年之一義も相達、中能御暮申候間、乍憚御放念可被成下候、御地何と御消光被為在候哉、陽氣立候御催も可有之、当方ハ長征一条先可也ニ相濟、水府浪人も一往平鎮、先後門之狼も伏可申候、少しハ安心御座候、乍然、砂唐(雜)も切間相成候処、御金繰必至ト行迫リ、寢食も不安、近来諸方より御調文品夥舖相成リ、誠ニ込入候仕合、殊ニ産物(小惣)方より之取替金莫太、とふも差繰出来兼候処より、折柄帯刀殿御下坂ニ付、当分有金取調得御差図候処、当時世いつれ式三万兩ハ御貯金も無之候而ハ、差掛之儀到来之節相備間敷候間、老万六百兩、長崎総代等江相渡候様被仰付、其通取計、其段ハ別紙御届申上候通ニ御座候、産物方之儀、去年も取替一条ニ付、披露之趣有之、御物方へ取替不相成段被仰渡たる事御座候処、彼方よりハ始終

取替トリと申来リ、余り得手勝手鉄面肩(座)の御役々ニ而ハ無御座や、此方ニ而ハあまりの屈さに、些不足を申居候事ニ御座候、乍然とちらも同シ御所帯の事御座候間、相成丈ケハ繰合之含ニ御座候得とも、旧年七万兩御返金相成候、以後砂唐も考通不登付、難儀最中の折柄、式万兩余之大金、其上鍋千丸も申参り、恨めしさのあまり筆ニまかせ申候、御一笑可被下候、此方より取替候金筋ハねうち七朱利付之金ニ御座候、夫ニ而産物方諸雜用差引御利潤有之事ニ御座候や、永正より承候へハ、先年ハ産物方御商法ニ付而ハ、御利潤ハわつか一ヶ年千兩位欵之取算ニ御座候よし、しかれハ七部利付ニ御雜用差引候ハ、取たかみたかニ而ハ無御座や、しかし小国辺の御おもひ付ハよほと利も有之哉ニ承候間、近来之御諸法承知仕度御座候、七部利付之金子なる事申上置たく、例之むだ言申上候、帯刀様より承候へハ、当年ハ依時宜ハ御上京可被為在哉之御事も御座候由、去年中將様御滞京中、京都(以下欠)

三三四 諸藩主上京ノ召命

(包紙ウラ書②、朱)
乙丑九月

御召之勅書

(包紙ウラ書①)
ノ
ノ
ノ

(徳川慶勝)
尾張前大納言

(徳川茂承)
紀伊中納言

(前田齊泰)
松平加賀守

右自分上京候様、

(鍋島齊正)
松平閑叟

(山内豊信)
松平容堂

(宗城)
伊達伊予守

(久光)
島津大隅守

右銘々当主可被 召之处、御用筋御都合も有之候付、

上京候様、

細川越中守
(慶順)

右御用筋御都合も有之候付、長岡良之助召連、
(細川禮美)

(蜂須賀素裕)
松平阿波守

(蜂須賀成昭)
同淡路守

(黒田齊博)
松平美濃守

(黒田慶賢)
同下野守

(浅野長訓)
松平安芸守

(浅野茂勲)
同紀伊守

(高野)
藤堂和泉守

(高野)
同大学頭

(久松勝成)
松平隠岐守

(定明)
同式部大輔

右父子之内上京候様、

(伊達慶邦)
松平陸奥守

(池田慶徳)
松平因幡守

(慶倫)
松平三河守

右之面々上京候様、

松平出羽守 (定安)
(慶頼)
 有馬中務大輔 (牧野忠恭)
 松平備前守 (鑑寛)
 立花飛驒守 (鑑寛)

松平大藏大輔 (慶永)
(容保)
 松平肥後守 (定敬)
 松平越中守 (茂憲)
 上杉式部大輔 (茂憲)

右当分上京之面々、

文書原寸 縦 一六・四種 包紙原寸 縦二八・三種
 横一〇五・六種 横四一・二種 二枚

三三五 内田仲之助ヨリ在藩側役衆へ

開港勅許延期ノ件及薩長密貿易ノ件
 開港勅許延期ニ付諸外国ト応接ニ関スル
 薩藩ノ請書
 桑名藩森弥一左衛門ヨリ内田仲之助へ三通

仏国ヨリ幕府へノ申立書ニ付

〔包紙ウツ書〕
 一兩御丸
 御側役衆
 京都
 内田仲之助

「参る」
 〔朱〕

「乙丑十月六日」

一三九五ノ一

一昨四日夜半頃、藤井宮内方江

近衛様より以御使、周旋方御用有之候間、非藏人口迄、

兩人罷出候様被 仰遣候付、則宮内・井上大和罷出候処、

夷船撰海江渡来之儀ニ付、事情切迫ニ相成、 武辺より

彼是申立趣有之候付、諸藩御撰之上、応接被

仰付哉も難計、於其儀は御請可申上哉、何分致吟味可申

上との趣、

内府公より被 仰達候付、早速重役共江申聞候様可仕旨

御請申上、罷帰御吟味之上、以書面御請申上ニ相成候処、

追付伝

奏より御呼立可有之との

御沙汰ニ而、五日未明大和罷帰申出候、然処

御所諸大夫間御仮建江罷出候様、両伝 奏雜掌中より之

切紙到来、私被差出、各藩も追々罷出、一同相扣居申候

処、御仮建御上之間、兩側江兩伝 奏衆・議

奏衆・一橋様・会・桑侯・小笠原老(長行)岐守様御列席ニ而御

次之間江各藩御呼出、伝 奏野宮様(定勢)より此節夷舶撰海江

渡来、兵庫開港之儀願立候得共、先夫ニは不及、横浜・

箱館・長崎之三港表立、

勅許相成候様との願ニ付、各藩存慮之趣も被

聞食上度との

叡慮ニ付、存慮申上候様との趣被仰聞候付、兼而御吟味

之趣も承知仕居候間、夷舶撰海江相迫り 幕府是迄夫々

御応接之上、最早此上ニ御応接之御手相尽、鄙賤之我々

共迄存慮被

聞食候御儀難有次第ニ御座候、就而は右三港之儀は是迄

幕府御年限を以数年御開相成居候末之儀ニは御座候得共

更ニ

朝廷より御許と申儀は初而之御儀ニ被為 在候付而は、

第一只今則

勅許と被 仰出候而は是迄

御立詰被為 在候御廉も氷解仕、且亦海内人心之居合も

別而御掛念之御訳ニ付、日数遷延之儀御利解被 仰達、

急ニ侯伯方

御召之上、不易之國是を御立、其上

勅許不被為 在候而は無此上

御国体之御永恥可相成哉と深く遺憾ニ難堪奉存候、尤応

接之次第、前件通 幕府より御尽為有之末ニは御座候得

共、兎角是迄談判之次第、順序を不踏強情申張候得は、

末は其意を被曲候様之儀も不少哉ニ兼而奉伺候儀ニ付、

幕府此上は被成様無之と御断切相成候ハ、

朝廷より断然可然 御方御差向ケ、御利解被為 在候ハ

、土地遠隔之夷情ニて御座候得共、誠実至情条理を相

尽申候ハ、遷延之儀は同日月之下ニ生を受候者ニ御座

候得は、夫ニ而も不聞、是非ノと相迫り、無端相開候儀

は有之間敷哉ニ奉存候趣とも旁取繕申上置候、各藩之儀も大同小異は御座候得共、都而同様之趣ニ御座候、然処先本席江相下扣居候様との御事ニ而相開候処、日入過都而御用無之、薩藩之儀は居残候様伝

奏衆より御沙汰之趣、非藏人を以被仰聞候付相扣居申候処、暫間有之、飛鳥井様御返建之間江御下り、御挨拶共

被仰聞遅刻相成候、最早御用無之相下候様被仰聞候付罷帰申候、

一会藩広沢富次郎(安住)より小笠原屯岐守様御論、於彼藩は至

極至当之儀ニ存候間承候様との儀ニ付、因・備外一二藩より御逢相願、折角御口発渥(僅カ)、各藩遅参之面々江前

件之趣被達候付、御列席相成候間罷下候様申来御趣意承不申候得共、広沢より井上大和江大意申聞候趣も御座候間、同人今日罷下候付御聞取御座候様仕度候、

一仏国より申立之書付、各藩可致披見との事ニ而、武辺より被相下候右書付、今日桑名江談合仕候処、写取可相廻との事ニ御座候得共、別紙之通断申来候ニ付、

追而探索之上写取差上候様可仕候、右書面之内、薩州長州は蜜商致し、使節をも差立候、右様邪義相計候者御国内ニ罷居候而は、御政道之御差障ニ相成、何様妨可相成と難計事ニ付、御政体御改なくてハ不御宜と様々申立候ヶ条御座候、目前ニ而備藩より広沢富次郎江

右之趣とも膝を合候位隔候処ニ而咄掛申候付、何とか發言不仕候而は不相成勢ニ付、不得止事広沢江私より申聞候は、仏国より申立候薩州・長州云々之一条申開

ニ而は更ニ無御座候得共、申置度儀御座候、夫は弊藩之儀、武備充実、何時ニ而も彼より兵端を開候勢有之候ハ、彼より輕蔑を不受、

皇国之御武備海外ニ轟候様可致との趣兼而主人共配慮致し、いつれ武備を張候ニは、軍艦大小之砲器なくてハ不相濟所より 幕府江奉願、既ニ当分蒸気船并同軍艦都合七八艘も取入、且砲器等も追々調文致し、御存之通、大砲十二挺猷砲も仕置候仕合ニ御座候、就而は差知たる領国

公武之勤役は勿論、国民扶助方亦是砲台築造等此近年莫太之費用ニ相及、逆も現金を以惣而取賄候儀は不相叶、国産之品彼是術を尽、彼江相渡、右蒸艦・砲器を取入候儀、偏ニ

皇国之御為ニ而、品相渡候儀は一国之為ハ勿論、彼江現金を渡スより御惣国之為、如何計之強も有之、実ニ公然たる儀ニ御座候、尤英夷江惣而引結たる儀ニ付、仏夷より色々申立候儀は夷情之鄙劣なる悪臭ニも可有之儀ニ而、何も此御席ニ而可申訳ニは無御座候共、黙候儀ニも無御座候間、一ト通咄申儀と申切候処、広沢も御尤之次第、於弊藩は実ニ御深意御察申上、兼而羨敷奉存との挨拶ニ御座候間、形行之促申上置候、
(金種忠房) (重徳)
一 内府公・大原様杯より大久保一藏承知仕候趣は同人より可申上と奉存候、

右之通御座候間、別紙相添此段申上候、以上、

丑十月六日

内田仲之助

兩御丸

御側役衆

追而爰元御家老衆江は別段申上候、以上、

文書原寸 縦 一五・八糎 横 三六三・七糎

一三九五ノ二

(端裏書)
「御請書写」

兵庫開港三港

勅許之儀、不容易

皇国之御重事ニ而、輕卒ニ御評決相成候而は、天下之人心不居合、

皇威相廢候御場合ニ付、有名之候伯

御召之上、天下之公議を以御評決相成、右来会迄時日遷延之為応接、從

朝廷可然 御方様御差向相成、薩藩江隨從被 仰付候ハ、尽死力、十分差はまり十二八九は遂成功度奉存候事、

文書原寸 縦 一五・八糎 横 五二・六糎

一三九五ノ三

(端裏書) 「内田仲之助様 森弥一左衛門」

以 手紙致啓上候、寒冷之節弥御清福被成御奉務珍重之御儀奉存候、然は仏蘭西差出候書付写取之上は入貴覽可申旨、昨日御直話申上候処、右は写取候儀は不相成候間、一ト先其仮返上可仕旨、御老中様方より御沙汰ニ付則返上相成候間、猶又御下ケ等ニ相成候へ、写取掛御目可申候、昨日御内話申上候義も御座候間、此段御断旁可得貴意、如此御座候、以上、

十月六日

文書原寸 縦一六・四種 包紙原寸 縦二七・七種
横六一・五種 横四〇・六種

二五六 島津伊勢ヨリ桂右衛門へ

異船撰海入港外国条約ノ件

(端裏書) 「島津伊勢」

寒冷日増之時節、

御両殿様益御機嫌好、貴所様弥御壯健御同席中御揃御精勤之筈奉兩山候、次ニ野生無異相勤居候間、乍憚御省白

可被下候、扱様々変態此程より異船撰海江渡来候儀は、西郷使其后も、仕立町飛脚等を以荒増申上置候得共、臆と応接之趣意柄不相分候処、去ル四日方より一・会・桑閣老格小笠原参 内、幕府之申立通、

御朝議相決、絶言語候次第、歎息之至御座候、井上大和江い細申含越候間、

天・幕御評議之次第柄細詳御聞取被下度、何事も致文略候、

中将様御上京一条之計策も西郷より御聞取為有之筈、いか御決心相成候哉、諸侯御召之儀、武辺江御沙汰為相成由御座候得共、いまた御達無之、又幕吏相拒可申哉も難計、手続万端井上より御聞取可有之候付、不能一二、荒々謹言、

島津伊勢

十月六日

(久松) 桂右衛門様

文書原寸 縦一六種 横二〇種

〇三六七 条約勅許及英国ノ勅許発表

二通

大貌利太泥亜および意尔蘭土諸国之
皇帝陛下其後嗣後胤と日本、

三六六 条約勅許ニ付松平伯耆守等ノ通告

大貌利太泥亜および意尔蘭土諸国之

皇帝陛下と日本

第二条

大君陛下兩國之交際永久親睦し双方臣民之貿易交通を

容易にせんと欲し、其為に和平懇親并貿易の条約に

およびん事を決せり、則大貌利太泥亜及意尔蘭土の

皇帝陛下は、皇國の諸侯尊貴、エル・オフ・エルキン・

エンド・キンカルデン、ナイト・オフ・ズイ・モー

スト・エンシエント・エント・モースト・ノブル・

オド・オフズイ・テイスルネに委任し、日本

大君陛下は水野^(忠徳)筑後守、永井^(前志)玄蕃頭、井上^(翁直)信濃守、堀

織^(利忠)部正、岩瀬^(忠賢)肥後守、津田^(正路)半三郎に委任セリ、既に

右等は双方委任の書を照応して相違無之段、互ニ承

知之上は、下文之条々を會議決定セリ、

第一条

るべし、

大貌利太泥亜および意尔蘭土之

皇帝陛下ハ江戸府に在留する為のデブロマテキエジエン

ト^{即欵}、并此条約にて貌利太泥亜貿易の為に開ける日

本^{差也}の各港の中ニ在留するコンシユル、或ハコンシライ

ルエジエントを勝手次第ニ命ずる事を得へし、

大貌利太泥亜之デブロマテキエジエントおよびコンシ

ユルゼネラルは故障なく、日本国内何処江も旅行する

事を得べし、

日本

大君陛下は嚙噸に在留の為のテブロマテキエジエン

ト并ライルエジエントを命ずる事を得へし、

日本テブロマテキエジエントおよびコンシユルジエ

ネラル、故障なく大貌利太泥亜国内何処へも旅行する事を得べし、

第三条

箱館・神奈川・長崎三港并町は千八百五十九年七月一日より貌利太泥亜臣民の為に開クヘシ、其外次ニいふ所の港并町を期限の通り貌利太泥亜臣民の為に開クベシ、新瀉千八百六十年一月一日開キ、若港に不便なる事あれば、代りの能き港を日本西海岸にて同期限に開クベシ、

兵庫千八百六十三年一月一日開ヘシ、

右各港および町におゐて貌利太泥亜臣民居留する事を得、地面を賃を以て借り、其地に在る建物を買ふ事差支無之、且住宅倉庫を建てる事を得ヘシといへども、是を建るに托す保墾、或は要害之場所を管むへからず、此按に随はしむる為、其建物を普請、又は模様かへ、或ハ修復中時々日本重役見合する事を得ヘシ、

貌利太泥亜臣民其建物の為に得る場所并港の規則は各

所の貌利太泥亜コンシユルと日本重役相談して定むヘシ、若同意しかたき時は、其事件を貌利太泥亜デプロマテキエジエントと日本政府へ届け処置せしむヘシ、貌利太泥亜臣民居留之周囲にハ門又は塙、或ハ墻を設、妨ぐる処置なかるヘシ、

日本開港の場所におゐて貌利太泥亜臣民遊歩の規則定ハ左のことし、

神奈川六郷川筋此川、川崎ト品川の間を限とし、其他は各方ヘ

十里、

箱館 各方ヘ十里、

兵庫 京都を距る事十里の地は立入るへからず、其方角

を除き各方ヘ十里、且兵庫に来る船々の乗組水子

猪名川此川へ兵庫と大坂の間を越へる事なかるヘシ、

里とは英国の四千二百七十五ヤルドに当りて

都而里数は各港の御用所即即タウンホルより陸路の程

度なり、

長崎 貌利太泥亜臣民は其近所御領地内何処江も遊歩す

る事を得へし、

第四条

日本

大君陛下領分に在留する貌利太泥亜臣民の間に起る身の上の事、又は所持に關係する事は皆貌利太泥亜司人処置すへし、

第五条

貌利太泥亜臣民に對し悪事をなせる日本人は、日本司人にて召捕へ、日本法度に隨て罪すへし、日本臣民或ハ其他国の臣民に對し悪事をなせる貌利太泥亜臣民はコンシユル或ハ其他之其任を蒙る官人にて糺し貌利太泥亜の法度隨て罪すへし、双方におゐて偏頗なく公平の裁斷有へし、

第六条

貌利太泥亜臣民、日本人に就きて訴へき事あらバコンシユル所へ赴き、其趣意を告へし、コンシユル吟味之上双方遺憾無之様処置すへし、又は日本人、貌利太泥

亜臣民に就て訟へき事あらば、是亦コンシユル其趣意を聴き、双方遺憾なき様処置すへし、若しコンシユルにおゐて処置しかたき訟あらば、日本司人の立合を請、俱ニ其事を吟味し当然之判斷をなすべし、

第七条

日本臣民は貌利太泥亜臣民に逋債ありて返済を怠り、又ハ出奔する時は日本司人嚴重ニ之を処置し償ハしむへし、貌利太泥亜臣民は、日本人に逋債ありて返済を怠り、又は出奔する時は貌利太泥亜司人嚴重に是を処置し、償ハしむる事同前たるへし、貌利太泥亜・日本兩國の臣民の逋債を其政府ニおゐて、請負事なし、

第八条

貌利太泥亜臣民は、日本人を雇ひ、当然に諸用事に充る事日本政府より妨なかるへし、

第九条

日本在留貌利太泥亜臣民、勝手ニ其宗法を行ひ、拝所を営む事故障なかるへし、

第十条

外国之諸貨幣は日本の貨幣と同種の同量を以て、通用すへし、

双方の国人互に物価を払ふに、外国或は日本の貨幣を用る事妨なし、

第十一条

貌利太泥亜海軍の為用意の品へ神奈川・箱館・長崎の内に無税に陸揚し、貌利太泥亜政府役人之を司り、庫内に納む事を得へし、其品を売払ふ時へ、買得る人より規定の運上を日本役所に納むべし、

第十二条

貌利太泥亜船艦、若日本海岸にて破損又は漂着し、或は日本

大君領分中之港へ無余儀危難を遁れ来る事を知らば、即時に日本役人精々扶助を加へ、乗相の者を厚く取扱ひ、事に依り最寄のコンシユル支配所へ送り渡すべし、

第十三条

貌利太泥亜商船、日本の開きたる港口に来る時は、入津為に水先案内を雇ふ事勝手たるへし、又は規定の手数料等并租税を払済にて出港の為に水先案内を雇ふ事勝手たるへし、

第十四条

貌利太泥亜臣民は交易の為に開たる各港におゐて、何処よりにても、諸商ひの品物除くの品をを輸入し、売払ひ又は買入れ、何処へたりとも輸出する事自由なるべし、此条約・税則規定の運上納済之上は、其他の運上等を払ふ事なし、

軍用の諸物、日本政府及び外国人の外へ売へからず、其地の品物は両国人おゐて売する事、総て障なく、其売買又は払方等に付てへ、日本役人これに立会はず、日本諸臣民へ貌利太泥亜人より買得たる品を売買し、或は所持し用ゆる事俱に妨なし、

第十五条

日本運上所役人は、荷主申立の価を不足に思ふ時へ、

運上役より価を付ケ、其荷物を買入る事を談すへし、荷主若これを否む時は運上役より付けたる価に従て運上を納むへし、承允する時は減す事なく其価を以て代金を払ふへし、

第十六条

貌利太泥亜臣民より輸入せし諸品物、条約規定の運上払済の上は他の運上なく、日本人にて国内何処へたりとも運送する事を得へし、

第十七条

貌利太泥亜商人、日本開たる港に品物を輸入し、規定の運上納済の証書、日本運上所役人より嚼ひ上は、其品物を輸出し、他の開きたる港におゐて重税を納る事なく陸揚する事を得へし、

第十八条

各港之日本司人、其意ニ随而密商奸曲を禁するの法を立べし、

第十九条

此条約の法に随て取立る過料及取上もの類は都而日本大君陛下の政府収蔵すへし、

第二十条

此条約に添たる商法の条々即本書の卷部にして、二書同様、双方の約束の主君并其臣民、互ニ遵守すへし、日本在留大貌利太泥亜テプロロマキエジエントと、日本政府其任を受るものと、此条約の法并別冊の商法を全備せしむる為の規律等談判を得る權為るへし、

第二十一条

此条約は英吉利・日本・和蘭語之通を書し、各翻訳は同義同意にして和蘭翻訳をもとめるへし、然る都而大貌利太泥亜

皇帝陛下のテブルマテキエジエン井コンシユライルエジエトより、日本司人にいたて、公事の書通は向後英語にて書すへし、但用を便せん為、此条約を結し以来、五ヶ年の間は和蘭又は日本の訳書を添へし、

第二十二条

此条約を行ふ内に改革すへき廉有らへ、千八百七十二
年七月一日以後に至り、双方約第の主君の一方より、
其一年前に其旨を通達せば再驗を求むる事を得へし、

第二十三条

日本

大君陛下より既に他の外国政府及臣民に許せし廉は、
向後許すへき殊典ある時は貌利太泥亜政府臣民へも一
同免許あるへきを約す、

第二十四条

此条約の本書は貌利太泥亜

皇帝陛下の名を記し、日本

大君陛下の名を印を署し、当日より一ヶ年の内に江戸
に於て取替へし、

右取極のため、

降生千八百五十八年八月廿六日即日本安政五年七月、江戸
十八日ニ当る

に於て双方全権の役人、此条約に名を記し調印するも
の也、

エルキンエンドキンカルテン

水野筑後守

永井玄蕃守

井上信濃守

堀 織部正

岩瀬肥後守

津田半三郎

覚書

日本ニ於て而外交を厭ふ鎖国家と申者、故障するの由
也、

大君其執政に於て而通親各国に約束せし廉々を十分に難

遂旨、日本在留英国

皇帝陛下之公使江

大君執政より申述たり、猶又英国

皇帝陛下の執政江

大君より差越たる使節よりも同様申立り、就而

皇帝陛下の政府は右申立之趣を勘弁ありて、誕千八百五

十八年八月廿六日大貌利太泥亜、日本と取結し条約第

三ヶ条内、千八百六十年一月一日大貌利太泥亜臣民の

為に、新潟若^(合脱カ)不都成は其代りに、日本西海岸に於而外の

都合宜敷港開へき事、并千八百六十三年一月一日兵庫

港開へき事、及千八百六十二年一月一日より貌利太泥

亜臣民、江戸府逗留致すへき事、并千八百六十三年一月

一日より大坂府逗留致すへき事、書載たる廉ニ取行ひ

方千八百六十三年一月一日より五ヶ年間猶予之儀、承

知致すへきにより、取極置ヶ条左之如し、是則前文故

障之企を日本執政ニ於而十分ニ取潰させんか為、

皇帝陛下政府ニ於而、右之如く条約数廉を寛有致候間、

其大名并其執政政府急度、其外廉々不殘長崎・箱館・横

浜三港ニ於而為取行、攘夷之旧法表向ニ廢し、其外左

ニ述ル数ヶ条之故障を止る事を望む、

一千八百五十八年八月廿六日之条約第十四ヶ条ニ差障り

日本人より外国人江品物を売払ふ時、直段又ハ税ニ限

りを付る事、

一総而人夫を雇ひ、就中大工・水夫・小船人足・師匠并

諸類之僕を抱るニ差支る事、

一諸侯私領之産物を互市江遣し、自己之支配人を以売払

ひニ差支る事、

一運上所官吏、其外役々之者共礼銀を貪らんとして差支

る事、

一長崎・箱館・神奈川三港ニ於而外国人と交易する人物

之品等ニ限りを付而差支る事、

一外国人、日本人と自由ニ懇切之交際ニ差支る事、尤右

ヶ条は元来之条約面ニ由而可遂なり、然しなから

大君并其執政、此ヶ条を無相違遂されバ前文千八百六

十三年一月一日より五年之内、何時にても英国政府

此本書港津都会に付き書載る所之寛有せし廉々を廢

し、千八百五十八年八月廿六日之条約諸廉、早速取

行ひ、就中前文港津都会を開き、貌利太泥亜臣民を

居留し交易為致候事、

大君并其執政江言立申べし、

大君より貌利太泥亜、

皇帝陛下江被差越たる使節帰国之上、日本繁昌成る一端

之趣を以而、其属島对馬之港外国交易の為に開へき

旨、

大君及其執政江事を論ず、且又

大君并其執政歐羅巴諸州を懇愛し、兩國之交易繁昌致

旨を示す為め、輸入酒類之税を減し、玻

^(利)璃器を五分税の部内ニ挙げて、以て最初条約取結し

節之脱漏を補ふへき事、

大君并其執政江建白致すへき事を約す、

当千八百六十二年六月六日互に取極たる事件の証拠

として貌利太泥亜

皇帝陛下の外国事務大臣并

大君より被差越たる使節、夫々名を記し、貌利太泥亜

大臣よりは、日本在留貌利太泥亜

皇帝陛下欽差江遣し、日本使節よりは大名并其執政江差

送申べし、

ロセル

日本使節三位の名前

書翰

英吉利西特派公使全權ニリストル

エキセルレンシー
ハルリスハルクス江

過日中より度々書翰被差出、其都度回答可及処、我レ

国事多端ニ而延引相成り気毒之至ニ候、右回答旁、左

ニ申述候間、可然了解有之候様致し度存候、

一条約之儀我

大君格別御尽力ニ而京師江被

仰立、別紙之通御許容相

成候、

一兵庫開港之儀は、直ニ談判致し兼候、固よりロントンの

約定ニ極たる日限に開く積りなりといへとも、万一

事情に依て早く開き候節は可開、右之一件早速ニ難定

不容易次第、幕より遮り而言上ニ相成、其上去ル四日、一
・会・桑井小笠原等之参

内ニ而、是非開港速ニ御免之儀遮り而言上、段々被惱、
宸襟をも坂下始ニも厚尽力いたし候へ共、中々強情不聞
入、殆痛心之外ニ而候、何分列藩輩下へ被召寄候上、厚
遂衆評人心一定之上ハ真之開港ナレハ可被為許、乍去今
日ニ 勅許之儀ハ難相成、何分積年之思召も一時ニ不相
立、神宮奉始御代々へ被為對、是迄御祈願之御趣意も不
相立、其上^(安政五年)戊午以来外夷件ニ付、幾万人之人命ニも相拘り
居候程之義ニ付、兎角諸藩被召寄候上ならてハ難被許と
段々御沙汰ニ相成候処、左様之御因循ニ而ハ外夷忽京師
へ迫り可申とて、種々と四人共より朝を嘲哂いたし候申
方、甚絶言語候、何分強而依申願、不得止事御許容相成、
実ニ以一時之水泡と相成候段、積年之思召之処、実ニく
可恐存候、巨細大和より御聞取可給候事、乱筆免可給候
也、

十月七日

実以何共切齒至極慷慨仕候得共、致方無之残念成次
第二候、幕之不遜限なし、国賊現然候、日々ニ不遜
増長候、何共無申条候、以上、

文書原寸 縦一六種 横一七〇・三種

一三九九ノ二

今度列藩被召寄候ニ付、早々応 召御上京之程祈入待入
候事、

十月七日

誠ニ不容易拘国体時勢、迅速御上京可然候事、

文書原寸 縦一八・二種 横二八・四種

一三九九ノ三

今度諸藩召之儀、

大樹江被 仰出候へ共、

大樹より夫々相達申候欵、不達欵不分明ニ付申入候事存

候、何分幕之大罪難遁候也、

文書原寸 縦 一八糎 包紙原寸 縦三二・二糎
横三〇・七糎 横四四・五糎

1100 大久保一蔵ヨリ西郷吉之助蓑田伝兵衛へ

開港勅許ノ件

(端裏付箋)

一西郷吉之助宛
蓑田伝兵衛

十月七日

大久保一蔵より

尚々、諸藩

御召之儀弥武辺江

御沙汰相成候得共、今朝迄ハ御達無之候、

御両殿様益御機嫌克被為遊御座、恐悅御同慶奉存候、扱御当地之形勢も先月廿七日以来、種々変態実不容易形行之事ニ而、去ル三日以前之処ハ町便等より御問合相成通ニ御座候、小支ニも越行被仰付、去ル三日帰京、其后之形行左之通御座候、
(三日)(徳川茂徳)
一尾張玄同公上京、二一条家江参殿、大樹公征夷將軍辞表差出相成候由、其大趣意ハ戊午以来不容易多難之世体ニ而、精々尽力仕候得共、元来不肖之私不堪其任、尤

勅命之趣一々奉裁(戴)も不相調、実ニ恐入次第、逆も奉職難仕候付、慶喜事天下之事務ニ通シ、人望帰向之人柄ニ候間、相統仕度との趣ニ候由、外ニ一通其趣ハ当今宇内之形勢相変シ、鎖国之儀不可行候得ハ、是非開港ならてハ難相濟之事態詳悉書記シ、依而今般異人言上之趣御許容被為在度、無左候得ハ、

皇国も是限りニ而実々御安危、此時ニ候と認有之候由、
(齊歌)
右二条公御覽被為在、御応対中ニ、今朝 大樹公急ニ大坂発途、伏見一泊ニ而東下いたし候と之趣相達、一・会・桑・玄同公早々出立ニ而東下ヲ止、上洛ヲ進候と之趣ニ而、俄ニ右次第ニ而御所辺大ニ混雜シ、種々異評等申触候、今晚 殿下初御一同参 内ニ而御評議も有之、何分此度之儀不容易訊ニ而、不憚
(近衛忠房) (正親町三条実愛)
朝廷振舞と大かた御憤り相成、内府公・正三卿御論
(御参親王)
ニハ願意通東下為致可然と御申立相成候得共、殿・尹之処例之通御異論も有之、当夜ハ
御前評ニハ不及御退散之由、

一四日

内府公江参 殿之処、二条公より御書御到来、其趣今朝一橋乗切ニ而帰京御届申出候は、今未明 大樹伏見江着則一・会共ニ面会存意申入候処、上京ニ而、二条城ニ今日着之筋ニ治定仕候と之趣ニ候間、此段早々為御知被成と之趣ニ候、今日酉刻より追々御参、一・会・桑・小笠原等も参

内、

一今夜半

内府公より周旋方へ可罷出御沙汰之由ニ而、御所より申来、藤井宮内、井上大和(石見)非藏人罷出候処、内府公御逢ニ而、今晚之

御評議別而御配慮被遊候、異人申立之処、兵庫開港ハ第二三ニ而三港

勅許之開港ニいたし度と之趣意ニ而、朝議之処諸侯 御召之上、公議ヲ以不朽之処置被召付度、依而来会迄之時日遷延

之応接いたし候様御論判相成候得共、一橋辺より申上候ハ、中々左様之応接いたし候而も承伏いたし夷情ニ無之、則兵端ヲ開候ニ相違無之候間、兎角

御許容相成外有之ましく、小笠原等も口ヲ揃へ兵端ヲ開候得は、忽チ

皇国焦土と相成、不可謂之御至難相迫候義ト申上、迨も遷延之応接ハ出来不申と差究、一橋よりも申上、

内府公も十分御議論も被成、必死ニ御振はまり之事候得共、右次第ニ而不及御微力候付、薩藩より応接之処御請合ニ而言上之意有之間敷哉之旨、

御沙汰ニ付委曲奉畏、当座私共より取究難申上候付、重役共へ申聞、何分可申上御返詞申上置候と之趣ニ而兩人参候間、尚吟味之上兼而内評も致置候事故、左之通、

兵庫開港三港

勅許之儀不容易

皇国之御重事ニ而、軽卒ニ

御許容相成候而は、天下之人心不居合

皇威相廢候御場合付、有名之侯伯

御召之上、天下之公議ヲ以

御評決相成、右来会迄時日遷延之為応接

朝廷より可然御方様

御差向相成、薩藩江随從被仰付候へ、、 尽死力十

分差はまり十二八九ハ遂成功度奉存候事、

右口上之代りニ相認、井上大和

御所江持参

内府公江差上候処、則御評義相成、大略御治定(重徳)大原卿

江

勅使被仰付候筋ニ相決候間、追付薩藩江御当り可相成、

早々用意いたし居候様

御沙汰ニ候段、翌五日早天大和罷帰申出候、(旨下力平)佐二右衛

門殿・小子随從之筋ニ相決居候処、小子

内府公より被 召候段

御所より申来、早々罷出候処、大原卿江御逢申上趣意

申上込候様と之御事ニ而大略演説いたし候処、別而之

御決心ニ而只今 殿下より御内達拜承いたし、第一貴

藩より建言之由候間万端御頼被成候、併少々亦異論相

起り候哉ニ而折角御評議中と被察候間、追付御決定可

相成候間、夫迄相待候様御沙汰ニ而七ツ后迄奉待候処、

内府公御下りニ而、迎も被相行候丈ニ無之、只今一橋

江御激論ニ被及、実ニ強情ニ申張、此儀

御許容不相成候而ハ寸歩も退席不仕と申募、若此義

御許容ニ而奉迫候諸藩も御座候ハ、私処置ヲ加可申

と迄申上、迎も致方無之勢ニ而、乍御残念三港条約丈

ハ

御許容相成候筋御内定相成候と之御事ニ而、尤

尹宮之御陰計共有之、無致方御勢ひ之事ニ被伺申候、

此上は諸侯

御召、且兵庫開港之処、御動キ無之処、第一ニ可有御

座段、屹度申上退出いたし候、大原卿ニも一橋江手強

ク御激論相成、終ニ箇様之大事件前以及言上候ハ、

諸藩 御召ニも相成、篤と可被尽衆議候処、昨夜ニ相成

申出則御決答被下度と申義難心得段、御詰問相成候処、

一橋申上候ハ、是ハ私一人之重罪ニ候間、如何様共嚴

罰ヲ可蒙と居高丈ニ成而申上候宜ニ御座候由、

一五日期、(改風) 奏より周旋方就御用内田仲之助罷出候処、

異舶一条付存慮御尋と申事ニ而、形行ハ同人より申上

候間相省キ候、

一大樹公より辞表ハ去ル四日

御下ケ渡相成候由、

一異舶一条幕府より言上之書面、且

朝廷より、御達書別紙二通之通ニ御座候、

一五日晚、遽ニ伏見より大砲・小銃京師江相運ひ騒動い

たし候由、

一阿部豊後守・松前老岐守官位被 召上、在所蟄居

朝廷より被仰出、於幕府退役申付候由、大坂出立とハ

申事候得共、弥之義相分不申候、井上実否探索之賦候

間何分可申上候、

一御旗下之士、大ニ一・会・桑江不平ヲ生候段、第一両

閣老御処置之義

朝廷より御沙汰ニハ候得共、一橋より言上之上釀成候

事と相察、

大樹公東下辞表等之一件も、番頭より諸士惣名代ニ而

御止り相成候様言上、若御許容不被為在候ハ、決心仕、

橋府江殺突いたし候と而、混動も有之由、

一越老公、去ル朔日愈御発駕相成候処、二日今津駅より

御引返相成候由、

但御留主居伊藤友四郎昨日参り引合候ハ、御風邪氣

ニ而御引返相成候得共、内実ハ長州御処置一条而

已ニ而御出懸相成候処、段々其後変態ニ相成、御

当地之混雜ニ相成、幕府内輪之処、崩立候ニ付而

ハ旁御趣意も有之、一応御引返

御召ニ而も発候得ハ、則御出可相成、先度小子踏越

候節、段々御約束も有之、大坂ニ而彼は御引合可被

遊 思召之処、右次第ニ付申入置候様昨日(毛受共)面受鹿

之助到着いたし候間、参候と之事ニ御座候、委曲
井上江申含置候、

右は昨今御当地概略之形行ニ而、不容易次第ニ付委事
之御左右言上之為、井上大和被差立候付、自余之事件
態と省略いたし候、去月廿七日以来一橋下坂、両閣老
之顛覆、井上主水正条約取返、引統尾玄同上京、大樹
公辞表、突然東下、一・会・桑差留方として奔走、終
ニ去ル五日迄之始末転変無究、古今未曾有之次第ニ御
座候、其所由虚実何れニ有るヲしらす、恐らくハ橋府
之陰計ニ出候義少からず、可恐次第ニ而、此末如何之
不思議到来も難凶、内輪之処累卵之急ニ御座候、至難
之御時節と罷成、御互ニ憤満ニ不堪次第御座候、御勘
考ヲ以宜鋪言上御頼申上候、以上、

十月七日

大久保一藏

西郷吉之助様

蓑田伝兵衛様

文書原寸 縦一六種 横六一四・三種

101 有村壮一川上助八郎ヨリノ建白書

天保通宝鑄造ノ件等

〔包紙ウツ書〕
上

有村壮一

川上助八郎

封

〔表紙〕
上

乍恐口上覚

私共式

御直ニ建言仕候儀、実以恐多僭踰之罪難逃奉存候得
共、存候儀空敷黙止罷在候而は却而不忠之至と奉
存候間、不願多罪言上仕候、

一屋久島御改革被仰渡候砌より壮一儀は、御徒目付ニ而
掛 被仰付、度々下島仕候処難有御役被仰付、猶亦当
春より在番ニ而下島仕居助八郎儀は、此涯下島仕、壮
一申談、御改革方御用取扱仕候様被仰付、当七月初旬

罷下候ニ付、万事談合仕、猶亦島中榮勞情態篤と見聞仕候処、近来山床遠方罷成、出産平木も十分調兼、産物連は鯉節之外銀高ニ相及候品物無之、島中致困窮別而難渋仕居候折柄、御改革被仰渡候ニ付而は難有

御仁恵ニ而、米・豆・其外万品御仕下之上、拜借被仰付、且昨年来鯉節御買入過分御利益相成候訳を以、別段御下ヶ金被成下、猶亦人少之島柄故、生子養育料迄も可被成下段承知仕重疊難有

御趣意一同奉汲受居候処、当時諸品別而高料ニ罷成、既ニ米老石代錢六拾貫文余ニ騰貴仕候得は万品右ニ準シ、鯉節之儀も拾貫目代錢七八拾貫文以上ニ御売立相成、島許ニおひて御買入三拾五貫文ニ而御座候得は、拜借御品物代引負罷成、一同之人氣も潰し罷在候ニ付、今少々御買入直増ニ而も被仰付候ハ、可然哉と吟味仕候得共、何分釣高限有ル鯉節ニ而御座候得は、当時高価之御品物代ニ比、競仕候時は年々歳々拜借代高引負可罷成は案中ニ而一紙総之表ニは過分之御利益ニ相見

得申候得共、其実は名目計ニ而、別而心苦仕、今形ニ而は永統仕、往々御益筋罷成、島中苦情不申立様潤色相立候処無寛束奉存候間、御救助之儀御利潤ニ不相拘候ハ、段々取扱之道承得候趣も御座候得共、当御時節柄莫大之御入価被為追屯候儀は、乍恐承見仕候間、右通ニ而も不被為済御砌、亦御益筋相成候様取扱仕候得は、島民共窮迫之時機ニ成立、前後両全之趣法工夫勘考仕兼、素より不肖之私共甚以心苦断腸仕居候処、当島江被遣置候安田轍藏追々見廻申候ニ付、同人儀は經濟之道ニ弁達仕居候者之由兼而承居、殊ニ三四ヶ年も在島仕居候得は当島之事情ニも致通弁居候ニ付、前文配痛仕居候趣を以此孤島ニ而も經濟之法は相立可申ものニ候哉と相尋申候処、如何様共法は相立可申島柄ニ而候段承候ニ付、私共実意申聞、御為筋相成候儀は勿論、島民共御救助之籌策無腹藏申聞呉様申入、内分を以段々承得候趣意至極的当仕候間申聞候件々、書記可具旨申入候得共、御政体ニ相係候儀を猥ニ紙上江

書頭候而は、別而奉恐入事と一向辞退仕候ニ付、猶亦御国家之御為筋相成候儀を乍存含黙止居候而は、却而不忠之事候間、互ニ忠勤相励度、勿論我々心得ニ相成候迄之事候ニ付、大意荒増書記可具旨及再度内話仕候処、乍漸別冊之通書記吳申候件々、悉至当之妙策ニ而可有御座哉と奉存候、就而は私心得ニ相成候迄ニ書記申候別冊奉差上候而は、同人江对シ信を失ふ場ニ相当リ可申候得共、承得候籌策之件々数多之ケ条万一趣意相違候而は、却而大害ニ可罷成哉と奉存候間不願恐其何奉備

御覽候第一鑄錢之策、於屋久島御取立相成申候ハ、外件よりも太粧之御利益相成可申哉と奉存候間、自然被為叶

尊慮候ハ、乍恐私共兩人江五六ヶ年混と掛被仰付、万事御委任被下、外同役共ニも追々下島仕候様被仰付被下候ハ、万緒談合仕候而尽死力、是非成功相遂候様精勤仕度、乍恐懼思願ニ奉存候、

一琉球通宝当百錢製造所、屋久島之内江一ヶ所被召建、鑄錢被仰付度、就而は

公義流人は外島江被召移、御用之者外罷渡候儀御禁止被仰付、右鑄錢は都而天保通宝ト書損之当百錢製造被仰付度奉存候、此儀ニ付而は対 御国律別而奉恐入事ニ御座候得共、顯然と御製造は

公辺江御憚も可被為 在候ニ付、於屋久島極御内々御鑄立之儀は決而御差障有御座間敷奉存候、然は御隱蜜之御製造ニ付而は、出来員数増減不仕候而は不叶儀ニ御座候得共、太底製造人旁見賦を以出来高より御得分等大凡算当仕候処、他国通融相場にして則より一ヶ年ニ金拾万両余之御得分丈ケは随分出来可仕奉存候、就而は御本手銀相応御入価可及儀ニ御座候得共、差掛壹万兩位も御座候ハ、銅地金其外要具御買入代料等一切相調可申、尤白炭之儀は於屋久島焼調申儀ニ御座候間、御当地鑄物方御入費よりハ格別最安出来可然候、且亦職人等ハ纔計被差下候ハ、島民共召仕ひ、成丈

人数御差下ニ不及様被仰付度奉存候、銅地かね買入方之道筋より、現天保通宝同様かね組之次第不容易儀ニ而は御座候得共、前文轍藏能存罷在、委敷伝受可仕段承置候儀も御座候間、若御本手銀別段被相下候儀不被為叶候ハ、屋久島産物方在錢を以製造被仰付度奉存候、左候而、右新錢一往惣而島産物御買入料ニ被振向置島産物は都而直増を以御買入被成下、御下し品之儀は現錢引替相渡候様仕度、現錢持合無之者江は組合相立三朱利付を以拝借被仰付度、右三朱之利錢三割壹分を以島中困窮之長病人江薬料に被成下、式分は生子養育料ニ被振向置、右新錢外々江は一切不積出様、船々出入嚴重御取締被仰付、島中迄ニ為致通融置、幾度も御藏出入相成候上、程能垢付たる時、大坂表・其外諸所江繰廻、金銀米錢并島許有用之品物は勿論、御領内不足之諸品御買下被仰付候ハ、一廉之御用途ニ罷成、随而島中御救助之道も相立、島民共忽潤色相頭、島産物扱売買之悪念も不生、漁方等出精仕一同難有可奉存

候、右ニ付而は島産物高直御買入相成候時は格別御益筋は無之賦御座候得共、鑄錢之御得分(付書)他領相場を以比御買入料拾四文、他領百文競仕候得は毛頭御損失無之、当分之御利潤より格外御益筋罷成、譬島産物御買入料迄ニ被振向候而も年々正金拾万兩余之御得益差見得申候間、相応之御積金ニも相成、此小島ニ而は過分之御益筋罷成候ニ付、一兩年之内ニ鑿節拾貫目代錢百貫文ニ御買入被成下候而も、其実ハ鑄錢之御得分ニ而、式三拾貫文ニ相当ル算当ニ御座候間、別而可然御儀と奉存候、且亦年々拾万兩余之天保通宝他邦江積出候時は公辺は勿論、諸藩謙疑(嫌)も可生事ニ御座候得共、捌口之儀より銅地かね買入方等之儀は轍藏江尋究仕置候趣御座候間、弥製造方被仰付候ハ、是迄通要用之儀は可奉得御差図候得共、製造方は勿論御損失ニ不相係儀、又は島民迷惑無之儀は都而屋久島在藩見計を以致取扱候様不被仰付候而は旁成就難仕儀と奉存候、尤鑄錢於被仰付は、掛役之儀より島中金錢相場之儀可奉伺儀も

可有御座候間、御取扱向等之儀一体御当地とは相変り候而も、鑄錢製造中は都而在藩江被任置度奉存候、

一屋久島小瀬田村之内江広野有之、新田相開キ申候得は七八千石位之御高前ニ罷成場所御座候間、同所江築田被仰付候ハ、往々御為筋可能成候得共、何分御本手銀過分ニ相及可申候ニ付、是迄之在番も吟味仕兼、不奉伺御差込場所ニ御座候間、前文鑄錢於被仰付ハ、例を以一ヶ月ニ六日宛休日被仰付、右休日ニも平日同様鑄錢被仰付、右之錢は別段被差分置、右を以築田被仰付度奉存候、左候ハ、月ニは纜之日数ニ而御座候得共、前文拾万兩余之御益筋ニ不相拘、休日鑄錢之御得分迄を以、御本手銀相備、別段御出方ニおよばず、四五ヶ年之内ニ築田成就可仕候、鑄錢之儀御差障有之御取止ニ相成候而も、築田文は往年御国益罷成事候間、御取起被為

在度儀と奉存候、乍併過分之御本手銀無之候而は不叶儀ニ御座候間、何分鑄錢被仰付候ハ、其御得分を以

屋久島諸所田畠開ケ立、御高前も相重ミ、尤後年御下し米等之儀ニも不及時宜ニ罷成候ハ、不容易御国益ニ罷成、於島中別而難有

御仁惠永久奉仰儀は勿論、鑄錢之御得も後年ニ相残、誠ニ以御良策他事有御座間敷、乍恐奉存候、尤鑄錢於被仰付は猶亦其節委細可奉申上候、

一安田轍藏儀は何様之御用ニ而在島被仰付置候儀全不奉存、私共申上候儀、甚恐多奉存候得共、同人始終歎息仕居候趣は、適々御家臣と罷成為廉立御奉公仕候儀も無之、殊三年来紛骨碎身修業仕候經濟之道は、空敷画餅と相成、且亦当今内外切迫之事情を遙聞仕、頻ニ存含候儀ども有之、奉達

上臈度候得共、書面ニ而は方一大小之趣意違等ニ相成候而は亦不相濟訳故、乍恐御近習辺迄ニ而も罷出、内外之情態洞察仕候件々言上仕候儀相叶候ハ、譬如何様之罪科ニ被処候而も難有可奉存と頻ニ落涙仕、寢食も不安程ニ歎苦罷在候、轍藏、心中篤と觀察仕候処、不忠之

心底毛頭無之、

公辺御役方之人柄は勿論、諸国之政体情意も委敷存罷在、殊ニ兼而咄承候趣、別而広大成議論ニ而、何角時勢活達之良策存含候向ニ被察、秀才傑出之者と觀察仕候間、御近習辺江被召出候儀は奉恐入事候ニ付、責而は生産方掛海老原宗之丞(清忠)・伊集院甚助等江 御領内出産品等之儀より前文存含罷在候儀共為御聞相成候ハ、轍藏心底も相分り、尤生産方御要用ニ可相成儀多々可有御座哉と奉存候、左様御座候ハ、其身は勿論、於私共別而難有可奉存候、

右々々甚恐慄至極奉存候得共、壯一儀は在番ニ而在島仕居、助八郎儀は此節罷登申候間、島許ニおひて申談候趣意、犯死罪言上仕候、誠恐誠惶謹言、

丑

有村 壯一
川上 助八郎

冊子原寸 縦二六・六糎 包紙原寸 縦 二九糎
横一九・八糎 一二枚 横三九・八糎

二四一 川上助八郎ノ懇願書

安田轍藏呼返ノ件

(包紙ウツ書)
上

川上助八郎

封

乍恐書添を以奉申上候

同役有村壯一連名ニ而別紙を以建言仕候事件、全体私儀万事不移之者ニ而轍藏書記仕候ケ条茂、逐一弁解仕儀茂不相調位、壯一儀は諸事別而移り宜敷、殊ニ屋久島御改革初発より掛被仰付、島人情態ニ茂能相通シ、昼夜致心勞精勤仕、尤轍藏書記之件々茂委敷伝承罷在申候間、自然被為叶

尊慮候ケ条茂候は、壯一江五六ケ年混と掛被仰付、外同役在番被仰付候而茂、一ケ年交代ニ而は万事不連続之儀茂可有御座候間、時々下島上帆仕、在番申談相勤候様被仰付候は、旁成就可仕儀と奉存候間、別段可奉

伺合御座候処、彼是同人江申談候趣、悉ク同意仕、兎角危人ニ而は行届兼、成就難仕儀共兩人申談、尽死力相角度儀と壯一ニ茂申事ニ而、尚亦談合仕趣有之、連名ニ而言上仕候儀ニ御座候、然共前文奉申上候通、一体不調法之私ニ御座候得は、壯一申談相勤候は、乍恐助力ニは罷成可申哉と奉存候得共、一体之取扱壯一場ニは行届不申候間、其段は被聞召置被下度奉存候、

一 右轍藏次第、別紙之通奉申上賦御座候処、私上帆当日見廻申聞候ニは、先日より御為筋相成儀存含候ハ、申上候様丁寧申聞具置次第ニ候、尤拙者致思願儀候は実ニ天下太平之策より

御家長久富榮之次第、各国忠死之骨ニ肉をつくる之策御宝库ニは御積金兆之數迄ニは迎茂不及力候得共、億万之御積金は、七八年内ニ相出来可申策存含ニ候間、御聞ニ奉入度念願奉存候得共、不調法之筆紙ニは難申上尽候間、其内一策現ニ手新建白仕度相認候間、差上道

筋有之不都合不相成候ハ、宜敷取計可具旨承申候間、別封其假乍恐奉差上候、当世慙天下太平之策は勿論、御家長久、億万之御積金可相成等之儀、中々不肖之者之愚存ニ不能候間、不苦候ハ、荒増咄為聞具候様申入候得は、少茂隔意いたす訳ニ而は毛頭無之候得共、口外ニ難頭儀も有之候間、不惡汝受具候様断申候間、左様ならは相含候条々自然御採用相成候ハ、弥被行可申籌策ニ候哉と、尚又承候処、機會を取失候而は何事茂被行悪き者ニ候得共、実ニ只今其機會ニ相当り候間、屹と相出来可申旨実意面色ニ顯れ返答仕候、右ニ付薦と勤考仕候処、別冊ニは生産方掛御役々之者共江為御聞相成候様申上置、又候恐入奉存候得共、右等之要柩は容易ニ相洩し申間敷候間、殊ニ

公辺御用向茂取扱候者之由ニ而、極密之儀茂存居候付、決而御為筋相成儀多々御座候半と奉存候間、何卒此涯御召返シ相成、

御直ニ御下間被遊被下候様、乍恐奉願上候、同人儀如

何様之訳合ニ而在島被仰付置候儀も不奉存、誠ニ恐多候得共、段々承候条々尤之事共不少と存詰、此段奉方願候、

右は不肖之私人ケ間敷細々奉申上儀、実ニ恐至極奉存候得共、段々承得候趣茂有之、既ニ此節長州御征伐弥相成候ハ、異国船加勢として可差越、

公辺約条等之訳合等島元ニ而承り、一昨日着舟仕候処、同人申通之風評承り、決而ケ様な訳御座候半と愚考仕候、轍蔵儀間者等之御疑茂難計奉存候得共、私愚存ニは、全体人物は飽暴成持前ニ而候得共、是迄公辺御用向茂取扱いたし、夫れノ之総所を能相弁居、何分天下之秀才ニ而、就中經濟之道ニおひては実々難得者と相考申候間、譬如何成間者ニ茂せよ

御聞取被下迄は差而害罷成申間敷、尤同人存含候儀、御聞ニ達候上は、如何様罪科ニ被仰付候而茂難有と兼々承候間、今形被召置候ハ、不遠苦死仕も難計、此前より度々吐血仕候由、近比ニ茂過分吐血仕、最

早余命も無之と存込、実ニ不忍為体故重々恐懼之至奉存候得共、拜伏願は一日ニ而茂早ク御呼返シ

御聞取被下候は、万ニ一茂御為筋罷成候儀茂可有之と奉存、又候犯死罪書添を以奉祈願候、誠恐誠惶謹言、

十月十日
御勘定方小頭一往
屋久島奉行寄
川上助八郎

文書原寸 縦一八・五種 包紙原寸 縦 二一種
横 三三〇種 横 二八・七種

大久保一蔵ヨリ伊地知壯之丞市来六左衛門へ

会藩応待及英仏ノ件

皇威ニも相拘、且天下人心ニ関係いたし候間、賢侯

御召之上、衆議ヲ以不朽之御定策被為立候上、改而従も

朝廷

御許容相成、其上ハ征夷之成功ヲ可遂、本道之開港ニ相成度訳ニ而、段々尽力も致候得共被行候丈ニ無之、終ニ

幕府因循之開港ニ陥り候義、実ニ千載之遺憾ニ御座候、然也

朝廷之処ハ兩三卿別而御尽力も被為在、終ニ

(近衛忠房) (朝彦親王) (正親町三条実愛)

内府公・山階宮・正三卿御引入ニ御決定相成候、幕も内

輪別而混乱之模様ニ被察、実ハ一・会・桑之三藩も困究(鶴)

ヲ究め候様子ニ被察申候、子細ハ昨日会外島機兵衛面会

いたし度と之事ニ而参候間及面接候処、大樹公御進発以

来今日ニ至り候事、内実ハ三藩ニおひて、別而焦思苦心

之次第も有之、何事も趣意不詮立、漸ク(長行)小笠原侯引出シ、

永井主水(尚志)正御召之事共貫徹と申位ニ而、実ニ不可言之事

情有之、寡君共ニも配慮いたし候事一々難申尽、兎角依

親察外無之、依而ハ既往之事ハ無是非候間、何卒何も被

為捨置、今日を機会とし而改而為天下御尽力被下度、斯

申上候而は御耳障リニも可相成候得共、尊藩之動靜ハ天

下之動靜ニ関係いたし候間、即今御尽力ニ御振はまり相

成候得ハ、諸藩則影来スル勢ハ頭然たる事候間、実ニ

天下ノ為と思召御尽被下度、全体(御名)——公為天下基本ヲ被

為開御鼓舞相成候而社今日ニ至り候訳、昨年長州犯

闕之砌も為尊藩、主人職掌も相立候御恩も有之、益々主

人も御依頼申上、今日ニ至り候而ハ、尚以御見込之処も

承り尽力いたし候趣意ニ而、是迄ハ先尊藩も御傍觀之姿

ニ被為入、是ハ外藩ニ而ハ御尤ニ奉存候得共、必天下之

属目スル処ニ候間、一同見合候場も有之、兎角是よりハ

種々御憤瞞(慮)之義も御捨被下、父母之病ヲ千ニ一養生仕立

ルト申御趣意ニ而御起り被下候様と之趣意ニ而、一口ニ

申候得ハ是迄之事ハ過り候間、爾后合力同心、為天下尽

したいとの趣ニ候間、返詞いたし候ハ以之外なる御口上

承知いたし候、弊藩之義

天幕之大嫌疑ヲ蒙り、尤諸藩之疑惑も請候得ハ兩寡君趣

意も有之、大事之節

天朝御奉護丈ヲ相勤よと差出置たる訳ニ而、成程家老始

上京いたし居候得共、右趣意ヲ奉スル外無之心得罷在候、

尤人心人望ヲ得不申候而、中々尽力出来候者ニ無之、益

天幕之御趣意ニ触、害有而寸益無之訳ニ候と而打合候処、(折カ)

色々申而左様御謙遜之御口上而已承り候而は、甚込入り候なとゞ甘言ヲいたゞき立候間、兎角天下之事ハ名義之所在ヲ以可被行事と相考候、しかるに色々御不審申上候義有之、必定尊藩ニおひてハ御存知可有之存候、幸之御出ニ候間、御質問申上ルト、第一会津侯関係之事件等五ヶ条面折いたし候処、さすがニ閉口ニ而不存候ヶ条も有之、両閣老ニかふせ候ヶ条も有之、跡先之返答ニ而凡而承り候上、曲直心底之佞論し候処、一言も有之丈と無御座、何も申而も私共重罪ニ帰シ候、依而既往ハ置而、今日より之機会と改而御尽力被下度ト面皮を厚ふして再三承申候間、自先刻御返詞申上ル通ニ候、尤今日より之機会と申機會可尽力之筋合愚見ニハ、更ニ見据無御座候間、尚勘考ハ可致と之結尾ニ而引取申候、其外段々事長キ論判ニ而中々及筆紙候丈ニ無御座候、仮令詭計ニもせよ内輪之処は心配ニ相違無之語意ニ而、勿論家醜ヲ尽ク揚ケ而論シ候、別而之差迫ならてハ仇家之如キ御困、殊ニ小夫ニ参り、叩頭屏身右様之訳有之ましく被存候、乍併一応

合不成之心底ヲ試候策致も難凶、何にもせよ此方ニおひてハ名義之筋さへ踏違へ不申候得ハ不苦事ニ御座候、尚勘考もいたすとハ些後れ候返詞と思召も可有之候得共、終ニ彼之答へ無之処より姑息ヲ交へ申候、併同様之趣ニ而、今日書面ヲ以断切候賦ニ御座候、大抵奥意も推知被致候訳ニハ無御座候や、長御処置も愈尾ハ打チ不申候、幕長之罪ヲ揚ケ候得ハ、幕か重いと申人心之段も申候処、夫さへ腹ハ得立テ不申候、御地之義、西郷着后御進退御決断相成候筈と奉存候、夷船之処、未安心出来不申候間、尚御詰合之処、急ニ御施行有之度、幾回も所祈望候、蜜商等之義、尚此機ヲ以十分ニ無御願念、御尽力伏而御願申上候、木藤市助外ニ一人遠行之志ニ而出立候、全体英之含ニ候得共、大抵御詰之上仏之方ニ被差出度、左候得ハ、外ニ両三士有之候、左候而、新納(中三)・町田(久成)如キ人を被差出度事ニ候、何分崎陽之方ニ一先御両君之内ニ而も御出相成度候、凡異船ハ横浜之方ト相考候得共、彼方ハ形跡ヲ潜メ候事六か鋪故、探索丈之事ニ御座候、

尚併手ヲ尽可申候、最早夫々御手配相成事と存候得共、

御関係之事務等心得之一端と不差置申上候、書余御推察所仰候、

右之形行ハ昨日町飛脚被差立候間、西・蓑江宛申遣候(蓑田伝兵衛)

得共、当時柄之事ニ而、若遲着ニも相成候ハ、御申出置

可被下、最早(小松藩刃)小太夫・西等ハ出立后も難凶相考申候、木(西郷隆盛)

藤など一条ハ桂太夫江御申上御尽力可被下候、(昌武)谷村等

未ニ候ハ、其方御振向ニ而ハ如何可有之候哉、拜首、

十月十三日

大久保一蔵

伊地知壯之丞様

市来六左衛門様

御連名御免可被下候、

文書原寸 縦一六糎 横二七八糎

1802 関研蔵ヨリ桂右衛門へ

欧州ノ文明ヲ報ジテ見学ノ必要ヲ告グ

一(封筒ウツ書)

巴理斯より

右衛門様

侍史

関研蔵

八月廿二日龍動府を發しウエルギー国都府より独逸列国
字漏生都府和蘭諸所相周、去月廿八日仏国都府巴理斯へ
参着無異周旋仕居申候、乍恐御休念被遊被下度奉願上候、
諸は当府之形勢は龍動府へ比すれば三分一位も可有御座
候得共、一体繁花美麗にして不患なく、海軍は英国に不
及と云へとも陸軍は英亦不及、当時於歐羅巴諸学問の開
ケたるは仏国の右に出るなし、英人と云へとも依学問其
極ニ至れば、仏書ニ依て講ずると云々、故に仏国は下に
人才多く在て国政を討論する事多く、国政甚不容易、譬
仏国は私式之才力を以動し与ふとも、英国は難動是を以
て英仏之情体を御推覧被遊被下度候、其他一般歐羅巴之
形勢、国政之大意と云ふものは、富国強兵之順序を相守
詳に出入を計りて事業に及す、国政公平にして貴賤を不
論、高論あれば則是を用ひ人を挙るに愛憎を以せず、才

力を論して各其機を以專任して仕ふ、海軍は海軍局に学ひ、陸軍は陸軍之学講に入る、其他の講学と云へとも各随意之学講に学ぶ、亦貧人は貧院を立て養ひ、病院は病人を療治せしむ、捨子は養院に養ひ、馬鹿院啞子院を立て、適宜至当之職業を教へ、罪人と云へとも無益に籠舎する事なく、其局中に放置して各得意の職業を以、種々の製作をなさしむるの類、実に不至処なし、歐羅巴諸州に於て尤公平なる仁政は第一英国第二ウェルギー国也、其他仏国・独逸列国・和蘭等は公平之内ニ茂国法と云へるありて、英・ウェルギー国之如にあらす、御熟知之通英国は我朝同様之孤島にして、物産土質ハ我朝に難比候得共、富国強兵共に成て地球上を横行し、英国の右に出るなし、我朝は人質強慢にして地球上之広を不知、国内之動搖に空ク年月を費す井中^維の畦か井口より蒼をあをひて広とするに似たり、今形ニ而は北に魯西亞あり、西に英仏あり、東に米利堅ありて終に彼之沓を取るに至るへし、嗚呼其期ニ至り慨歎斃とも益なし、故に遠久之大患を見

通して速ニ蒙昧を照し国を開き富国強兵の尽力なからざるへからず、是迄我朝之形勢を推候処、先便も申上候通、各自論を主張して如何なる高論と云へとも快とせず、異論紛々、更に国政決定するの期限なし、適患国之士不少と云へとも我朝内部之形勢動揺而已を注目して、井中之蛙論多く、主張する処の義論異にして、皇国之全力を尽す不能、故に開鎖を不論、公家方諸大名を始、列藩之政務に關係する全権を撰び、或は攘夷家之拳魁と共に欧羅巴之形勢見せしめ、我彼れの国体政務の得失を目下に決論し、天下列藩志を一にして国政の大変革を起し、普く緩急之別を立、富国強兵之基本を相守、国政を振起せば、拾余年の功を不待亜細亞に独歩すへし、此節遠行人人数之内ニ茂過半は攘夷の拳魁たる人物有之、地中海へ参る迄は種々強慢之愚論多、見聞も不忍様御座候処、地中海マルタ島港に着、始而欧羅巴之開成強大なるを實驗して、忽蒙昧を照し、是迄主張せし愚論を恥、歎慨して不止、刑部様私共ニ茂是迄欧羅巴之事情粗觀察仕居候得共、斯

迄はあるましく相考居候位ニ而、遠航以來段々愚存茂相
變、以御蔭此度格別之講學を仕り、日々諸件を見聞して、
只々憤発慷慨而已ニ御座候、勿論歐羅巴は我朝之形勢を
以及熟考申候処、未だ遊学生等を差出之階級等無御座候、
如何となれば、譬へ学生成功帰朝いたし候而は、上に立
官吏蒙昧なれば不行、勿論下より上を仕ふ不能、則當時
仏国之形勢同様ニ而、下に人才多して上愚なるか故に、
国制は甚以不容易候、国を開に緩急の別著して富国之功
不成バ、良法ありと云へとも行ひ難し、故に乍恐 太守
公御一番に被遊御踏出、上よりして下を開くの御所置こ
そ奉専念候、次ニは御国許而已相開ケ候而茂普 皇国に
及す不能候付、前件ニも申上候通、公家方は勿論列藩の
諸侯歐羅巴に航して形勢実験無之内は御国政御決定之期
断然無御座候付、此義論は是非〳〵御同意被遊被下、可成
速ニ相開候様御尽力奉願上候、右之外申上度儀は筆紙難
尽、何れ不遠御目通仕候節可尽申上候、至誠敬白、

丑十月十三日

(五代友厚)
関 研藏拜

(程久松)
右衛門様
侍史中へ

追而奉申上候、御国許も追々整財之御手略被召付哉
之趣伝承仕り、就中南島ニ於てガラバ江之御談判、
香港之鎮台ちと不承知之由、ガラバ商社よりホーム
への書状に相見得、於爰許歎息仕る事御座候、歐羅
巴之形勢実験仕候処、愈以富国之策略切迫と罷成、
段々趣向相付申候処、別而能キ都合ニ相運ひ、此策
普く相行候ハ、百万両弍百五拾万兩之御金繰は如
何様とも御出来相成可申候、此始末は運航中第一之
御土産と奉存候得共、大略申上候而は、反而御疑惑
可被遊候付、帰郷之上と申上候候、尤此外差急申候
事件も御座候間、精々差急帰郷之賦御座候間、来二
月中ニは拝謁可仕哉奉存候、毎度乍恐乱筆御推覽奉
希候、敬白、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第六九九号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦二〇・三種

封筒原寸 縦七・二種

横二六・八種 三枚

横一一・二種

1865 米良事件ニ付薩藩へノ依頼条々

写

一 翰呈上候、寒氣愈増候得共、先以亀之助殿始皆々御
安康可被成出精珍重存候得共、折角正命之出業可被成
候、

一 拙者儀相良表より調練之稽古江参候様、越前守様思召
(相良親巻)

ニ而被仰出候旨、那須四方介相達候、

一 菊地七郎左衛門より別段心入之趣、越前守様より御直

ニ被仰出、難有事故早々罷出候様親類故被申伝候旨申
来候、

一 居処は土地御下屋敷之由達シ有リ、

右三ヶ条は此頃上京ニ付御出役為御請米良亘理御差図

ニ而参上之砌、於願就寺御年寄御揃ニ而御達シ有之段

亘申聞候事、

一人吉表江上京ニ付、無念之届ケ書覚、此届ケ書も人吉
より差図ニ而之事、此度渋谷三郎左衛門殿初御役々被
差越、御尋之趣承知仕候廉々不行届無念罷在候、此後
差扣御届ケ申上候、以上、

十月十六日

人吉表計略推察扣

一 今度調練ニ事寄セ、越前守様より思召ニ而之趣厚ク申
越シ、下拙ヲおひき寄セ、追々と他国江通用とり引の
ならぬよふニ被成候謀と存候、

一人吉江呼寄候儀は、当山中容易ニ側量六ヶ敷御見察ニ

付、拙者ヲ取寄、色々理解ヲ以御窮命被成、自然と返

答ニつまらせ候上、土地之屋敷ニ押込置、夫より山中

ニ而六ヶ敷と御推察之者ヲ不残呼寄、御せしめにも可

相成哉、殊替り候得共、先年小太郎様ヲ金谷ニ押込候

事も有之候由承り居申候、

一 何分油断ならぬ事共ニ成行申候、先ツ不参候而は何れ

難叶存候、下拙押込、又ハ毒殺など致し候ハ、役人

又は大藏より可申越候間、

薩州公ヲ御頼かたき御取扱下候様、龜之助殿ヲ進め、御同心被下度御頼申入置、下拙は一命ヲ捨居申候得は驚不申候、跡之処宜敷御頼申入候、

一当表ニ而も心服之者兵衛殿、大藏父子三人、芳善坊五人、外は無之、自然拙者ニそむき申候者は無御座候得共、何分小人ニ而隱密ヲ談スル者外ニ無御座、返而ろげんの糸口ニ相成ニ付、右之者外ハ他言不致候、此段御推察心得申入置候、其方親類ニも難申入人柄段々御座候、御察可被下、拙者迎も老人之母持申候得共、是以人吉ニ而はなされ不申、其方杯親類も是ニ而御察可被下、人吉から之事と申せは米良中之者恐入おのゝき申候ニ付、心底ヲ明され不申、ロゲンノ糸口ニ候、尾金要人并家来は心直り居申候、何分要人口早キ真のなき男ニ而心配ニ候、先当分は味方ニだまし付置候、此段為心得申入置候、

一何分人吉表よりこなし申候後ニハどふもならぬよふニ

なり可申候、其表稽古共も至而きらい之事ニ御座候間御用心被成、折角其表ヲ何かニ付御頼置可被成候、

右一紙

一私儀 薩州様之

御厚恩先年より有之、且又此節龜之助殿稽古預之儀ニ付、莫大之御厚恩拙者如キ小身体之者ニ而ハ奉恐入候儀ニ而、相良表之天地之違、其表御取扱宜敷、死スとも

御恩難忘存居申候、此処御含被置、自然鹿兒島表上方江相通候様、互ニ御工夫御知略頼入候、

一何分人吉より疑ひ、拙者ヲこなし申候積ニ御座候、此度上京仕候事は其表江龜之助殿出し候事ヲ殊の外責められ申残念ニ候、

一拙者上京仕候儀ハ何そ異心有之而之事ニは毛頭無之、菊地之子孫ニ付、且御内勅ニ祖先之遺勲も有之候間、上京神妙と申事を難有相考、不取敢馳登候事ニ候、何ぞ外ニは望ミ之事無御座候、此段御含置被下候、

一何分薩州様思食之通、乍恐下拙ニも御付キ申上度心底
ニ御座候、

一世上がとちらニ付候得は忠やら不忠やら一向不相分世
の中ニ而心配仕居候、微力之米良山ニ候得共、一山ニ
而押はかり忠ヲ立程之力無之残念歎ケ數候、何分ノ
薩州ヲ御頼ニ申外ニ無御座存候、御工面可被下候、
一此書翰之内ニ心ニ落チ不申儀候ハ、無遠慮被申越候
様存候、下拙も筆之仮書記シ差上候間、宜敷計略茂候
ハ、追々被仰談可被下候、

此三卷一覽之上早々火中屹と他見御無用、
文書原寸 縦一八・二種 横二〇五・四種

BOOK 吉井幸輔ヨリ西郷吉之助蓑田伝兵衛へ

長州再征及宇和島へ使者ノ件

私事去ル二日夜半宇和島着舟、則御家老松根函書へ面会
之儀申遣候処參り候付、此節撰海夷舶来入、且長征一条
等旁以内外御危急ニ付而、伊予守様御上京奉願度、是迄

(伊達宗城)

御一致御尽力之末ニ付、宜被仰上給候様一通申述候処、
いつれ御直ニ申上具候様との事ニ而、同六日拜謁、大久
保氏より

朝廷江建言之次第、且夷舶一条之事共委細ニ言上、是非
共御乗出之儀申上候処、猶又篤ト御勘考之上御返答可被
仰出との御事ニ而退出いたし、翌七日罷出候様致承知拜
謁仕候処、篤ト御熟考被遊候処、如何ニも議論之処ハ同
意ニ候得共、唯今致上京候而も如何尽力可致哉、頓と目
途不相立、尤大樹公御在坂ニ付而ハ、一先於大坂及談判、
其上上京不致候而は不都合ニ候、此方も幕府之嫌疑ヲ受
ケ居候得は、迎も議論之相立候訳ニ無之、併御国之御策
も大概ハ何と致可相立候間、夫を御承知之上御同意ニ付
而は、共々御尽力可被遊、遙々此方を頼ミに罷下り候段ハ
幾重ニも忝尤趣意不相立空ク罷歸候処ハ、甚御気毒被思
召候段被仰聞候付、成程御尤之御事ニ奉存候、併此節ハ
内外之大変、

皇国之御大事此時ニ限り候御場合ト奉存候、御目途も被

為立間敷候得共、ケ様之御大難ニ臨ミ御傍觀ハ如何ニも不被為濟御場合ニ而ハ被為在間敷や、事之成否ハ兎も角も何卒御出張被下度申上候得共、何れ此後追々変態、又機会も決而有之候ニ相違無之旨被仰聞候付、無致方退出、八日出立掛松根宅へ罷越佐賀之関ニ而蒸気舟を相待、今一左右可申上候間、夫ニ而御決シ被下度談判いたし候処、何分御直ニ可相窺具との返答ニ而拜謁、右之段相窺候処、昨日被仰聞候通御變り被遊候御事も無之、容堂(山内)・良之介(細川護美)などハいかゝと被仰候ニ付、とふそ御出被下度、此御方様より御使者ニ而茂御差立被下度申上候処、御国之御策略承候上、至当之御着眼と存候ハ、容堂ニも可申遣との御事ニ付、何れ佐賀之関より欵、又は京師より欵、今一左右可申上旨申上、即日日出立佐賀之関江罷渡候賦ニ而舟仕候得共、風并不宜大ニ時日を延シ候付、又引返シ大洲迄陸行、漸々昨十八日帰京仕候、然処当地も其後も大ニ変態之由、追々飛脚も被差立候由御座候間、御承知相成候半、長征も出来候丈ニ無之、今一応見込相付候様

朝廷より武辺へ被仰出候由、是も致方なき所より内々願出候半、朝ニ変シ夕ニ替り、紛々擾々可笑事ニ御座候、

尤四国辺ニ而承候得は、迎も此節ハ人数差出間敷、松根なども申居候、芸州も余程長州を助け候者多候由、肥後

さへも不容易企と申儀、髓ニ不相分候へは、不繰出所ニ

政府ハ治定相成居候由、阿州も君公ト世子と兩立、藩中

ニも様々之由、土州も役人中ハ一定之由候得共、下ハ混

雑之様子ニ而容堂公ニ茂御込り之由、長征ハ迎茂出来候

丈ニ無之、右之通

朝命も相下り候付、尾老公張出シと申場ニ至りそふな事

と推察仕居り候、永井主水も被用候由、どふか向も相替

り可申、大久保越州ハ弥病氣ニ而引入候由、

右形行為可申上如此御座候、以上、

十月十九日

吉井幸輔(友志)

養田伝兵衛殿

西郷吉之助殿

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第七〇〇号

文書ト同文ナリ

文書原寸 縦一七・八種 横二六三・七種

二〇七 市来六左衛門ヨリ長崎伊地知壯之丞へ

久光公機密ノ諭示、モンブラン迎船ノ件

尚々、^(欠)昨春請願之達一条、町田民部殿より承儀

有之、汾陽氏より尚又貴君江間越可相成候付、よろ

敷御吟味可被下候、

汾陽氏鳥渡帰国、崎陽出帆之ときは、御着無之候よし、

定而御約条之通、口之津ニも被遊御罷帰候筈、浦山敷

奉存候、黒田氏御地江立寄之賦候処、山川より順風不

順、貴浦乗船東目廻行相成、同人江相託置候書面等差

返相成候付、別封其仮差上候間、御推覧可被下候、

一極密申上候、「時機致変遷於不可処は、必不可施事、

「兼而被定置候通、

勅定致奉戴、名義を正して、輕拳無謀ニ不可論事、「

極密御事は、于後頭之形勢ニ付、尚深密可遂評議事、

右黒田嘉右衛門より申付置候事、

右之通

御奉書持参上京被致候、同日又外ニ

御筆仰渡有之、自然外々より可申参、相略シ申候、

一汾陽氏金子壹万両丈積金之儀、兼而申上相成候付、同

人出崎之節は差送候様可仕候、尤

右衛門様よりも申上置候、新を以繰替之賦、万一急キ

候節は、札方之金を繰替差遣待及可申候、

一華倉トル一条、当分集成館ニ而、形の器械方ニ而錢製

造中御座候、○は細密に能く似候模様ニ御座候、本田

・い地知氏等相極差はまり満悦ニ御座候、地金之処、

少シニ而も御肝煎被下度、二印之足シニもいたす賦、

「○現之新敷銀錢を御入手可被下候、

一坂元二郎右衛門地金一条、頓着可申義迄もいたし候へ

とも、長崎いまた何分不相分よし、見聞役殿江御達之

上了非急々罷成儀如何計申可被下候、地金無他事差行

候付事明分と奉存候、

一 鬼塚米千五百石之株御当地より差廻候而、金作之趣向

を前以御間合申上候而已御座候、則御勘考可被下候、

一 右積廻は大和船之方可然哉、肥前迄蒸気船当分は、六

ヶ敷哉と存申候、

一 三邦丸七日計之修覆にて、兎や角浮立候由、屋久島江

帆柱切汐繫候、大平次砂唐積船引出し候賦に御座候、

一 白山(モンブラン)一列御当地廻候事相決候ハ、早々為御知可被下

候、居住所手当は勿論、三邦丸を迎船ニ遣候筋ニ御座

候、右衛門殿より右迎船之儀、汾陽氏承知ニ御座候、

是以同人より申越可被成候、

右荒々諸所より早通候、相認得御意候、岩下家・岸

良等江も急度御申可被下候、以上、

十月廿

文書原寸 縦一六・七種 横二二二種

い地知大君

市来六左衛門

一四〇 土岐新兵衛小倉ヨリノ報告

幕、長、筑前等ノ情况

慶応元年十月晦日

土岐新兵衛小倉ヨリノ報告

一 永井主水正等広島ニ向ハントス、
(尚志)

一 一橋慶喜將軍之輔佐役ヲ拜命ス、

一 板倉侯老中復職之筈ナルモ未ダ御請ニ至ラズ、
(勘辨)

一 筑前藩ニ於テハ月形洗蔵等十六人ヲ死罪、加藤司書等

十八人ニ切腹ヲ命ズ、

文書原寸 縦二八種 横二〇種

一四〇 川上助八郎ヨリノ伺書手扣

安田轍蔵鑄銭ノ件

(包紙ウツ書)
一手扣

一 先度安田轍蔵儀ニ付奉言上趣御座候処、只今迄為何

御沙汰も不奉承知、就而は決而

御深慮可被遊御座儀と奉存、乍其上主々奉願儀何共恐

入不届之至奉存候得共、公边彼是之御所置振り等乍恐
寛大過候様、私共ニ至り相考居申候処、追々遙聞仕候
儀、前以轍蔵申聞候儀と不思議ニ相当り驚愕仕事も不
少候、

一 轍蔵申上候本法之經濟之道 御採用相成候ハ、御富
国相成、且窮士御救助等之一条何様共法ハ相立可申候、
或ハ他国ニ掛候儀ニ而茂又ハ御自国迄之法ニ而茂いか
様とも

御沙汰次第言上仕度と兼々承申候、

一 鑄錢御製造ハ勿論、御国産物之儀迄も今形被召置候而
ハ 公儀之籌策ニ陥り、看々御国家疲弊相及儀、眼前
御座候半と申事ニ御座候、

一天保通宝製造諸国江御免可相成との事前以承居候処、
既ニ仙台江も御免相成候哉ニ承申候、尤大坂表并長崎
江も追々製造相初り可申、是以公边深謀有之事と申聞
申候処、大坂表ニは最早鑄錢相初り候由、是又伝聞仕
候、

文書原寸 縦 一八・一種 包紙原寸 縦二六・二種

横 一〇八・七種 横 一八・八種

二四〇 有村壯一川上助八郎ノ屋久島制度改革建

白書及安田轍蔵ノ意見書

(表紙)
上

一四一〇ノ一

一 国家安危之道路、人心動静ノ起元ヲ究考スルニ他ナシ、
仁義元トナリ、慈愛使トナリ国民ヲ誘道スレハ、其国
必有義、々々而忠ナキモノ稀ナリ、国民忠有テ君信ア
リ、上下和シテ各其業ヲ楽ミ、如是シテ豊国静業ナラ
サル事ナシ、タトヘハ今物価シキリニ登貴シ究極ノ場
ニ至ル、将ニ国民途炭ニ苦ムヘキニ反テ榮勢ヲ現スハ
何ソ、是宝貨ノ位価賤々下落スルニアリ、然ハ此時ニ
アタリテ此国ニ産出スル品ルヒヲ価賤シテ買ヒ、他邦
ヨリ買入ル万品ヲ高貴ナラシムレハ茲民如何シテ榮ト

福トヲ可受哉、不論シテ見然タリ、然ハ此島ニ産出スル品類ヲ下価強定シテ網利シ給フ共、万品ヲ売給フニハ天然之相場ヲ以売給ヘハ、茲民ハ飢餓ノ民トナリ、此島ハ無人ノ界トナランカ、抑死ヲ恐ル、ヲ以權行レ生ヲ捨レハ權スタルモノ也、於茲臣アリ、上ミ究乏ニ苦ミ給フ、下ハ飢餓ニ望ントス、是ヲ見ニ恐然トシ、コレヲ視テ慙然トス、斷腸シテ止ス、苦困五味ヲ忘ルニ至ルト雖モ策ナシ、(磨滅、依也)□テ困苦苦心シテ反復無度、籌策ヲ求ルニ漸ク一策ヲ得タリ、此策無他、是ヲ捨ルトモ人賞セス、是ヲ得ルトモ人譏ラス、其策左ニ

一仁義ノ二字ヲ表目トシテ、今日慈愛之二字ヲ使トシテ僕エ当島ノ政務ヲ司ラセ給フニヨリ、島内ノ百姓ヲ愛憐シテ救助ノ道ヲ開キ度思念スル処、其法胸裏ニ滿テアリト雖モ

公命ノ難有而已ヲ島内エ滿布セシメテモ又
公庫ニ財貨ノ枯竭スルヲ薄々遙聞シテハ、臣トシテ
忍ヒサルノ場モアリ、去ナカラ網利ノ罪ヲ上

君エ負セ奉リテハ、又臣トシテ不忍之場也、依之千思百念スルニ、今御邦内ニ琉球通宝ノ文字書損ノ品モアル由ヲ聞テ、吾胸裏ニ一念発起セリ、其訳ハ本行云フ所ノ如ク、是今一ヶ所ノ製造所ヲ此島エ起立シテ、残ラス書損ノ当百ヲ製シ、此利益ヲ以吾愛民ノ産物ヲ別紙ノ通りニ令シテ買ヒ給エハ、吾民ハ忽潤色ヲ現スノミナラス、迷利ノ罪人モコレナク、官ニモ一ヶ年拾万兩余ノ大利ヲ此小島ニ得給フ故、此儀ヲ思念スル也、

一此法ヲコノ島ニ起立シ給フニハ尤深意アリ、轍藏始琉球通宝ヲ

公儀エ表申シテ官許ヲ得シ時、官長轍藏エ命アリシニハ、琉球通宝ノ形、天保通宝当百錢ニ同ウシテ、又目方金組モ相似リ、依之甚マキラワシ品ナリ、後世必多分ニ文字ノ不変ヤウニ至極念ヲ可入ト、
主人并重役エ可申トノ命アリシ由聞処ナリ、於茲窃ニ愚考スレハ、多分ニ文字不変ハ少シノ儀ハ許ストノ言路開ケ可有之ト思念スルナリ、モシ左ヤウアル時ハ是

ヲ不製造モ尚セシ如ク思ハレテハ甚残念ナレ共、是ヲ防ク法ナシ、サレハ方今ノ形勢ニテハ可製ヤト思フ也、乍去琉球通宝ノ天下通用可相成ヤウ諸国エ

公儀ヨリ御触於有之ハ公然トシテ、書損ノ如キマキラワシキ不公平ノ製造ハナサス、現事免許ヲ得シ琉球通宝ヲ製造スベシ、是止ヲ得サレバ也、

一 弥字替リノ鑄錢起立シ給フニハ、其法委シク解トイエ共、專要スル処ハ銅地金也、此儀ハ深ク轍藏エ尋究セシニ随分可集策アリ、其次專要スル処金グミナリ、此法僕等伝受セリ、可秘々々トノ事ナリ、依之銅ノ買入ト鑄錢ノカネグミハ心裏ニ記念セリ、

一 扱製造ナリシ錢貨ヲハ、吾愛民エ吾愛兒ニ花ヲ玩弄セシメル如ク別紙

公令ノ趣ヲ以、飽マテニ授与セハ、其錢貨ヲ以万品ヲ買モノナリ、サレハ都テ品物を売給フニハ必ス現錢サシ替ニテ売給ヒ、モシ錢ナキ者エハ何程ニテモ貸シ給フヘシ、尤一伍々々ヲ以テ錢貨貸付、帳面拵へ給フヘ

シ、且又利分ノ儀ハ三朱ノ利足ト定メ給フヘシ、其利足錢ハ三割一分ハ病民藥料ニ下サルヘキ也、二分ハ兒共養育料ニ下サルヘキナリ、扱右ノ錢貨幾度ニテモ出入ナサシメ、程能垢ツキタル時蓄藏シ給ヒ、他邦エ持行テ万品ヲ買給ヘハ甚妙ナリト思フ也、

但飽マテニ此錢貨ヲ吾愛民ニ渡ス雖モ、此島ヨリ外エハ偷出セサルヤウノ嚴令ヲセサセ給フベシ、

以上、

一四一〇ノ二

一 前件鑄錢ノ策御国律ニ不叶シテ行レサル時ハ、是ヲ要スルニ仁義ヲ以テ根本トナシ、慈愛ヲ以テ枝葉トナシ、照々タル君徳ヲ以テ吾愛民ヲ按撫シ、頻リニ島内脂膏ヲ増シ、吾愛民ニ潤色ヲ現シ、天地ト共ニ君恩ノ難有事ヲ仰拵シテ、心神ニ銘録シ、寸時モ忘ルコト不能ノ機会ニ至ラシメントス、於茲僕等任ニタエタルノ策(頭註ニアリ)「慶年實定則法」ヲ起立シ、是ヲ一楮ニ記シテ以テ本府ノ同僚エ告示セントスレトモ、尚僕等ノ愚心ニイサ、カ不叶処アリ、

抑不遇ノ基根ヲ尋究スレハ他ニアラス、方今ノ世態財貨要用眉ヲ焼ノ時節ニアタリテ 公庫ノ空キヲカヘリミス、一向僕等ノ任ニアタルト雖モ照々タル 君徳ニ光輝ヲ増益シ、吾愛民ヲシテ恩沢ニ浴シ、盛ニ報國ノ念ヲ逞シ、荒原無穀ノ地ヲシテ好田有穀ノ地トナサシメントスルハ、偏ニ富國安民ノ策ニシテ尤勉強スヘキ事ナレトモ、実ニ治乱ノ徑界切迫ノ枢機ヲ弁別シテ公用闕欠ノ場ヲ勘考ニ及ヒ、憂苦スルカ故ニ愚心ノ不遇ノ基根トナルナリ、然リト雖モ下民ノ脂膏ヲムサボリ、聚斂網利ノ危論苛風ノ酷法ハ臣等死ス共セサル処ニシテ別ニ公平ノ策ヲ求ム、於茲類リニ思念スルハ公命一度ヒ出テハ容易ニ不変事ヲ庶幾ス、故ニ一タン鯨節三拾五貫文ヲ以、定価ト立給ヒ、今又俄ニ民苦ヲ見ルニ不忍、規則ヲ変革シ給フコト無此上仁助ト言フヘケレトモ、今少々ノ定価ヲ増加シ給フトテ、矢張五十歩百歩ノ論ニシテ至極ノ公平ト言フヘケンヤ、又下民ヨリ買入給フニハ定価アリ、官ヨリ売給フニハ定価

ナシ、此競の死物ヲ以活物ニ引当給フ共、自然ニ民心ニ不叶シテ民苦ハ不除モノ也、是僕等ノ悦サル処ナリ、依之千思万憶シテ長ク遺憾ナキノ籌策ヲ求テ漸ク一法ヲ得タリ、是ヲ鼎足ノ策ト云、其法当島ノ良杉一木ヲ除キ都テ僕等エ全權委任シ給エハ、早速正金ヲ以前年上納ニシテ、今年ヨリ始、永久年々老万両宛無相違上納シテ、尚又其上唯今マテ島人エ貸付給ヒシ品物代錢ハ、島人ヨリハ迷惑ナラサルヤウ永久ニ僕等方エ濟セ方イタサセ、官エハ僕等才覚ヲ以速ニ唯今返上納スルナリ、扱其法ノ枢要ハ左ニ、

一 鯨節拾貫目ヲ以テ錢三拾五貫文ト定給フニヨリ、其定価ヲ以テ買入、右鯨ブシヲ大阪表、又ハ江戸表エ積廻シ天然ノ相場ヲ以売払エハ何程力定価ヨリ登貴スルニ、其定価ヨリ高貴シテ売シ直成ヲ三ツニ割、其一ハ公庫ニ入レ給フベシ、其一ハ当島百姓エ給フヘシ、其一ハ右御救助ニ付前年上納ノ金子、其外当シマ百姓トリ続ニ相成ル品物代、其他都テ入用差出サセシ金主方エ

給フヘシ、尤右金主ハ大坂表、江戸表ニテ僕等周旋シテ拵ル也、

一当シマ内金銭相場ノ儀、江戸表同断イタサセ度事、

如是ナラサレハ、俄ニ物価下落イタサスヘキコト難キ故也、巨細ハ口上ニテ申述サレバ此条解シカタシ、尤当島内丈ケハ正金銭而已通用イタサセ度モノ也、此条都テ口授ニアラスンバ解セス、

一前点ノ儀ハ此セツ本府ニヲヒテ、半朱当百錢ヲ以テ私通用ニ正金ト交換スレハ、拾四貫文又ハ拾五貫文ヲ以金老兩ト成ル由ヲキク、於茲江戸相場トスレハ金六拾目通用ナリ、錢ハ六貫何百文ニテ金老兩トナルナリ、然ル時ハ大坂表ニテハ、当時金老兩代銀百目之上ナル由ナリ、尤錢ハ老貫文ニテ拾六匁ノ由ナリ、右ニツキタトヘバ於大坂表、金老兩百目相場トシテ、米一石銀三百目ナリ、於当島、其米一石百八拾目トナルナリ、本府大錢半朱ヲ以テ銀ニシテ正金ト交換シタル積リテ見レハ、其米一石ニツキ四百二拾九匁トナル也、此見

積リヲ以勘考スレハ、唱号トハ云ヒナカラ物価下落ナサシメ、下民救助ノ場ニイタリテハ島内ノミ前文ノ通ナシタキモノ也、

以上、

一四一〇ノ三

一磯年貢定則法ノ例アマタ有之ト雖モ、其方凡三法ニ限リシモノ也、其一ハ人口ヲ以是カ起元トナシ、其二ハ門役ヲ以元トス、其三ニ至リテハ旧来所持スル処ノ石高ト、其村々々ニテ旧来唱來スル家格ト貧富トヲ合シテ、磯年貢ノ甲乙ヲナスモノ也、然ル時ハ於此島ハ、第二第三ノ法ハ不用ナリ、唯人口ト用夫ヲ以根元トナスベシ、然ル時ハ此島今一切ノ年貢千二百石トスル時ハ、田畑山林石高三分一ヲ以、磯年貢ノ常例トナスヘケレ共、左ニテハ漸四百石トナルナリ、此石三物成トシテ、現米百三拾三石三々——トナル、右ニテハアマリ微少ナルニヨリ、例外ナレ共本石ニヨリ千貳百石トスヘシ、サレバ三物成ニシテ現四百石ナリ、扱是ヲ定

価ヲ立テ、現米一石金三兩トナスベシ、然バ千貳百兩ニ成ル也、右ニテ宜ト思念スレ共何分例外ノ事ニテハ公平ナラス、於茲能々勘考スル処、左ノ通ニスレハ何ヤウ議論スルトモ重税ヲ省キ、至輕ノ年貢ヲ捨テ中ヲトリテ如此スレバ天地ノ間少モ恥ルコトナシ、庶幾ハ左ノ通ナシタキモノ也、

鯉船一艘之賦

一 沖冥加 錢三十拾貫文

一 雜鯉場年貢 同貳拾貫文

一 磯年貢 同貳拾貫文

是ハ男女共用夫ニ係ル例也、

此三ヶ条ハ地方漁船、ナラヒニ他所船此島エ来リ漁獵イタシ、又ハ仮住居獵方イタス節ハ、相對ノ出錢カ又釣揚ケ高魚ヲ以ナリ、示談ノ上相当ニ島人エ出シ方イタスヘキ事、

一 船年貢 同貳拾貫文

櫓立石高ヲ以年貢イタスヘキ処、格別ノ

御仁慈ヲ以、無其儀刻目手ニ構ヒナク右之通、

但 網持船持刻目手都テ諸年貢

半人賦ヒタルヘキ事、尤一人目手ニ付、

一 網取付伝間 錢五貫文

一 網千年貢 同三貫文

以上、

一四一〇ノ四

一 前件ノ鑄錢鼎足ノ兩条モ不行、磯年貢定則法ノ公平ナル実ニ於天地間神人ニ對シ毫モ可辱コトナキ策ナリトイヘ共、不行シテ画餅トナル時ハ唯々トシテ身退クニシカズト雖モ、仰テ国家ノ形勢ヲ察シ、拊^(撫)テ愛民ノ苦身ヲ視ルニ、飽食シテ安偷ノ罪ヲ負ヒ、空シク光陰ヲ送ルモ実ニ千年ノ遺恨ナリ、於茲困々汲々トシテ苦神シ熟考スル所、吾愛民モト鯉ヲ以米・豆・塩・綿ニ至ルマテ都テ万要ヲ調用ス、然処鯉ブシニ定価アリ、万品ニ定価ナシ、賤価ノ定価ヲ以、無窮登貴ノ万品ヲ調達

スルカ故ニ 公借ノ高登日々夜々ニ揚々トシテ無止、

依之別ニ冬農間十月ヨリ出持シテ、三ヶ月ノ間ニ男用

夫老人ニ付現米式石三斗九升ノ産ヲ生ルノ法也、抑此

法ノ深意ニ於ケルヤ、冬農間ニ一ケ年ノ食ヲ得テ、夏

漁獵シ、タトヘバ賤価定料ノ鯉節ニテモ、塩・豆・油

・綿ノ要用ヲ調求スル時ハ自然ニ 公借飛揚セサル事

ハ不諭シテ現然タリ、是ガ丹心ナリ、其法方ノ矩則ハ

左ニ、

一男用夫一人ニツキ日數百二拾三日、一日ニ付平均雜木

丈ケ六尺ニシテ沓坪半代トリ、此中エ女用夫右助ニ加

へ、釜迄ニシテ其坪男一人ニ付三百七坪半炭トナシ、

一日六貫目俵四俵、右日數ニシテ四百九拾二俵、此代

大坂私沓俵六百文トシテ、式百九拾五貫二百文ト成ル

也、

一大坂表金沓兩代銀百五匁位トシテ、錢沓貫文ニツキ代

銀拾六匁位トスレハ、金一兩代錢六貫五百六拾文ナリ、

一此錢二百九拾五貫二百文代金四拾四兩三步三朱ト錢三

百一文九字ヨ、コノ用夫千三百五人ニテ錢三拾八万五

千二百三拾六貫文トナル、又金トシテ五万八千七百式

兩二部二朱ト大坂錢二拾二文余トナル、

一御国元市中相場正金一兩ニ付、拾四貫五百文錢トスレ

ハ、右代錢八拾五万千八百八拾八貫六拾文ト大坂錢二拾

二文余トナル、

一御国米御国相場ヲ以、見込沓石六拾貫文トシテ男用夫

一人ニ付式石三斗九升ヲ千三百五人ニアタへ、此米三

千百拾八石九斗五升ト成ル、此代錢拾八万七千三百拾

七貫文ナリ、右引ク、

一残テ錢六拾六万三千七百二拾三貫文ナリ、

一此内女用夫千人ト見テ、一人ニツキ米沓石五斗ヲ与エ

此米千五百石ナリ、右代錢九万貫文引、

一残テ五拾七万三千七百二拾三貫文ト成也、右内ヨリ俵

拵ニ持出シ貫一俵ニ付百三拾式文トシテ、惣俵六拾四

万式千六拾俵ニ掛レバ八万五千六百八貫文トナル、右

引、

一 残テ四拾八万八千百拾五貫文、

一 船運賃尅俵ニ付百三拾二文トシテ、此代八万五千六百

八貫トナル、右ヒク、

一 全ク残テ四拾万二千五百七貫文半朱ニテ、四万四千七

百二拾三兩、

一 右ノ内火役岡廻其外雜用見込五百兩、

一 残テ半朱四万四千貳百二拾三兩御益分、

一 此内島中病人、又ハ風雨釜損路損等ニテ不出来ヲ見込、

七千四百四拾八兩余引去テモ全クノ御益正金貳万兩也

一 前条半朱四万四千二百貳拾三兩正金トシテ、貳万七千

四百四拾八兩三步ト錢百二拾四文トナル也、

以上、

一四一〇ノ五

足下僕エ当島ノ儀ニ付、方今經濟ノ策ヲ可述トシキリニ
命アリト雖モ、僕ハ是幽居ノ身ニシテ国論ヲ述語スルコ
ト其恐レ甚ダ大ナレハ、敵ニ此事ハ僕ノアツカルコトニ
非レバ、足下ノ命ニ応シ難コトヲ頻ニ述レトモ、足下押

テ再三僕エ策ヲ可述ト云コトシキリナリ、於茲僕モ辞ス

ル事不能故、足下等ノ言語ノ起根ヲ述ルト雖モ、其实ハ

止ムヲ得サレバナリ、然リト雖モ国家ノ大事ナレバ都テ

僕ノ誠意ヲ吐ク、足下能是ヲ慮リテ、又足下等ノ誠意ヲ

吐給エ、吾誠意ハ第一鑄錢ノ策、第二鼎足之法、第三農

間持刻炭之法、此三策ノ外、工夫ヲ以其土地ニヨリ民情

ニ随ヒ、何程ニテモ^經徑濟ノ籌策ハ胸間ヨリ吐出スト雖モ、

諸人エ口述スル処ハ真实、自身ノ為スルトコロノ籌策ハ

伝授シガタシ、其儀惡意ヲ以テ策ヲ惜ムニアラス、此処

能々勘弁シテ聞給ヘ、何事ヲナスニモ始ヨリ終リニ至ル

マテ故障ト差支ト無之大尾ニ至ルコトハ極テマレナリ、

其サシ支ト故障トノ処ニテ礎ト行ツマルモノ也、於茲ニ

諺ニ言フアゲ焼酎トヤラニテ、未前ニ如何成サツツカヘ

ト、イカナル故障ト出来スルモノト言フ事コトノク見

通ス事ハ成リ難キモノ也、其証処トスル処、眼前ニシレ

タル琉球通宝ノ策ヲ見ヨ、僕ノ苦神ヲ以テ官許シテ其功

ヲ奏スル事ナラサルヲ遺憾トセサレトモ、今日ノ如キ拙

策トナリ、此上ニモナキ御国害トナリシヲ以テ知ルベシ、其儀ハ冥々蒙々ノ中筆不能書、舌不能述、不可言不可書人、海之波浪風雨順逆之中、世味之辛苦、人情之好悪ニテ此国害ヲ生セリ、是等ノ儀ハ苦神困勞セシ、僕ノ忠恕ノ不忠トナルト云コト見通シナラサル也、サスレバ後來ノ未前モ我ニハ見得サル故、成丈ケ後害ノ生セザルヲ以元トスル故、恐然トシテ、其機転引縮シテ不延、此故ニ前ハ磯年貢定則法ノ公平ナルニシカス、君等能ク慮リテ弁別シ、此策ヲ以テ君ノ愛民ヲ安堵セシメ、早ク島律ヲ定メ罪人ノ出来サルヤウニナシ給フヘシ、

冊子原寸 縦二七糎 横二〇糎 一四枚

一四一〇ノ六

近來物価頻ニ高貴してやまず、諸民困窮之趣不便ニ被思召、深被為遊 御苦心、何卒困苦之程を被為遊 御救助度被為 思召候得共、莫太之御入価差湊不一方被

為遊 御出金候折柄之儀ニ而、何分不被為叶 思召候故、猶亦深歎キ被 思召候、全体不限御当地、地方之儀は諸国江も地統ニ而手広にも候故、身分相応ニ才覚を以渡世之持方も可有之筈候得共、海外之島許ニおひてハ産物之品物は数少儀ニ而、万物都而地方より買下不申候而は不相叶儀ニ付、右様物価致高貴候而は、島内間狭之儀ニ付、外ニ才覚之いたし方も無之候故、不一方難渋可致段格別不便ニ被 思召、此度島人為御救助諸産物御当地ニおひて落札より式割高ニ御買上被下置候間、御仁慈之程難有頂戴仕、御国恩忘却不仕候様、在番屋久島奉行より島中江被相達度もの也、

文書原寸 縦一六・五糎 横五五・五糎

二四二 久光公ヨリ山階宮ヘノ答書草案

撰海異舶之件

去月八日之尊書難有謹而拝見仕候、追日寒冷之砌、益(字欠)候、扱方今之形勢且御機密之件々細詳被仰下候

趣奉承知、驚駭歎息之次第奉存候、皇国之御為折角心を尽し、傍観は不仕義御座候得共、何分機會ニ至リ不申候哉、十分之一も相整不申、尊慮之程恐入奉存候、仁門之御事ハ差含罷居申候間、御安慮被成下度奉存候、且今般撰海異舶之一事、実以不容易形勢罷成、幕府之姦謀可惡之甚敷、切齒之至奉存候、就而迅速上京仕筈御座候得共、當時之処却而 朝廷之御難題を醸出候も難計御座候間、先小松・西郷之兩人差出、其之御地之形勢申越次第、発途之含ニ御座候間、不悪思召被下度奉伏願候、尚細事高崎江申含置候間、御聞取奉願候

(以下欠)

十一日

再白、御機密之儀他言仕不申候間御安慮被下度奉願候、備後ニも先度御暇被仰付、別而難有奉存候、殊ニ凶書迄も不容易御品、天賜被仰付誠以恐入難有仕合奉存候、滞京中は種々御懇命被仰下重疊難有奉存候、御礼申上候、

文書原寸 縦一六・七糎 横三二・八糎

二三 条約勅許ノ件

但兵庫ハ不許可

此度兵庫江異船渡来ニ付、昨四日大樹より一橋中納言・

(容保)

(定敬)

(長行)

松平肥後守・松平越中守・小笠原孝岐守等を以て段々遮

而言上之次第有之、徹夜到今晚追々議論、今日諸藩をも

被為召御諮問之処、十二八九御許容ニ而も可然旨、衆説

暗合誠不被為得止、別紙之通被

仰出候事、

条約之儀

御許容被為在候間、至当之所置可致候事、

大樹江

別紙之通被

仰出候、就而は是迄之条約面品々不都合之廉有之、不応

叡慮候間、更ニ遂評議可伺出事、尤諸藩御召之上衆議被

聞召上御決定候事、

但兵庫之儀は被差留候、

文書原寸 縦一六糎 横八〇・八糎

一四三 石垣銳之助ヨリ桂右衛門へ

英仏蘭見学ノ必要ヲ報ス 写真一葉入

(封筒ウツ書)

「桂右衛門殿

石垣銳之助」

乍不敬文略、我々列、去ル二日夜四時分仏地相立、明六前ロントン之様ニ着、然処又々十三日比よりメンテエストンと云所江往キ、一七日計之賦ニ而参候筈ニ御座候、夫より罷帰リ十四五日之滞在ニも候半、直ニ英地出立帰帆之趣有之賦ニ御座候、是迄折角差急き候へ共、存之外ニ隙取何共心外之至候、乍然是も決而不都合之向きニ而不進共之訳ニ而は曾而、(無之脱カ)実ニ何欤と不謀御都合向有之かたニ候、何事も巨細ニ相認メ御同慶を顕度は山々候へ共、何分懸け隔り、紙上ニ尽かたく、何も帰着ニ相揃置申候、儲心内近々存慮之趣承り、且貴君江呈札之草稿も時々見せ申候、何事も御心得之一端ニも候半と存、折角進メ置申上候、儲又英国より各国江密談之趣は、決而磋商知所ニ御座候間、此儀は無御疑も御座候間、可被承度

此地もケ様之儀は存知之者要路之向而已、夫も多人数は沖而も有間敷候、不遠兵庫開港も近寄候、是が期限欤と存申候、○儲西洋参り、何も差而困入廉も無御座候由候、唯々通弁計ニ御座候、アジャより英国迄は英語ニ而十分御座候へ共、ヨーロッパ諸州、何れも仏語ニ無之而は何も相分不申候、実ニ英仏とは能云たるものと今更現事ニ感心罷在候、夫故先度も相認申候通、よき通弁者御座候之所、当時之大急務と存申候、慶以来諸生遙行杯は能々御評議所欤、小子初メ年輩之向き、多人数之かた宜之尋罷在候処、ケ様ニ無哉と申候へは、誠ニ案外之事共不少、現事ニ旁見聞ニ及候へは、民衆も大苦心配、必竟多人数ニ而夫々年輩之向き故と而已、此儀は実ニ意味有る事ニ而、紙上ニは尽かたく御座候、夫よりは、要路人は基より公子初メ御見置之為メ、遙航肝要ニ候半、外ニは何も望ミ無之候、唯英仏之二ヶ国一見ニ而宜候、乍然是迄蘭説も相行れ来申候間、是は見置第一申候、此三ヶ国ニ而何も現実相分り申候、蘭国此節は一見、実ニ承候如く水

底の国ニ而、都而土手を築き廻し、海水ヲ防ぎ居、引塩成海開き候、満汐之時分、地面より遙欵ニ海水高く、夫故都而田地之如く水計、先田地はアゼ人路ニ同し、夫故多く堀を通シ川水ヲ流候、其堀決而流候事無候故、クサレ土ヲ取上ケ、日ニ乾し、是ヲ以炭ニ用候、ケ様成所も有之申候、実々驚入候、乍然貿易は誠ニ盛、是計ニ而今日之生業も出来申候半、何欵と相認度事も余り長く罷成申候、先筆ヲ止ノ候二月中ニはと、拝顔旁可申上候、謹言、

我十一月八日

(桂久武)
螻蛄君

文書原寸 縦一三種 横二二種



吉田巳ニ写真一枚
一寸入御覽候、相
揃何れ勉強 近々
昇進之由 拝啓上

写真原寸 縦一〇・二種 封筒原寸 縦一二種
横六・二種 横七・五種

一三四 京都大久保一蔵ヨリ在国御側役へ 合三通
公卿堂上進退將軍上洛及長州ノ件其他

免 賀茂下上社伝奏 柳原 中納言様 (光愛)

同 賀茂下上社奉行 甘露寺頭左中弁様 (勝長)

為 賀茂下上社伝奏 六条 中納言様 (有密)

同 賀茂下上社奉行 清閑寺頭右大弁様 (豊厚)

尾州様より
一謹而奉言上候、織瀬隼人正暫待御暇給為代家老千賀与 (信立)
八郎、上京為仕置候処、今度大樹依 命其同儀登京仕、猶
又下坂仕候付而は用向都合候付、与八郎事大坂表ニ差
下候様仕度、代人之儀は不被為差登候様可仕候間、先
此段御聞置被成下候様仕度御届奉申上候、誠恐誠惶頓
首敬白、

六月 前大納言慶勝上(徳川)

一 六月十一日為伺暑中、松平飛驒守様御参 内候事、

右

下立亮御門固メ被免、仙台様(伊達藩邦)・藤堂様被 仰付候事、

一 松平式部大輔様昨廿三日為伺天氣御参 内、直様伏見

江被成御下候事、

一 内侍所ニ以来年々七百俵ツ、被付候事、

但別貢獻十五万俵之内ヲ以取計相成候由、

右六月廿四日

一 久世前宰相様神掌祭廢典御再興御用掛り被仰出候事、

一 加賀中納言様御進発中御守衛一手可被仰付答之処、御

病氣付、御帰国御願之通御聞濟、為御代松平飛驒守様

暫之内御在京且御進発中重臣殘置、敲重御守衛御心得

被可成旨被 仰付候事、

一 溝口主膳(直徳)正様早々御上京秋中之御警衛可被成旨大坂表

より被 仰出候事、

一 七月四日加賀様御暇御参 内被 仰出候事、

任叙

正六位上 北小路
右衛門権大尉 俊長様

右六月廿八日元服昇殿

勅許

右七月二日

一 中川修理大夫様(久徳)猿ヶ辻御警衛人数交代之事、

一 酒井左衛門尉殿四品成(忠徳)

一 酒井河内守殿侍従成(忠徳)

右口 宣頂戴御使者上京来ル八日口 宣渡候事、

七月四日

一 日野大納言様御息女坊城右少弁様(資忠)昨夜御婚姻御整被

成候事、

一 三条西様(季忠)・倉橋様(泰祐)・八条様(盛祐)・慈光寺様御本宅地仮普請

出来被御引移候事、

一 酒井左衛門尉殿御家督後四品成、御礼未十七歳以下付、

先ツ御使者ヲ以

禁裏御所ニ御礼被仰上候事、

七月十三日

一大樹様御滞坂中為御尋

禁裏御所

親王御方

准后御方より御杉折一合ツ、被進候事、

一 橋様御屋敷小屋焼亡付、御差扣御伺之処、追々御平

穩御時節ニは候得共、御用多之折柄不及其儀との御沙

汰ニ候事、

一 御所近辺より炮発致し候者有之、近衛様殿舎へ焰玉

飛来候付、以来右様之儀決而無之様諸藩在京詰ニ触渡

候之儀、所司代へ被達候事、

一 坊城大納言様去廿日薨去、依之取次侍従様御定式通御

暇服之事、

七月廿四日

一来ル廿九日

内侍所御仮屋御神楽之事、

同日

一来月放生会八幡御参向方々、

上卿 庭田中納言様 (重胤)

参議 梅溪宰相中将様 (通善)

次将 難波少将様 (宗礼)

愛岩少将様 (通教)

弁 勘ヶ由小路弁様 (實生)

一 八朔関東御使在京高家

六角越前守様御勤之事、 (公孝)

献上

一 御馬

葛山鹿毛 六才

一 八朔在京諸侯御礼参 内被 仰出候事、

一会津侯来月一日大坂御出立御帰京之事、 (松平喜保)

七月晦日

一大樹様江 御所々より拝請物御礼六角越前守殿被相勤

候事、

八月七日

一從五位上藤原経子

叙

正五位下、

累年補佐、親子内親王今在關東爰罹重痾玆彼 内親
王孝心之厚被歎願候条、難被黙止以格別之御憐愍被
推叙、

右は、和宮様御服觀行院様御事、当時關東、

一權大納言

広橋

中納言様

叙
從四位下

中園

近江権介様

右八月九日 宣

一八月六日御所司代御下坂御出京之事、

当国山陵御修覆御出来之分為巡檢參向、

伏見泉桶寺・等持院・龍安寺・小北山村・大北山村・

蓮台寺村・大応寺・南禅寺・物集村・天龍寺等、

廿六日廿八日広橋大納言様、廿七日廿九日野宮中納言

様

右山陵奉行辺ニ而為

勅使御參向之事、

桂川様久世村地内ニて三貫目より十貫目迄大小炮打様
御伺濟、来廿七日廿八日雨天順延之由、

右一橋様より

灘華洞御既御取除、寺町広小路は柵内御取建之事、

一松平肥後守様警衛場所江月々二七之日、寺町御門より

大砲引出シ、同日夕刻引掃候事、

一觀行院様去十四日卒去付、和宮様御定式之通御忌服

被為受候事、

八月廿三日

一松平飛騨守様実母御死去、御忌中候得共御警衛ハ詰掛
り之者を以御勤之事、

一当冬三ヶ月詰御警衛上京迄松平飛騨守様可被成御心得

ニ而被 仰付候事、

一 撰津兵庫表へ今度夷船九艘碇舶、内老艘大坂表ニ乗込

候得共、速ニ退帆候様処置可為致旨其筋より申来候事、

一 小笠原老岐守様九月四日御老中格被 仰出候事、

八月廿五日

宣
清水谷
公正卿

一 權中納言

八月廿九日

一 参議
久世
通熙卿

近來多端之

御用精勤御格別之

思召被 還任、

一 桑原三位様八月廿七日薨去候事、

一 撰海異船渡来出願之儀付談判有之候、時宜ニ寄非常之

儀も難計候付、猶此上嚴重御警衛可致旨九門を始七口

其外夫々御達之由也、

九月廿七日

一 長防御処置之儀、此程被 仰出候趣も有之候付、

大樹様為御伺

天氣、九月十五日六半時前御供揃ニ而大坂御城御発途

ニ而伏見御一泊、同十六日二条御城御着之事、

一 大樹様九月廿一日酉半刻比御参 内、子半刻比 御退

出被遊候事、

但天盃・真御太刀・御陣羽織地三卷御頂戴之事、

一 大樹様九月廿三日朝五時比二条御城御発途御下坂候事

一 九月十七日二条御城ニ為

勅使武伝兩卿被行向候事、

一 御上洛為御歡撰家親王宮卿外清華大臣且諸家由緒有之

方々十七日二条御城ニ以御使被仰入候事、

一 十月朔日尾張玄同様大坂より御上京、二日小笠原老岐

守様御上京被成候事、

一 九月廿七日 宣

兼 久世

右近衛權中將 通熙卿

叙 中院 通富卿
正二位

同 勤ヶ由小路
從五位下 資承 六才

一諸藩被為 召候儀付、可否之御答、今日參 内ニ而言
上可仕管ニ御座候処、明日徳川玄同上京坂地之模様承
度肥後守・越中守一同伏見駅迄罷越、玄同ニ對話仕旁
前条申合、未相届兼候付、今日之御答何卒御猶予被成
下度、尤只今より兩人論定可仕奉存候、仍今日之參
内断申上候、

十月一日 一橋中納言

一宮門九門七口御警衛人数増殿重御警衛被 仰出候事、
一大樹様十月三日大坂御発途伏見駅御着、四日二条城被
為成候事、

一阿部豊後守様・松前伊豆守様
(正心) (樂広)

叡慮之趣被為

在候付、官位被 召上候、且於国元謹慎

御沙汰相待候様被 仰出候、依之加判列被差免在所へ
罷越、慎而罷在旨被申出候由、其筋より申来候事、

一御上洛供奉

井伊掃部守様

(久松勝成)
松平式部大輔様

(忠様)
酒井河内守様

前 九月十九日

大樹様江御内被為御尋

禁裏御所より

御杉折 卷合

御使 鳥山(吉昌)三河介

同親王御方より

御同断

御使 渡辺出雲守

准后御方より

御同断

御使

大原左近将監

一 凝華洞御旧地此度有栖川宮江為替地被下候付、御厩
後院後寺町通御柵内ニ引移御治建候事、

九月廿五日分

一 大樹公大坂御滞留之処、急速用向有之今日中ニも下坂
致し候様申来候、何分火急之儀ニ而難差延大事と相聞
得候間、唯今より発足仕候、尤留守中尚御地御警衛向
之儀は松平肥後守松平越中守厚申合置候、依之御届ニ
申上置候、以上、

九月廿五日

一 橋中納言

一 賜御暇候事、

但不過六日候事、

右之通九月廿五日夜一橋様ニ被相達候事、

一 橋様九月廿七日御帰京候事、

一 堀田相模守様三ヶ月詰為御警衛御上京、九月廿八日

云奏方江為御伺

天氣御出之事、

九月廿八日

宣

任

丹波権介

錦小路
頼言

右元服昇殿等

十月八日

宣

東久世
通暉

右元服昇殿等

十月六日持明院少将様卒去 被成候事、

十月一日

今般撰海江異船渡来付、名代ヲ以御伺

天氣之事、

松平越前守様家老
酒井外記

十月四日

大樹様

御所ニ被仰上置候趣も有之ニ付、昨三日大坂表御発

駕四日御上洛被為在候旨被 仰出候事、

右武辺より申来ル、

松平飛驒守様重役之者十月四日被 召呼、飛驒守様

在所江之御暇被下置、其上拝領物被 仰付、長之滯

京大儀

思召候得共、丹羽(長門)左京大夫様御上京迄御滯京被 仰

付候事、

一 撰海ニ異艦渡来、(徳川茂承)紀州様より橋本六郎左衛門ヲ以

天氣御伺被成候事、

十月六日

日之御前居置

一 南御門前御警衛

被差免候

一 朔平御門前御警衛

被差免候

一 朔平御門前御警衛

被仰付

一 南御門前同断

南部美濃守様御所勞付、

(利根)当冬詰御上京此度限御名代家

老ヲ以御勤被成度旨御願之処、御願通趣不無理儀候得

共、当節柄之儀付所勞儀相収、押而之上京可有之旨御

達之事、

一 毛利淡路・吉川監物出坂之儀兼而相達候処、若病氣ニ

而押而も難罷出節は毛利左京・毛利讚岐并大膳家老共

之内申合九月廿七日迄ニ大坂表江罷出候様松平安芸守

より通達為致候処、右期限相済候得共、未タ出坂之模

様無之候間、其筋より過日分而申来、

十月

一 松平肥後守事兼而政事向相談之儀被 仰出有之候処、

当今不容易時節ニ付、猶又厚申談無腹臆十分ニ取計候

様被 仰出候由、其筋より申来候、

一 大樹公御上洛付御上京方々之内、武備御出御届等方々

井伊掃部頭様

松平讚岐守様

松平式部大輔様

榊原式部大輔様

酒井河内守様

松平丹波守様

一 撰海異船渡来致碇泊居候処、応接相済、追々出帆、去十

日不殘致退帆候段、兵庫表より申越候旨申來候事、

十月

一大樹様此度格別被為蒙御寵命御受ハ被仰上候得共、何分不容易御時節ニ付、一橋中納言様御政務補翼之儀被仰出、別而十分之助力有之候様被 仰出候旨申來、

一 諸侯方被為召之儀暫時御延引之風説、

一 一橋中納言様從二位大納言御車寄より御昇殿、劍持參

於御廊下御休息等之事、

勅許

但御受否之儀未相分候事、

一 十月十五日小笠原孝岐守様四品成、

勅許濟之事、

一 飛鳥井少將殿江上杉彈正大弼様女縁組願之通り 公武

相濟候事、

十月十五日

一加茂臨時祭

勅使 小倉中將様

松平飛驒守様御暇被下候得共、丹羽様御上京迄御滯京被 仰出候処、左京大夫様御名方御上着比合も難相分、

撰海異船も追々退帆、其上深雪相成候ハ、旅行も被

成兼候時節ニ至り可申哉付、猶御願候処、御願候通、

此程異船も退帆、七ヶ月も相詰帰洛、深雪之処尤之儀

ニ付、御帰国可被成旨

御沙汰之事、

右十月十六日迄

一 松平周防守様去十六日加判列被 免候事、

一 松平大和守様被為

召候事、

一日之大納言様議奏加勢被 仰出候事、

一 一橋様從二位大納言之御辭退ニ相成候事、

但御政務輔翼御參

内之節御車寄より御昇降等之儀

御受候事、

坊城

右中弁

俊政

同
権右少弁

勤ヶ由小路
資生

任

右近衛権少将

醍醐
忠敬朝臣

叙

従四位下

広幡
忠朝

同

従五位上

徳大寺
公弘

辞

右中弁

万里小路
博房朝臣

同

右少弁

經理

右十月廿日

勅許

一板倉阿波守様伊賀守と御改名、去廿二日連判列被 仰

付和泉守殿次之旨候事、

一来十一月十五日

大原野祭 上卿広橋様

松平越中守様当今不容易時勢ニ付、政事向厚申談取計

候様被 仰出候事、

一丹波左京大夫様来ル、晦日御上京之事、

一松平三河守様より異船渡来付、家老ヲ以

天氣御伺之事、

一備前侯より右同断、

一紀州様より橋本六郎左衛門ヲ以右同断之事、

一大樹様廿七日申刻前御参

内、戌刻前

御退出相成候事、

一任 左少弁 葉室 長邦

同 右少弁 万里小路 通房

同 侍従 松本 宗順

叙 従四位上 長谷 美濃権介殿

同 従五位上 野宮 定允

同 同断 菊亭 脩季

同断

同断

十月廿七日 勅許

一一ヶ年詰高家六角侍(広泰)從御代り由良侍(貞時)從様御上京之事、

右十月廿八日迄、

文書原寸 縦一四・五極 横九〇四極

還任

参議

久世

通熙卿

近来多端之御用精勤以格別之

思召被還任、

八月廿九日 勅許

今朔日淀大橋河原おゐて昼夜五六発打揚有之候事、

一松平飛驒守様実母御死去、御忌中ニ候得共、御警衛請

掛者ヲ以其佩御勤之事、

一当冬三ヶ月詰御警衛方上京迄、松平飛驒守様御心得可

被成旨被 仰付候由、

一来ル七日酉刻

後院御鎮守正迂ニ付、吉田様より還幸之事、

九月朔日

一八月廿七日桑原三位様卒去之事、(頼基)

一十月

紀伊様江撰海異船渡来付、橋本六郎左衛門ヲ以伺

天氣之事、

一松平越前守様より同断付、酒井外記ヲ以御伺候事、

一日之御門前

加州候

同 朔平御門前

丹羽候

同 南御門前

堀田候

南部様御所勞付、此度限り以御名代三ヶ月御警衛被成

度旨御願之処、当節柄之儀付、御所勞相快、押而上京

之旨被 仰出候由、

一松平肥後守様兼而御政事向御相談之儀被 仰出有之候

処、当今不容易時節ニ付、猶又厚申談無腹臆十分ニ取

計候様被 仰出候由武辺より申来ル、

一毛利淡路・吉川監物出坂之儀兼而御達候処、若病氣ニ

而押而も罷出かたき節は、毛利左京・毛利讃岐并大膳

家老共之内申合、九月廿七日迄ニ大坂表罷出候様松平

安芸守より通達為致候処、右期限相済候得共、未タ出坂之模様無之候事、

但過日分之由ニ而武辺より申来候由、

十月八日

任

元丹波頼徳男
丹波権介 錦小路頼言

右九月廿八日元服昇殿等

勅許

元源本ノマ、通槽男、
東久世
通暉

右十月八日元服昇殿等勅許候事、

一持明院少将(基和)様去六日卒去被成候事、

一柳原中納言(光豊)様十月廿九日御差扣被 免候事、

一戸田大和守様(忠彦)

山陵御修復所へ御用御出役雜費多端之儀と被 思召、

格別之訳ヲ以金貳千両拜 領被致候事、

但從御所表也、

一大樹様十一月三日淀川御乗船御下坂之事、

一丹羽様昨日御上京之事、

但寺町今出川上ル本満寺旅宿之事、

右十一月一日

文書原寸 縦一四・五種 横一六一種

別紙式通之通御留守居より申出候間享取差越候付、達

御聴候儀共宜被取計候、左候而、右之内ニは先度申越候

様ニ可有之も難計候付、両度申越候も可有之候得共、夫

等之処は、宜御含可給此段申越候、

以上、

十一月十一日 大久保一藏

兩御丸

御側役衆

文書原寸 縦一四・五種 横四九種

二三 土持佐平太ノ報告

幕吏広島出張長州詰問ノ件

(端裏朱書)

乙丑十一月十一日

広島より

土持

萩様御家老井原主計・宍戸備後之介等登坂之賦ニ而、先

達而広島迄出浮、然処右備後之介中途より病氣差発、又

候延引罷成候一卷有之、先月廿九日付を以御届申上候通

ニ御座候処、同廿七日於京都小笠原老岐守殿より芸藩中

老野村帯刀御呼出ニ而、長藩登坂之儀は何分御沙汰有之

迄之間差扣候様被仰渡、左候而、別紙写之通被仰達趣有

之段、当月五日大坂表より飛脚致到着、翌六日芸侯番頭

黒田弥五左衛門・寺西盛登右為御使者萩表江被差越、い

また罷帰不申候得共、御達之旨大膳様御父子様(毛利敬親・広封)ニも被成

御承諾候て可有之哉、当所逗留備後之介并大津四郎右衛

門より申出候由、左候而、長藩追々出張、昨日萩様御側

用人木梨(箱原治人)右衛門、一頭奇兵隊廿四人程召列致参着候、

且大目付永井主水正・御目付戸川伴三郎(安堂)・松野孫八郎

從卒人数相、既去六日大坂発足相成、来ル十五日比広島差入

分不申候、之段被仰触、当所御城下町忒丁目筋ニ御宿割等有之、諸

事御手当向等混雜之形ニ相見得申候、右ニ就而は最初之

程長藩容易ニ出坂之方ニは御国論約兼候機会之処、専植

田乙次郎説得より弥被差登候筋ニ御評決相成、依之右主

計・備後之介等前段之通此表江出掛候場合之処、備後之

介病氣旁ニ付一応乙次郎浪華江罷登、彼表滞在右帯刀江

猶亦及計議、長国御所置振等内々

幕意奉伺度趣等有之哉ニ伝承任申候処、大目付衆御差下

シ相成、始終致変化、然は

幕役御下国ニ付而は深御趣意も御座候歟、且帯刀并乙次

郎等より打合致周旋候処より、右時機至り申候哉、其辺

之事件同人共帰国不仕候故巨細分兼、将当所政府方之者

段々行違ひ罷成、京撰表ニ而御廟議旁具ニ相分不申、併

不遠乙次郎等下着之筈御座候間、追而彼是之情実分明仕

可申哉、勿論

幕役御来着之上は自然御所置之実行相分可申儀と奉存候

一先当時之形行此段早々御届申上候、以上、

但

大樹公今以二条江御在城之由御座候処、近々

御参内被遊、夫より御閑下之御模様風説有之段、去

五日当所着大坂飛脚便より問越相成候段承得申候、

且先達而撰海江渡来之外夷艦始抹旁之儀は、当国よ

り遠路懸隔、其後夷情之程更ニ相分不申候得共、方

今京撰表、先平穩之形ニ取沙汰御座候、将又長国ニ

おひても暴徒御鎮撫行届き、当時諸隊之折合宜敷形

ニ而、過激之異論等何そ承得候儀無御座候、此儀も

御見合之端ニ不取敢申上候、以上、

丑十一月十一日

芸州
広島滞在(綱幸)
土持佐平太

奥掛
書役衆

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第七一三号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・五種 横一九七種

一四六 土持佐平太広島ヨリノ報告

永井主水正等広島へ出張ノ件

(端裏朱書)
「乙丑十一月十一日」

先月廿七日於京都芸州中老野村帯刀江小笠原老岐守殿

より被相渡候御書付之写

(浅野長副)
松平安芸守江

一毛利大膳父子伏罪之儀、御疑惑之廉々有之候付、右為御

糺、大目付永井主水正・御目付戸川伴三郎・松野孫八

郎、陸地其地江被差遣候間、最前相達候通、末家并家

老等之内、且寄兵諸隊中重立候者も三四人、十一月を

限、広島表江罷出候様大膳江可被相達候、尤自然末家

并家老共同所江罷出居候は大目付御目付到着迄差留可

被置候、

十月

右付安芸守様より大膳様江御使者を以被仰越候御口上

之写、左之通、

一先日廿七日於京都家来共一人、小笠原老岐守殿より御

呼出ニ而、別紙之通御達有之候而相達候、依而以使者

申達候、

十一月五日

右之通御座候、以上、

十一月十一日

文書原寸 縦一五・五種 横九五・五種

一四七 西郷吉之助ヨリ蓼田伝兵衛へ

長州再征ノ件

(包紙ウツ書)
乙丑十一月十一日

蓼田伝兵衛殿 西郷吉之助

ノ

「

御両殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御義奉存候、陳ハ
守衛之人数御操出相成候処、大ニ勢ひを張、進退去就之
速なる処、出没不被計との趣大ニ申触らし、恐れをなし
候模様御座候、摂海異人之談判と申ものハ、余程奸計為
有之由ニ相聞かれ申候、表通兵庫開港之義ハ御差止と申
事故、是を絶切ニハいつれ三港丈ケハ御免し無之候而ハ、

迎も不相叶と申訳を以申立、内輪兵庫も異人とハ取究居
候由ニ被相窺ニ申候、其上港を開丈ケハ

勅許ニ相成、条約之義不宜廉も有之候付、衆評被 聞食
候上ニ、御所置可被遊との事ニ候得共、条約迎も取結候
趣と相聞かれ申候、皆跡事ニ相成次第、言語ニ絶し候訳
ニ御座候、一・会・桑之作略も皆崩立、天下之人心も相
離れ、無致方処より頻ニ会人此御邸江出て媚ひ候事共不
堪笑候、是迄幕府之術、強藩と申せハ直様嫌疑を掛、色
々之流言をはなち、内輪混雜を成さしめて、其虚ニ乘し、
甘言を以解破候手段ニ御座候処、今ヤ手術を失ひあきれ
果たる様子と被相聞申候、長征之事ニ付而も頓と策を失
ひ、永井主水正等(尚志)広島迄差遣、詰問ハ不相叶、伏罪致し
たるとの一言を為謂度との賦ニ而、段々媚を求め候様子
ニ御座候、一向宗寺之光西寺と坎申坊主ハ、長家江由緒
有之寺ニ而御座候処、是以橋・会より相頼伏罪いたした
るとの一言を申て呉候様相頼候由御座候へ共、坊主不肯
由ニ被相聞申候、此夏時分被召捕候長人赤根武人等之者

を永井ハ召列参たる由ニ被相聞申候、是等ハ至極幕中之
秘事と被相聞申候、実ニ危然たる向ニ而橋・会・桑困窮
之事ニ御座候由、いつれ

大樹公ニハ大坂より逃下り之模様と被相窺申候、橋・会
より

(二条藩致)

関白殿下江大坂より被罷下候方ニ申上候との説も有之事

ニ御座候、大坂ニおひても糧食も乏敷、当年中相支候義

も六ヶ敷、況ヤ西ニ兵を進め候義、万々無覚束事と被相

聞申候、攻口等之義各藩江通達相成候へ共、人数を操出

せと申義ハ無之、手数迄之計にて、退口之謀と被相察申

候、此上戦ヲ初出し候ハ、直様紛乱之勢ひ眼然ニ相見

得申候、幕府ニおひて摂海異人之談判ニ益不条理を顯し、

朝廷を欺き人心之憤怒を重ね、長征にて兵勢之衰をシ

条理を失ひ、且勢ひを失ひ候而ハ、如何之作略を用ひ候

而も不被行、如何なる智者ありとも引起候義ハ無覚束次

第三御座候間、此時ニ当りてハ理を尽して進ミ、勢ひを

詳ニして動へき事と奉存候、当分之処、一言発すれハ名

分大義を明ニし、義を以立、確乎として不動、諸藩を庄
倒いたし候姿も有之候付、変ニ入ル入らぬ之境肝要之場
合にて、至極謹慎を加へ評議を尽シ候事共ニ御座候、此
旨大略如此御座候、小説紛々ニ御座候得共、取ニ不足事
共ニ而文略仕申候、頓首、

西郷吉之助

十一月十一日

養田伝兵衛様

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第七二二号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・六種 横一九八・五種

江戸岩元太右衛門ヨリ天璋院付局へ

江戸藩邸奥女中帰国ノ件

去戌年御変革付被仰渡趣有之、(島津茂久)修理大夫縁女并養妹其外

厄介之女等国許江差下候節、役女中之儀も都而諸藩同様

差下管候得共、

(徳川家定宛)天璋院様ニは別段

御由緒之訳被為

在候付、役女中之内御当地江召置、是迄之通相勤候様可仕旨申上候処、書面之通相心得候様御付札を以被仰渡、是迄役女中其外多人數其假召置申候処、年々之扶助方過分之及失費、然処兼而申上候通、海防手当向、其内外外當時急務之入費多端ニ而、追々修理大夫勝手向至而難決罷成、右女中共是迄之通扶助調兼候付、無拠此節右役女中之内、頭役之者迄残置、其余は都而引取、勤向之儀は是迄之通相勤候心得ニ御座候間、此段無屹度御聞置可被下候、以上、

丑十一月十六日

御名内

岩元太右衛門

文書原寸 縦一六糎 横一四七・五糎

一四九 小松帯刀ヨリ島津主殿等へ

一橋慶喜ニ拜謁ノ件

一橋様拜謁御都合之義、昨日申上越候通川口迄被遊御廻船候得共、風波甚敷海陸之通船も無之、拙者義も天

保山江出張居候処、昨夜半過兵庫之様御乗戻為相成筋ニ候間、昼時分迄当所江見合、迎も今日中又

御廻船御上陸之天氣合無之候ハ、直様兵庫之様差越、同所ニ而拜謁御用済、早々帰京之賦ニ候、尤当所へ出張候公役人御船手人数は勿論

一橋様御供方人数之義も

御廻船先不相分故、追々当所江相円居候、右形行を以申上越候条、被達

御内聴候義共宜被取計候、此段申越候、以上、

十一月十七日

小松帯刀
大坂安治川口

島津主殿殿

伊集院平治殿

大久保一藏殿

再白、御家老方江は別段不申越候条為御含此旨申

越候、以上、

文書原寸 縦一四糎 横一一五・五糎

二四〇 岩倉具視ヨリ大久保一蔵へ?

長州再征ノ件

(封紙ウツ書)

「秘啓

緘 一 対

敵寒之弥堅固珍重存候、其後ハ無音意外候、然ハ井上士未帰洛無之哉、登京候ハ、何卒一^(カ)面談申度宜敷頼存候、一貴所御用繁^(カ)沖も入来成間敷遠察之事ニ候得共、万一矢瀬村出^(術)出馬便宜モ候ハ、何卒立寄頼候、

一例之虚説と存候得共、此比頻リニ薩亭人数操込、大炮引入ラレ候趣、亦不日大守豊州淡州拳国上京ノ旨如何ニ哉、

一伐長決而不可有存候処、此比弥決定、追々人数操出シ之旨、大樹ニモ准発トノ事不審不少、元来永井^(尚志)は如何致候事哉、

一長州三拾五万石一旦返上、此一廉ヲ以和義出来、更ニ今度諸 陵成功之大赦行レ、長州父子官位ハ勿論、領

地共ニ復古ノ事、幕吏決極策ヤニ承候、是等ノ始終モ出所不審之事ニ候、

一一・会密談ノ趣此比ニ至リ二公ニハ

上ト離レサセラレ殘心、乍併中立何レノ方ニモ不被為

寄、暫差置陽公頻^(近衛)リニ

上ニ御合体ナリ、加ルニ正三^(実斐)・久世^(通應)如キニ至リ、委ク

陽公同意往々薩術中ニ陥候哉ト深苦心、内話ノ趣極秘

と申事ニ而伝承候エトモ、深信用ナリ難ク存候実事ニ

候ハ、重疊候エトモ、是以不審不少何人ノ策略ニ出

候事ニ哉、

一伐長ノ事、幕府柔弱始終逆も不行形チニ十分弱ヲ示シ、

且色々幕吏自ラ宣言、而テ其实必伐長尋デ薩ニ及ハン

トノ深謀ニモ有之哉ニ承候、会蜜意哉ニモ承候得共、

是ハ申出候、幕ヲ能見立候説哉ニ被存、乍去若々右実

事ニモ候ハ、必御由断^(通)不可成哉ト存候、会説ニ当時

満天下ニ渡リ正義ト唱フル者一部通リト成果候、余ハ

委ク幕命奉戴之趣ニ候、是非何トモ弁しかね候、

一 右迄ノ義ハ昨日比迄ニ追々承候事ニ候、只今承候エバ
伐長決定、勿論一・会ニテノ話、長州自国防戦ノミニ
ハ不有之、必奇戦変地ニ甲兵頻発不可疑趣ニテ内々諸
方別段ノ手当ノ旨ニ候、

一 右伐長決定起リハ在府諸吏同断、親藩等敵敷申越候ヨ
リ俄ニ爰ニ至リ候旨ニ候、此事其外種々ニテ関東議論
交、此比頻リニ沸騰ノ趣ニ候、

一 伐長勝利ノ砌ハ、長一味列藩対州、龜井其外中国・四
國中ニ二三藩モ有之由、是モ直ニ討伐ト申事ニ候、亦
敗軍ノ時ハ大樹ノ義ハ兎も角、徳川氏ヲ立貫キ候事著
眼論ノ由ニテ、軍不利ト見込候時ハ速ニ鳳輦東スルノ
決極ト承候、

一 時宜ニテ此節何時大樹上洛モ計リ難ク、若上洛在之候
ハ、は大変事ノ蜜事在之候由、亦如何ノ事ニヤ、

一 外夷 勅許後引取ハ致候エトモ、何カ意味深長在之候
処、此比外夷 勅許ノ上云々ト種々申立、関東以ノ外
混乱ノ趣ニ候、右ニ付何時撰海渡来ニヤ、今日ニモ難

計旨ニ候、

一 今日承候ト申入候件々ハ御近辺語合、侍玉木某ト申者
ノ咄ニ在之候由、此者日々一・会・桑等江出入、能実
事存居候旨、例之虚談ト存候エトモ、達シ書往来書ノ
凡洩ズ写取所持之由故、若半ハ実事ニヤ、万々一実事
多く候ハ、珍物ニ而候、乍御面働御尋申入候、筆勞ト
ハ存候エトモ、凡之所内々返書頼存候、早々如此候
也、

十一月十九日

諸説若シ実事ニ候ハ、天下ノ事はヨリ起リ申候コト
ト存候、何ソ 朝廷袖手安座ニヤ、百官何ヲ以テ安意
ニヤ、万端一括セラレ朝議ト云者被立候事今日ニ有
之ニヤ、嗚呼一発再不可救形勢成果可申哉ト苦慮慨歎
至極ノ事ニ候也、

文書原寸 縦一八種 横一一五種

三三 土持佐平太広島ヨリノ報告

幕吏長藩詰問ノ件

(包紙ウツ書)

一奥掛書役衆

芸州広島

滞在 土持佐平太

(米) 一乙丑十一月廿日

十一月廿日



」

(毛利敬順・広封)

大膳様御父子御伏罪之儀、御疑惑之廉々有之、右為

(淺野長訓)

御糺大目付等広島表江被差向候段、芸州侯江御沙汰

之趣、去十一日付を以御届申上候通御座候処、同十

六日弥来着、且先達而撰海渡来仕候外夷艦之情実其

外段々京撰表風説等承合候、当時之形行為御見合、

左条ニ申上候、

(尚志)

一大目付永井主水正・御目付戸川伴三郎・松野孫八郎、

(幹三郎、安慶)

外ニ御徒目付兩人・御小人四人被添、当十六日申刻広

島江到着罷成、然ニ右主水正一人は乗馬ニ而、徒卒三

拾三人、伴三郎式拾九人、孫八郎拾六人程召連、尤兩

人は乘輿ニ而供方之者都而陣笠・小袴着服致し、勿論

為持筒等、旅之事ニ而行粧廻至而手輕之形ニ相見得申

候、猶当分此表萩様御重役穴戸備後之介、大津四郎右

衛門・松原音藏・広沢東右衛門等致滞留、

(符紙)

一本文大津は御使者勤、松原・広沢両士は周旋方ニ而

出浮、諸事致都合、芸藩等始終取会、談判筋等有之

由、然ニ長藩惣督穴戸ニ而都合八拾人程当分滞留ニ

(相原治人)

御座候、木梨彦右衛門ニは曳取申候、」

(親筆)

左候而、井原主計ニも先達而当国江出浮申候処、一旦

岩国迄曳取、其後大膳様江御伺之一条有之由ニ而、山

口表江立帰り、夫成今以相見得申、就而は右代り外

ニ被差越筋ニも御座候哉、又々同人罷出可申哉、兩端

御評議之次第相分不申候、然処此度大目付等被差下段

安芸守様江閣老より被仰達候趣を以、為御使者番頭黒

田弥五左衛門・寺西盛登、当月六日山口表江被差遣候
処、同十四日罷歸、猶亦承合候処、御末家并諸隊御呼
出之御旨、大膳様被成御承諾、乍然御大藩中御末家之
面々御領所遠方懸隔、且諸隊等段々行違ひ之者も有之、
一統山口表江御呼寄御達之趣も被為在候付、迅速運兼、
乍然来ル廿九日限ニは、当表江被差遣ニ而も候哉、御
覆命之由、依之去十八日、大目付より芸藩御用召ニ而
御内命之趣キは、長藩御糺問之儀、一度哉二度では迎
も相濟間敷御事柄ニ付、一先只今出張之穴戸一人ニ而
も被召出、両日中御糺被成候御模様之段、御沙汰有
之由、猶追々諸隊等不遠到着次第御詰問之上、自然治
乱與麁相分可申儀と奉存候間、追日臨機之形行御届可
申上候、

〔付紙〕
一本文穴戸備後之介江兩日中御糺問有之御模様之段、

伝承仕候処、今廿日午刻時分より、大目付永井、御
目付戸川・松野、国泰寺江右備後之介一人御呼出御

糺方御座候由、尤寺中人弘ニ而、御小人・御徒目付
等警衛ニ而、芸藩等も付越不相成、就而は迎も右糺
問之廉々、即今容易ニは相分中間敷候得共、可成探
索仕、追々内分相洩可申候段、右乙次郎より唯今承
得申候間、今日之形行以張紙此段申上候、

一右ニ付長国御所置振ニ付、御内々

幕意奉伺度所存ニ而、植田乙次郎事先月廿四日急ニ而
出坂仕候処、其節最早幕役御差下之御論相決、御内命
之趣ニは、長藩浪華表江御呼出之段、被仰達候得共、
撰海江先達而夷艦等渡来候一卷旁、御混雜中ニ付、御
吟味之御訳被為在候ニ付、大小鑑御差向相成候段御口
達之由、然ニ乙次郎より何ぞ周旋之路も不相叶、其假
彼表曳取、当十二日致下着、左候而、当所出張幕役方
江同人折節致伺候得共、長国御所置振之儀は一切仄
ニも御洩無之由、

一当分広島表江は、幕長之人數に入込相成候迄ニ而、右

外他藩より出勢無之、然共近々関東之御人数・(徳川茂承)紀州侯

并井伊・榑原侯等出勢之段、先触見得來候由、尤人数

等相分不申候得共、紀州侯人数は当御城下より北ニあ

たり四里程相隔可部と申、村中寺々・町家等江参集之

賦と相見得、右外宿陣等之場所もいまた相分不申由、

一大小鑑等御糺問之場所は、当御城下西寺町国泰寺ニお

ひて御評定之賦ニ而、町内左右江新番所造営ニ相成、

勿論長藩共当分右末寺之内ニ滞宿仕申候、

一長防昨年来、国境諸所江炮台築拵等充分行届、尤当分

諸隊都而山口陣屋江致屯集、併當時ニ至りてハ先ツ過

激之暴論令主張候輩、稍御鎮撫之姿ニ御座候得共、今

度御糺問之上、御処置振ニ依而は不得止事、東軍江致

敵対度、国論ヲ要し、然ニ御譜代之臣子ニおひては、

是非平穩之踏希居候得共、脱藩人・奇兵隊共、是迄之

功勞も水解と存し、勝敗も不顧致闘争度真意と相見得

申候、依之大膳様は勿論、(経略)吉川等実ニ御痛心被遊候由

取沙汰ニ御座候、

一先達而

大樹公被遊 御参内、去三日浪華江御入城之由御座候

処、其節一橋様(徳川慶喜)ニも御供ニ而、御退京之御賦ニ候折柄、

不図

此御方様御人数式千人余被御差登、就而は右御真意之

程分兼、幕役等より彼是御嫌疑之廉有之、夫故一橋

侯御残、御在京之趣風説有之、如何之御模様候哉之旨、

内分私江打合可然段、若年寄辻将曹より国枝与助を以

申承候儀有之、尤其節迄は付足輕堅山武右衛門ニも参

着不仕内之事ニ而、勿論右通之御訳柄不奉存候得共、

夫成難黙止、則答仕候趣、御国元之左右相絶、更ニ何

も不相分取約難申述候、併兼而非常御警衛之御為、已

前より旅之御人数御差登相成候へ共、今度摂海江夷艦

渡来紛擾之形勢、長征処ニは無之云々、当国江致布流

候事件、御国許江も彼表より疾相響キ候処より、為御

念重而御人数被差登候哉、且又

天气御窺旁之御為

太守様 御上京被仰出候哉ニ、於当所取沙汰之通、自然無御延引被遊

御上京候ニ付而は、何れ御多勢御召連ニも相成候故、御供方御人数之内、御先ニ御差登被成候事共ニ可有御座哉、兩件顯然之事ニ而、曾而御疑念之訳有之間數候、猶蒸艦より式千人出京と申も浮説と相聞れ、逆も千人ニも不至候哉と致推量候、然ニ多人數罷登、御疑心着眼之程何分承度申掛候処、其趣意柄は不相分候へ共、幕府而已ならず、不審抱キ候国柄等も有之様子之段、彼表より極内申越相成候間、御互ニ無隔心、何事ニ不寄御心得之端ニも相成候事、実は御内通可致、芸侯一藩當時之國論ニ応し、不取敢早々相洩し可然、右將曹より内々承知之上罷越候段申承、御懇情之程不淺旨、挨拶等仕置候、尤此末之処も宜敷頼入置申候、

一先達而撰海江渡來候夷艦之始末等、当國より彼表之情実分兼申候得共、仄ニ伝承仕候ニは、

御国様并萩様江致蜜商候慮を以、兵庫開港之儀共願立

候由奉恐縮候、就而は乍不及是迄夷情旁段々探索仕候折柄、本筑前様御内、当分脱藩川上左太郎と申者、当七月広島ニおひて致面会、色々雑話承合候処、横浜滯船夷人之一説ニ、先年来攘夷之御論被變たるは、乍恐御国様并萩様と奉存居候処、此内御兩國ニおひて及炮戰、其後遂御談判申候処、殊之外信義之御国柄と心得、然ニ彼等横浜諸港江通商相開候てより、最早年月相經夫迄之間、關東方之政府約条筋ニは始終虚言取締、大小表裏之意不少候処より、畢竟夷人を始各藩之人心折合不宜哉と、方々近比幕府見放し候趣、横浜港ニ而浮浪士共致布告候由申承、併何ぞ確証無之事ニ而信用仕難く候様御座候得共、将当閏五月、於馬関和蘭コンシユル并セネール兩官、長藩江応接書別紙之通長國真義至誠之國と申答、然共即座之巧言ニ申たる款ニも難計候得共、右太田某一説之通、長州之処は稍致符合、且亦当九月兵庫江外夷艦碇泊等致し候時分、芸國蒸艦江戸下りニ而致汐繫候場合、英人五六人端船より漕來、

右船は吾国ニ而見覚有之、致見物度申參、尤英国より
広島江御買求之船ニ而申出通乗船為致候処、芸藩江差
向、段々及雑談ニ候件、帰国之上船頭共より当所役々
江申出相成候趣ニ、長門太守暴動之所為有之、去冬軍
勢御差向相成候処、伏罪之証拠頭れ、一旦御解兵有之
候処、再び伐長之論を起し、

將軍末家等之諸勢引率し、浪華江御在城、屢軍議整へ
方々旌旗進んと欲候と聞伝候、其外九州之諸藩、追々
出勢し、小倉江は幕役致出張、就中小笠原家共、今
度は大キニ致主張候由、芸藩ニも長征之役ニ当ル欵、
且広島江東軍何万騎程參集候哉と及尋問、芸藩相答候
ニは、我々関東より唯今帰帆掛之船ニ而、国許之様子
更ニ不相分段致弁解候処、如何様左も可有之と応諾い
たし候儀共御座候由、成程禽獸ニ等キ卑劣之醜夷ニは
候得共、各国之形勢等具ニ致觀察候形ニ相見得申候、
然は先達而於撰海 閣老衆と夷人共と御談判之条目ニ
恐多も

此御方様并長州様御国名等出し候次第覆勘仕候処、前
条信義之御国と相唱候発口齟齬仕候氣味も有之、何分
夷情之程量得難く奉存候、尤前段外夷評論旁、謀夷之
処は相分不申候得共、若又御見合之端ニも罷成可申哉
奉存候間、於馬関夷人江長藩より問条書写老通相添、
此段申上候、

但小笠原老岐守殿并板倉伊賀守殿より芸州侯江被相
渡候御書付之写老通相添差上申候、

右通御座候、以上、

丑十一月廿日

芸州
広島滞在
土持佐平太

奥掛
書役衆

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第七一九号
文書ノ本文ト同文ナリ〕

文書原寸 縦 一四・五種 包紙原寸 縦二八種
横六〇七・五種 横四〇種

二三 土持佐平太広島ヨリノ報告

馬関ニ於テ長藩側ト和蘭「コンシュル」トノ
問答

写

一 丑聞五月廿四日和蘭コンシュル官・セネール官兩人ト

於馬関応接之条件英人土官之者同席、先達而於神奈川港、幕使

柴田日向守(備中)より尋ニ付、貴国より長州之事申立之筋有

之、右応接之書、宇和島侯(伊達系)より弊国江伝達相成、令一

覽候処、書中之主意甚以不得其意候件々有之、御尋問

致度候、

問

一 弊国より欧羅巴諸州江使節差立候段、応接有之儀は何

等之証拠を以申立候趣、於此方は更ニ覺無之、外国江

使節差立候儀は、第一

朝廷之命無之、弊藩自己之了簡を以取行候訳無之候処、

如何之儀ニ候趣承度候、

答

一 去年馬関戦争後、長州より止戦和議之挨拶として、横

浜滞在外国全權まで使節差立候節、幕府より尋ニ預

り、申答之儀は、其節長州より外国江使者差立可申之

処、於和蘭其使節引受可申哉之趣、否尋申候就、決而

曳受申間敷段申答候、

問

一 横浜江兩人差越、外国公使江及蜜談候段申立有之由、

如何之儀候哉、近来横浜江差越候覺無之候事、

答

一 兩人横浜江参候儀は、去年戦争後、止戦之為挨拶ニ罷

越候節之事ニ而、其節長人江応接ニ及候段申答候、

問

一 貴国軍艦馬関通行之節、日本政府之為ならず筋及応接

候段申立有之由、此方ニおひて日本之不為と相成候事

相謀候覺毛頭無之、甚以不得其意候、弊国ニ而は和蘭

より之媚言と存候事、

答

一 右様之儀、決テ和蘭より不申立候、昨年止戦後は、於和蘭毛頭対長州仇怨無之、真実至正之國と相心得候段、毎々老中等江及応接候得共、元來 幕長之間不和生し居候事ニテ、右様之儀を以て戦争を起し、和蘭も 幕府同様ニ長州江不和ニ而、幕府之援兵を出し申抔風説可有之候得共、右様之儀は一切虚説ニテ、御信用被下間敷候事、

問

一 昨年尾州老公下向、其節三太夫処殿科、右問罪關係之儀は一旦始末相済居候処、此度重而

將軍自ら兵を師ひ來、吾國を討之論、何共其意難解、然ニ世間之評ニは右全く和蘭応接之趣ニ而、再討之論相起候事と風聞有之、於此方全貴國之虚言より相起候事と相心得候事、

答

一 此度重而討長之論相起候儀は、外国船馬関港滯泊之事ニ付小倉より縷々

幕府江申立候事より相起、右申立之書面共老中より請取写取置候就可入貴覽候得共、唯今船中所持致候否詳ニ不相弁候事、

問

一 左様候得ば、貴様より承知之次第を以小倉表江詰問致し候ても不苦候哉、

答

一 拙者申立候段被仰越不苦候事、和蘭ニおひて対長州、昨年止戦後は毛頭關係無之処、斯御疑念候ば、猶委細説弁可致候間、明朝軍艦江御越可被成候、追々老中并外国奉行江及応接候次第、且小倉より差出候書類、船中所持ニ候得ば逐一可入貴覽候事、

以上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第七一九号別紙一文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一四・五種 横二二・二種

一三四 土持左平太広島ヨリノ報告

板倉伊賀守等ヨリ芸州侯へノ通達

写

一筆令啓達候、毛利大膳父子伏罪之儀、御疑念之廉々有
之候付、右為御糺大目付永井主水正、御目付戸川伴三郎
松野孫八郎、芸州表江被差遣、大膳末家并家老之内且奇
兵諸隊之者、同所江呼出御糺之上、時機ニ寄惣御人数被
差向候間、芸州口一之先心得を以、十二月十日限人数差
出、其方ニは国許相守、臨機之取計可被致候、尤御軍目
付松野八郎兵衛被差遣候間、其段可被相心得候、松平近
江守儀も其方付属被仰付候間可得其意候、且又攻口御割
込、別紙之通相達候間、是亦可得其意候、此段可相達候、
依 上意如斯候、恐惶謹言、

十一月

小笠原(長行)老岐守
名乗判

板倉伊賀守(勝勝)
右同

(浅野長副)
松平安芸守様

以上、

(別紙)
一本文

御攻口等之儀は、昨年冬被仰出候通之由御座候間、別段
写取差上不申候、以上、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第七一九号
別紙二文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一四・五糎 別紙原寸 縦一四・五糎
横 七〇糎 横 七・三糎

一三四 物奉行ヨリ役料米扶持米等文払増減届

文久三年九月ヨリ慶応元年八月ニ至ル

(表紙)
「丑年増減総」

一米三万四千五百五拾四石式斗三升式合壹勺六才

内九千石

雑米見賦

但壹ヶ月七百五拾石ツ、拾式ヶ月見賦

百壹石三升式合

出米引

百壹石四斗四升八合

返上引

御奉公引込ル

一米百三拾三石四斗三升六合 高奉行所

一米三拾壹石式斗 御代官所

三口 合米三万四千五百拾六石三斗八升八合壹勺六才

亥九月より子八月迄

一米三万四千六百拾三石九斗七升九合

但出米引并拝借返上引相除申候

子九月より丑八月迄

一米三万四千五百拾六石三斗八升八合壹勺六才

但書同断

差引

米九拾七石五斗九升八勺四才

右行相減申候

右は御役料米并役料米・御扶持御切米、高奉行所・物奉行所・御代官所ニ而相渡候米員数可書出旨被仰渡置候間、此段申上候、以上、

物奉行動

高田尚五郎

丑十一月廿三日

物奉行

三原藤五郎

冊子原寸 縦二八・五糶 横二二糶 四枚

一四三 小沢長右衛門ヨリ岩元太右衛門へ

出府ノ件

（包紙ウツ書）
一岩元太右衛門様

小沢長右衛門

新納嘉藤二様

和田 要人

内用貴酬

（封紙ウツ書）
一岩元様

小沢

新納様

和田

貴白拝誦仕候、如命寒冷相加候処、益御安泰被為涉奉恭賀候、然は今般被 仰出之御趣意ニ付、当御家族様方御出府ニ可相成哉、又は年内余日も無之ニ付而は、来春ニも可相成哉、御問合之趣委細奉存度候、奥方様ニは此節御妊娠、最早御臨月ニ茂御差懸り被為入、殊ニ御脚氣之

症ニ而長途之御旅行難被成、來春まで御出府御延引被成候段、先頃御奥様御届書御差出被成候、且又別枝様之奥様ニ茂御不快ニ付、御湯治之御願御差出被成候処、是は御湯治之御願は難相整、精々御療養相加、少も快候ハ、早々出府候様御下札を以、御差函ニ御座候、左様御承知可被成下候、右之趣貴酬申上候、早々如是御座候、頓首、

十一月廿四日

文書原寸 縦一七・六糎 包紙原寸 縦二七・六糎
横八一・五糎 横 四〇糎

一四三 児玉利蔵ヨリ久光公へ十ヶ条ノ建言

(包紙ウツ紙)
一上表

封 習書頭取助
児玉鉄矢「

臣利蔵誠惶誠忠頓首百拜上表、臣謹惟、方今天下之形勢、議論紛紜、群情洶洶、実是危急存亡之秋也、雖然

堂堂三州忠義之士忘身於外、尽心擬丹誠、而欲報恩於国家、蓋

先公之不忘遺志故也、臣頑鈍不勝傍觀国家之衰微、日夜痛心軋倒、臣不顧重罪言、方今所行急務有十件、一曰、拳俊傑之人、今所拳之俊傑之士者内外僅二二人也、請願寬仁大度、而求賢於野、施仁政於民、使賢侍於左右、事無大小問之則頗為政務之輔、方今世上所謂唱豪傑者、慷慨握腕切齒、以惑溺於酒色為愉快、通時務而廉傑獨立者或為奸佞、或為小人、嗟呼真可長大息也、二曰、蔽於古法、法度弛則亡命奔走者多、而終至於釀国難、自今而後宜禁止之、今大監察僅自正法度、爾來府下道路醉人頗少、廉直之風將行、幸甚幸甚、是監察官之力也、宜褒賞、三曰、當時出軍兵卒、宜撰用二十歲以上四十歲以下、不然則難為用、如夫若卒則一日步則一日疲、当急變有騷擾動搖之憂、年若而當於危急之時、從容乎趣其任者甚希、千百人之一人也、請察之、且當時外城之士不限於窮困之士、必自一外城出一隊、

於是窮困之士、売却牛馬家財、而哭泣趣於役者往往有之、雖國役敢不愍乎、不察人情為如斯、則人民愁歎可知也、四曰、京撰江府之間、撰人才成商家之兒、密出間諜、而事無実否探索之、是此間諜之任、長其道者、曲可撰用之、不然則生大害、其及於出人則其人之妻子厚賜金帛、而叮嚀養之、若有功則賞之、五曰、組頭之官其任甚重、是諸士之為部將、所以指揮諸士也、故在職之人有一過則士皆不服、是以其官宜任豪傑之人、然則命令行諸士皆服、六曰、今番兵宜歸鄉、是亦所以國之疲蔽也、如何則奉命出鄉、出則以官命役於民、於是民亦大愁歎、番兵亦奉命之重不得已也、而今物価沸騰番兵皆費己之錢而求日用之米、是雖少積年考其費、不可孥數也、窮士之察心情宜救之、七曰、廢吉野之牧、尺遷府下窮困之士、昔

先公所以置牧、人民之荒々山野空在故也、於是

先公不為空地、故置牧養馬、以為萬民之資、方今府下

窮困之士所耕無尺寸之地、祿以欲養之、封祿不足、是

諸士多故也、不可不遷其士也、不然皆餓死乎、將釀亂乎難謀、自今廢牧速轉士、而發倉廩府庫賑賒之、(給力)造家宅斧鍬以賜之、然則府下雖頽廢、諸民子來、不日而成其明君之事蹟歷然于青史、臣謹聞、今廢比志島之牧遷窮士、至是皆欣欣然趣之、自今而後、宜設鄉校、八曰、南方在無人島及多伽佐古、方今速遣蒸氣船、且命於知地理者宜開之、而遣農兵使種五穀、可取薪炭及金銀銅鉄、九曰、一門四家自五千石至於二千石、各歸其食邑、然則家富兵器備、而命令亦行、十曰、憂社稷之士建言者頗多、雖然至於今敢不言是非得失、公從今寬大、怡顏色和辭氣弁是非得失、不可則公自慰諭之、若有忠言則重褒賞之、如是則憂國之士皆欣然建言、如赤子之慕父母、皆踊躍而告訴、臣謹聞、昔

(島津重久)

大中公令曰、有訴訟無大小、不限於橫目役、直謁我父

子詳伸之焉、實是万世不易之鑑也、而施仁政於民、故

上無窮困之士、下無凍餒之民、於是儉德日行、竟內安

平、万民鼓腹唱歌、至今其德行与日月同光、當時之形勢、方今之世情各雖異、然仁義忠信則古今不易、今諸藩日衰驕奢日甚、三州亦一徹、數雖有禁止之令不行、

請願敵命於大監察禁止之、抑三州

(島津忠久)
大祖公以來綿々不易、是所以冠於諸藩也、今諸藩日紛

々、動釀亂、至蔑如主人、豈不痛乎、當是時、宜正倫理脩禮義行節儉、救窮人振貧民、一新德政、而施恩沢則人心悅服、威令行然後封域堂々不動如山、万民高枕而無敗叛之憂、如斯而可謂養国力也、而後能応赴急於京師掃尽姦凶、而可安

宸襟、亦不為難、反之而雖欲国強得乎、小人当国為政、

必競新廢古、事無規則、法無紀律、賞罰不当、出納無度、人役無數、不計力而求成、不謀遠而昵近、日費民力而不知国、日疲敵至無可如何、俄空慷慨憤怒徒死、必歸罪于人、滅国破家自古歴々古人有言、夫主將之出兵、運謀帷幕之中、勝決千里之外、今急拳俊傑之人、富国强兵、万民安堵、假令雖姦党起、安如大山、不顧前

後專要強兵、其蔽万民苦愁怨甚、彼諂諛便佞、好獲患失、所言必虚妄不可信、伏願

公深慮遠謀、以致太平、以奉

先公之遺志、臣雖頑鈍沐浴於恩沢數百千歲、日夜歎息流涕、叩心胆以上表、希憐臣微忠、万一有政務之輔、

臣死骨不朽、若公震怒、使臣賜鉄鉞之誅、臣死之後永為靈魂奉護国家社稷、嗚呼詳鑑賜之焉、

慶応元年乙丑冬十一月二十九日臣兒玉利蔵恐懼百拜

文書原寸 縦 一六・五種 包紙原寸 縦 二九種

横 二〇八・五種 横 二〇種

一三三 土岐新兵衛小倉ヨリノ報告

再征ニ付幕府及長州ノ形勢

一 (端裏朱書)

小倉より
土岐

乙丑十一月晦日

當時京撰并長防之形勢承得候形行左ニ申上候、

大樹公此度長防御所置ニ付、大小監察芸州江御出張之

上、御模様次第播州姫路迄 御進発之由、

一先月五日二条之御城ニ而被為在 御内話候は、去ル二

(正外) 阿部・松前(景忠)

之日之夜、御前(景忠)之兩人窃ニ 御前江罷出、今夜半

是非共 御乗船 御東帰有之候様、左様無御座候而は、

逆茂 御尊命は被為在間敷、私共兩人御同船ニ而御供

可仕段、類ニ申立候付、可被遊 御陸行旨被 仰候処、

(徳川慶喜) 橋・会(松平容保)

二候、伏見ニ而 御拒可申上は差見得申候間、其

節は歩兵講武所ニ而防戦之内、 御通技 御東帰被遊

候様申上、万一京地江被為入候ハ、尚亦 御尊命御

危、誠ニ歎ケ敷奉存候趣も申上、余程 御掛念被 思

召候処、伏見ニ而橋・会ニ候拜謁、懇ニ被仰上候趣有

之、大ニ 御安心被遊候由、然ニ尚亦京地ニ而 御所

向之御事、橋・会・桑(松平定敬)

御周旋筋御了解、豊後・伊豆

ニ甘々と被誑、口惜事と類ニ 御歎息ニ而、御内話被

為在候由、尤 御参内は 御差扣之由候処、被為蒙

御寵命、先月廿七日 御参内ニ而、当月四日 御下坂

被為在候由、且今般長州表 御所置之上、尚又大坂江

御滞城ニ而、各国御大名方御会議相成候向ニも取沙汰有之由、

一今度芸州江御出張之大小監察、被召列候御人数多分ニ

而、長州之激徒尚更激成ル勢ニ可相成茂難計、御吟味

筋も為有之由候得共、全体(尚志)永井侯御順熟之御方故、其

辺は篤と御心得ニ而、輕拳決而有之間敷と之御評議も

為有之由候、尤本久留米藩脱走洩之上幾太郎事、当三

月町人体ニ而松屋長兵衛と名元を偽、外ニ長州奇兵隊

式人、都合三人列立、大坂表江出浮候処、被召捕候者

之由、然ニ此節三人ともニ永井侯芸州江被召連候取沙

汰も有之候得共、慥ニは分り兼申候、

一肥後・柳川之両国、来月十日限小倉表江出勢被仰渡候

処、肥後之儀は今度御再征ニ付、御旗本御先鋒御願立

ニ而、御領分鶴崎江御出勢之筋、御手当相成居候由、

然ニ先達而亦々昨年通小倉江御出勢可有之被仰渡候処

御願立之趣有之、御願通鶴崎江御出勢之筋被仰付候段、

昨日限本より申参候由、肥藩より慥ニ承得申候、

一長防之動靜ニ付而は、此節御詰問之上、不行届之儀は幾重ニも伏罪致、昨年通御寛大之御所置不相成候へ、無是非防戦之決定致居候由取沙汰有之、国境津々浦々防禦之用意甚敷向ニ相聞得申候、然ニ大坂よりは、当月十四日五日、騎兵一隊・歩兵隊二隊・大砲一座、井伊兵部少輔様・(政教)神原式部大輔様御繰出相成、去ル廿三日芸州御着之御日割ニ而、追々模様次第ニは御繰出、十二月中旬比ニ茂相成模様次第、尚又各藩出勢被仰渡候向ニ相聞得申候、

右通承得此段申上候、已上、

丑十一月晦日

生産方掛
御裁許掛衆

(本文書ハ)鹿兒島県史料 忠義公史料「第三卷第七二二号
文書ト同文ナリ」

文書原寸 縦一六糎 横二〇八・五糎

二〇六 帖佐与御蔵入現高増減帳

文久三年八月ヨリ慶応元年七月ニ至ル

(表紙)
一慶応元年丑十一月

現高増減帳

帖佐与
御代官所

亥八月より子七月迄

一現高六万三千六百七拾四石三斗五升六合七勺三才

子八月より丑七月迄

一現高六万式千百拾六石六斗七升叁合三勺六才

内三百三拾石

右彦行野村源一郎・島津内記・有馬舎人御役料

高上地

八石七斗六升六合四勺四才

右彦行高山郷士田中十兵衛外ニ拾人、日当山郷

士稻留市助、伊作郷士池田藤蔵外式拾三人、隈

之城郷士池崎鉄右衛門外ニ三人、本城郷士山口

源次郎、大始良郷士本永田名字之平次郎、倉岡

郷士岩永惣次郎外ニ三人、飯野郷士楠本金八外

ニ四拾四人、出水郷士沼田利右衛門、高岡郷士

牟田原鉄右衛門外ニ三拾人、綾郷士中原弥右衛

門外ニ貳拾三人、跡付ニ而年作答合持高御取揚、

合三百三拾八石七斗六升六合四勺四才

外ニ貳千貳百六拾石

右老行、町田民部・岡田小藤次・大久保一藏・

川上式部殿・蓑田伝兵衛・中村新助・伊地知杜

之丞・松岡十太夫・川田将監・川上後五右衛門

・新納弥太右衛門・種子島次郎右衛門・樺山主

計・赤松主水・川上龍衛殿御役料高

差引

千九百貳拾老石貳斗三升三合五勺六才減ス

右は帖佐与御蔵入去子八月より丑七月迄現高増

減之訳可申出旨被仰渡置候付、小座付迄右之通

御座候間、此段申上候、以上、

丑十一月晦日 帖佐与 御代官

冊子原寸 縦二六糎 横二二糎 四枚

一四二九ノ一 幕府ヨリ長州ヘノ詰問八条ト長州ノ返答

長州江御糺問之次第

一 当春内輪致争闘候付、大膳父子乍慎中為鎮静致出張候

段一応御届致候処、委細事実不分明之事、

一 当春争闘、既ニ及鎮静候上は、大膳父子以前之通萩江

引取慎可罷在候処、時日申立候之趣ニ而は、只今以山

口ニ罷在処々致巡行居候段如何事、

一 旧冬破却之山口城、已来再築之評議いたし、其後加修

理武器間配り候事、

一 謹慎中家来之者、馬関来舶之夷人と懇親接待いたし候

事、

一 当春中、所持之蒸氣船買人ニ壳払方いたし候、家来村

田蔵六花押有之証書差遣し、長門も其節夷人と直応接

いたし候事、

一 筑前江引渡ニ相成候元公卿江使者并贈物差遣し、右為

答礼諸大夫森寺(大和介、常邦)大和守長州江罷越候事、

一 淡路・堅物大坂江被召呼候処、難罷出段申立之趣有之

ニ付、曲而被任其意、外末家并家老共之内申合、九月

廿七日迄ニ可罷出候旨再応御達之処及延引候事、

右之廉々父子自判之謝罪状と申立と言語致齟齬候

付、時日相尋候処、其節答之趣猶書面を以事情委

細可申立候、

十一月

一四二九ノ二

第一答

一 争闘為鎮靜父子致出張候得共、矢張寺院ニおゐて籠居

厚謹慎罷在候事、

第二答

一 右及鎮靜候上は、父子共萩江引取、慎罷在心得ニ御座

候得共、下々之者幕府御進発有之杯と色々之浮説流言

を信シ、一同引取方之儀承知不仕、尤御進発杯之事は

有之儀決而無之候得共、其趣意申諭候得共、何分承引

不仕、不得止山口江逗留謹慎罷在候、巡行致候杯とハ

全浮説と奉存候、

第三答

一 山口は 神君之御趣意も有之候得は、其仮捨置候而は

不宜事之儀と、草杯取引地形も致候処、此儀捨置候方

可宜と、不計存当候故、如已前打捨置、只今ニ而は草

生シ荒果居申候、武器間配り等之儀、決而無御座候、

第四答

一 馬関来舶之夷人甚以可惡、実ニ切齒ニ堪兼候得共、薪

水其外欠乏品ニおゐてハ、時々差遣申候、若此儀をイ

ナミ申候得は、早速戦争ニ相成候事故、奉対幕府穩便

ニ取扱候仕合之実ニ御座候、

第五答

一 所持之蒸氣船全損シ候付打捨置候、是ハ海江乗出し、

売払方致の者可有之候義は難計御座候得共、此段家来

共江申付候事決而無御座候、長門儀元来夷人を悪候事

甚敷ものニ而、神奈川遠眼鏡を打碎候気象今以除き不

申候故、夷人江応接之儀、おもひも不寄事ニ奉存候、

第六答

一大小砲買入候事、浮説ニ御座候、

第七答

一諸国より入込居候者共ハ、公卿江随ひ筑前江罷越候、

其他追々脱走之者も多分ニ有之、右等之者筑前江罷越

候由、承り及候得共、自然右者ハ或ハ大膳之贈物杯と

申伝候儀も可有之奉存候、大和守罷越候義ハ決而無之

候、是等は全之虚説浮言、乍然右様之浮言ハ軽々敷者

迄も無之、実以左も可有之事と奉存候、

第八答

一淡路・堅物(巻)其外末家之者共罷出候心得ニ御座候処、右

等之者、小身ながら分外之者多く有之、若出坂相成候

得は、必首ハなきものと一意ニ存込ミ、強而差留候故

無坳右之延引ニ相成恐入候仕合ニ奉存候、

冊子原寸 縦二九糎 横二〇・五糎 七枚

一〇〇 近藤良之進等ヨリ岩元太右衛門等へ

妻子出府ノ件

一〇〇 岩元太右衛門様

新納嘉藤二様 御直披

岡 内之丞

一〇〇 岩元様

新納様

岡

一翰啓上仕候、寒冷相催候趣、弥御安泰被成御勤仕珍重

奉存候、然は一昨年より追々御国許江御引取被成候御

妻子様方、御当地江御引戻可被成御達御座候ニ付、右

京大夫様御家内様方、此節御当地江御引越可被成哉、

又明春ニも可相成哉、右等ニ付

公辺御届等も有之候哉之旨御尋被成下被入御念御紙上

之趣逐一拝承仕候、右は未何等之御取調も無之、実は追々為御知御座候通、右京大夫様当冬

京地御守衛之御当りニ付、八月中国許御発途可相成候折柄、江戸表より上使を以御出府可被成御沙汰有之、其後御出府之上、京地江は御人数計為被登、右京大夫様ハ

御進発御留守中江戸表御守衛之儀御蒙等ニ而、何角ニ混雑仕、前文之取調等ニは被及兼候儀ニ御座候処、其内雪途ニも相成、遠路之雪国逆も御婦人方之御道中は相成兼候時節罷成候処、何れ明年より致方無之事ニ御座候、乍去未

公辺江は何等之御届等も不仕候得共、右様之次第ニ而追々時月推移候ニ付而は、何様年中ニは御届も不申上候而は不相成積ニ而罷有申候、右様御承知可被成下候、右御報可申上如斯御座候、以上、

十一月

文書原寸 縦一八・五種 包紙原寸 縦二八種
横一五五・五種 横三八種

二三 仏国人国書ヲ將軍ニ呈スル件

大坂へ呼寄ニ付幕府ヨリ朝廷へ届出

横浜表在留之仏蘭西人、兼而国書持参ニ付、大樹公江直渡致度旨申立候得共、進発中ニ付断置候処、今般代替ニ付而は、中納言殿各国使節面会被致、其節右国書茂請取候様被致度被存候、然処方今東帰被致候期茂無之、其内延引茂難相調儀ニ付、五六日滞在之見込を以、大坂表江呼寄候積ニ付、右は

帝都近之儀ニ付、此段御両卿江御達可申置旨、年寄共申聞候、

十一月

右御所司代より伝 奏江差出候由、

文書原寸 縦一六・五種 横五八種

二四 久光公ヨリ土佐智鏡院?へノ書翰草案

江戸へ帰府ノ件

十月三日之御文当月初相とゞき、有難く拝見申上まいらせ候

さやう御座候へは、御注文之御品、御くワしく仰下され、委細承知いたしまいらせ候、出来合と申は、至極龜抹にて、とても御用相成候品ニ無御座候間、早速申付置候ニ付、出来次第御廻し申上候やう可致候、御遠慮仰下され候御事有難くそんし上まいらせ候、以後何ニも承知致度願上まいらせ候、私ニも自由之願ニ御座候得共、先度下され候鯨、好物之品ニ而、殊ニ人々江も遣候而、別而難有そんし上まいらせ候まゝ、御有合次第沢山ニは及不申候間、偏ニく願上まいらせ候、まつく右旁申上たく此之

かへす御文——扱江戸御帰府之一条、御細々と仰下され、御内情委細承知いたし、御察し上まいらせ候、先書ニも申上候通、当分く処ニ而は御六ヶ敷哉そんし上まいらせ候まゝ、来年ニも相成り、少し静謐ニ相成候ハ、こなたよりも容堂様迄申上まいらせ候様可仕候、只今申上候而もかへつて御よろしからすとそんし上まいらせ候、かやう申上候候は、

薄情之者と可被思召候得共、時世どうも致方無御座、別而入り入まいらせ候、かたく御察し願上まいらせ候、

文書原寸 縦一六・七種 横四四・五種

一四三 三万石方御蔵入 現高増減帳 二冊
二万石方御蔵入

文久三年八月ヨリ慶応元年七月ニ至ル

一四三三ノ一

(表紙) 慶応元年丑十一月

三万石御蔵入現高増減帳

三万石方 御代官

亥八月より子七月迄

現高式万九千六百拾五石六斗五升九合式勺八才

子八月より丑七月迄

現高式万九千七百拾壹石六斗六升式合式勺七才

内六石式合九勺九才

右奉行亥年永損地・休地起地相成相増申候、

右は三万石御蔵入現高増減差引仕候処、右之通御座候間、此段申上候、以上、

丑十一月 三万石方
御代官

冊子原寸 縦二八・五糎 横二二糎 三枚

一四三三ノ二

(表紙) 慶応元年丑十一月

式万石御蔵入現高増減帳

式万石方
御代官

亥八月より子七月迄
現高巷万九千三百七拾四石四斗七升七合三勺四才
子八月より丑七月迄
現高巷万九千三百六拾九石七斗七合式才

外ニ五石三斗七升三勺式才

右巷行亥年永損地・休地相立相減申候、

右は式万石御蔵入現高増減差引仕候処、右之通御

座候間、此段申上候、以上、

丑十一月 式万石方
御代官

冊子原寸 縦二八・五糎 横二二糎 二枚

一三三 米良山一件、甲斐豊前等所罰始末

覚

当三月比、甲斐豊前上京仕候而、御内勅書申請、六月比罷下り申候ニ付、主人同月廿六日より急速ニ上京被致候処、京師大混雜ニ而、九月廿一日被罷下申候、

十月六日

一人吉より犬童平兵衛・林田量平在所江被參候、

同月七日

一 渋谷三郎左衛門・神瀬伝左衛門・杉田市右衛門・西伴助被參、主人江上京之次第尋問ニ相成候よし、

四月九日比

一 上京供致候足輕中武又兵衛・佐藤留治・中武良吉を神瀬・杉田旅宿江召呼、上京之次第尋問有之候由、

同月十一日

一 米良要人・甲斐豊前被召呼、上京之次第尋問有之候よし、

(付書) 一 右兩人ハ途中江相滞、去ル九日頃帰宅いたし候よし」

(付書) 一 右要人儀ハ前方不調法有之、蟄居申付被置候処、此節柄、

無人上京之由承及、途中江出張御供願出、神妙之申立も有之、無余儀被召連候由承候」

同月十三日

一 右書役方何れも被罷帰候由、

同月十四日立

一 在所役人米良豆、人吉江被差出候処、主人調練ニ被罷

越候様、(相良頼基)越前守様より被仰出候由ニ而、那須四方被

相達候よし、依之主人、十一月四日より人吉江被罷出

候由、供役人浜砂兵衛、近習河野幾藏・那須盤治・佐

藤芳善・甲斐友三郎、足輕浜砂頼母・河野俊藏・浜砂

国衛・黒木治兵衛・小川寿八郎被召連候由、

(付書) 一 右豆被差出候儀ハ、此節上京届向旁聞達ニ付、無念之御届

之由、左候処差支無之ニ付、其後右調練江被罷出候様達し有之候よし」

十一月九日

一 未明ニ林田量平・田代甚兵衛・林田盛衛上下式拾人余米良英一郎宅江被参候処、英一郎留主ニ付、直ニ小原江被参候よし、

同日同刻、小原江豊永团内・築地四郎兵衛・鎌田雄太

郎上下式拾人余被参、甲斐豊前・同大藏・米良英一郎

召捕候よし、

同日同刻、尾八重江赤坂静衛・東津之助・瀧川俊藏上

下三拾人余被参、米良要人召捕候由、

(付書) 一 右英一郎儀、稻荷社祭礼ニ付、主人代参被申付罷越候留主

也」

一 同日小川江樫木貫平・松本了一郎被参、于今滞在之由、

同日小原江田宮庄兵衛・有瀬林藏、尾八重江万江团右

衛門・高松本右衛門于今滞在之由、

一右召捕之時分、人吉領境迄家老那須四方介、郡奉行片

岡一二、下役西次左衛門大人數召連出張之よし、

人吉吹聴は椎葉山へ浪人入込候ニ付出張と申事之よし

一右四人之者召捕之義は、主人江は無沙汰ニテ跡達而、

用達杉田市右衛門より為知有之候よし、

一米良城下也小川江書役貫平・了一郎より在所留主居役人米良亘江

書付を以被達候よし、写

覚

米良要人

米良英一郎

甲斐豊前

同 大蔵

右御吟味筋有之、人吉表江被召寄度、則被召捕候、右

ニ付山中取騒不申静謐罷有候様、御取計可有之候事、

一四人之仁、宿元之儀慎罷有候様御申達可有之候事、

一右同所紛失物等無之様、敵重御取計可有之事、

一小原・尾八重江御老人ツ、御出、右之趣御取計可有之

事、

一小原江田宮庄兵衛・有瀬林蔵、

一尾八重江万江団右衛門・高松本右衛門、

右之通居殘取鎮方致し候間、夫々御談合可有之事、

メ

十一月十三日

一右之貫平・了一郎より亘江書付を以御達、写

覚

甲斐豊前

右日野左一へ御預

甲斐大蔵

右山北彦治へ御預

米良英一郎

右中村友輔江御預

米良要人

右片岡七郎右衛門江御預

右之通ニ候事、

十一月

右両条之儀は、別段人吉方ニ於主人江は達し有之候哉

存不申候、

十一月十五日

一 小原江松本了一郎被參、上京一件諸書付家内中吟味有之候由、然し紛敷物一向無之候よし、

夫より尾八重江も被參、吟味有之候得共、紛しき物一向無之よし、

米良英一郎宅も吟味有之候へとも、紛しき物無之よし、

十一月十九日

当地江飛脚参り、亀之助殿一先被罷帰候様、主人より

直書参り候事、

右返書仕出し

別紙之通

十二月九日

在所より飛脚参り、是非被罷帰候様申来候事、

右申来り候ニ付、両度迄被申越、無是非一先被罷帰度、依之伊集院氏江御取次御頼申上置候、

横帳原寸 縦一三糎 横四〇・五糎 四枚

一四三 土岐新兵衛ヨリ生産方掛裁許掛衆へ

長藩宍戸備後介申開ノ件

(端裏朱書)

乙丑十二月六日

小倉より

土岐新兵衛」

長州家老宍戸備後之介事、芸州広島江被召出、幕役御糺明相成、其場之次第等承得候形行、左ニ申

上候、

毛利大膳父子、昨年御征伐被 仰出、各国出勢之上、

致伏罪候得共、尚亦御疑惑之廉々有之、御尋之趣被為

在候付、末家并家老共之内致上坂候様、先達而より度

々被 仰達候処、長防之者共、殊之外狐疑を懐キ、何

角と申立、御召ニ不応候付、篤と御諭有之候ニは、自

今激徒之者共、疑惑を生シ不致上坂候は、自然幕役人

山口其外何方迄も御踏入、大膳父子は勿論、諸隊共迄

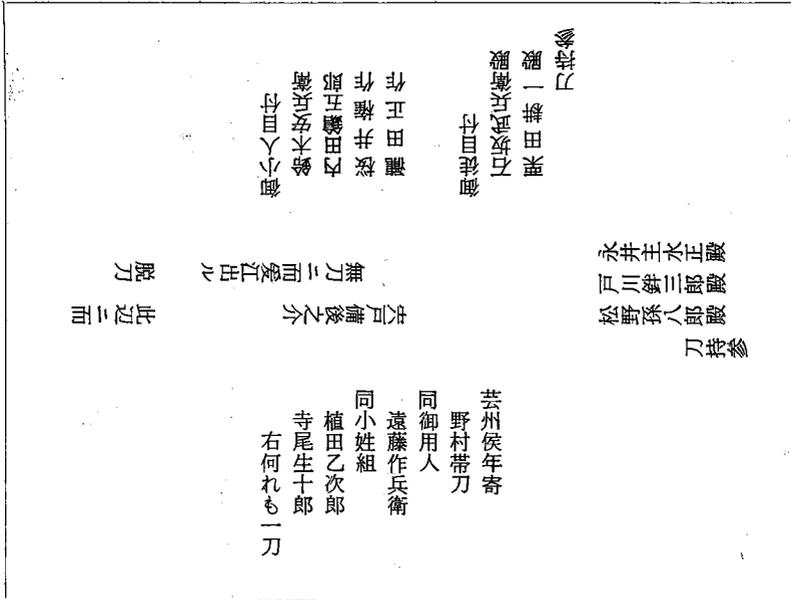
も被召出、道理を以御詰問可被相及、為被 仰渡由候得共、今度四路之正兵御差向ニも相成候趣致伝承候処より、弥嫌疑を起し候哉ニも相聞得候付、兎角政府ニは、其法則被為在候儀ニ而、御人数御差向とは乍申、敢而善悪邪正之無御差別も、不法ニ御打入等之御振舞不被為在候旨、尚亦被 仰諭候処、右様之御達ニ承服致候哉、長州家老宍戸備後之介始其外之者共、上坂可仕旨申出候段、芸州より申出候付、同所江留置候様御達相成居、先月中旬大目付永井主水正殿、御目付戸川(友徳)銚三郎殿・松野孫八郎殿其外幕役数十人、芸州広島江御到着ニ而、先月廿日同所国泰寺と相唱候寺江、右備後之介被召出、御糺問之次第左之通、

- 一山口新城再修覆之事、
- 一伏罪中出馬之事、
- 一吉川始召ニ不応事、
- 一外夷と和親致候事、

付壬戌丸外夷江壳渡し候事、

右四ヶ条御糺明相成候処、備後之介流るが如致申開候由、然ニ壬戌丸外夷江壳渡候儀は全不存儀ニ而、始而承知仕候段申出候由、尤右申開之儀は未相洩レ不申由候得共、長州奇兵隊之内重立候者、御用召之御沙汰有之候処、右御請は為申上由候得共、別而致当惑候面色相願候由、右通ニ而、先ツ御用相濟候処、備後之介事出国之砌ニは切腹ニ而も被仰付候儀と致覚悟候処、心外穩和之御糺明ニ而、再生之心持いたし候旨、宿所江歸り、家来共江申聞候由、尤永井殿御沙汰ニ、昨年より長州之者共致糺明候得ども、備後之介程之者無之旨御沙汰為有之由、

十一月廿日於広島、宍戸備後之介御糺明場之次第
略図



右は当小倉藩川島再助・吉川種次郎事、今度右次第御
 糺明ニ付、為探索方此内より芸州広島江差越居候処、
 右御糺之次第、当所出張塚原但馬守殿江、永井殿より
 被仰越候趣有之、先月廿五日広島出帆、昨昼時分当所
 江致着候由ニ而、今日前条旁之形行承得申候間、為御
 見合此段申上候、尤右御糺之儀は初而之事ニ而、一通
 り之御糺ニ候得共、追々は御疑惑之廉々、せり詰たる
 御詰問ニ可相成向ニ被伺候由承得申候、
 一先日御届申上候通、模様次第御打入ニ付、左之御人数
 軍目付割替被仰渡候由、

- 井伊掃部頭様 (直惠)
- 軍目付 朝倉藤十郎 (安斐)
- 脇坂淡路守様 (慶順)
- 同 黒田五左衛門 (慶順)
- 同 細川越中守様 (慶順)
- 同 長坂血鎗九郎 (慶順)